
天然探偵 LEN

二上 ヨシ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天然探偵 L E N

【Nコード】

N 2 9 7 8 N

【作者名】

二上 ヨシ

【あらすじ】

大財閥の坊ちゃんでありながら、自分探しをしたいと高級ビルディングの最上階で探偵業を営む青年、河合憐。整った顔立ちとすばらしい頭脳を持つ彼だが、どこか抜けている。そんな彼をサポートする美形少年、夕霧と、顔と胸だけが取り柄の勝気な少女、双葉。そんな三人が、赤字を出しながら事件を解決へと導く。 推理物ですが、残酷描写は極力ナシの方向で……。

File : 1 - 1

青年実業家の依頼（前書き）

少し加筆修正……

超高層ビルの立ち並ぶオフィス街には、折角の休日にも関わらず会社へ向かう、サラリーマンやOLたちの姿があった。雑踏の中、彼らとて、好きで休みにスーツを着用しているわけではない。

取引先との事情やら、会社での人間関係やら、止むに止まれぬ事情を抱えながら、ひたすら帰宅後の一杯のビール（と呼んでいる発泡酒）の味を想像して、進まぬ足を動かしていた。

そんな彼らの遙か頭上にて、模型のような街並みを見下ろしながら、ため息をつく一人の男がいた。

「今日も依頼人は来そうにないな」

男の名は河合憐^{かわいれん}。180cmを越す長身で、がっちりとした胸板と、モデルのようにすらりとした長い足。端整な顔は、男女を問わず彼にしばらく釘付けになってしまっただった。

とは言え彼自身は女性関係にかなり疎く、言い寄られたところでホイホイとついていくような軽薄さも、自分から食いついてゆくような貪欲さもない。ひとたびセクシーな服を着た女性に出くわせば、頬を紅くして視線を泳がせてしまうような、純情な男だった。

オーダーメイドの着心地のよい、滑らかな表面のスーツに身を包み、今日も依頼を待つ彼は、しがない探偵業を営んでいた。

その名を、河合探偵事務所 千本木ヨルズオフィス。

”千本木ヨルズオフィス”とは言っているものの、別に渋谷店や新宿店、北千住店があるわけでもない。ただ名前に場所がついていると、分かりやすいだろうという、少々の外れな彼の優しさによるものだった。

ちなみに千本木ヨルズとは、オフィス街でもひときわ目立つ、百階建ての高級高層ビルである。中には、専属トレーナーの付くフィットネスクラブ、名だたる一流シェフが集まるレストラン街、あの大物政治家も御用達のバー、ここでしか買えない限定品が売りのブランド直営店、最新ものから無声ものまで観られる映画館。さらにはセレブの奥様に大人気のエステティックサロンに広いアリーナ、世界の本が読める図書館にテレビで人気のカリスマ主婦の経営する託児所も完備されていた。

一流を凝縮したようなこのビルに、オフィスを構える者、隣接するレジデンスの入居者を、一般の人々は、羨望と嫉妬を込めて、ヨルズ族と呼んでいた。

そんなヨルズの最上階、ワンフロア丸々に事務所を借り切っているのが、例の探偵事務所の所長、河合憐だった。

憐の父親は世界を股にかける大財閥の会長、河合恒かわいわたるである。幼いころより何不自由ない生活を送り、また数々の英才教育を施されてきた。

その甲斐あってか、憐は日本最高峰の高等教育機関へトップで入学し、そのまま首席で卒業をしていた。彼の卒業論文は海外でも高い評価を受け、米国雑誌に掲載されたほど。世界からも引く手数多だったが、彼自身は自分の将来を未だ明確に描けずにいた。

敷かれたレールの上ばかりを、走っていたくはない。人のために

自分を活かす最善の道は何か。常々自問自答する憐の姿に、父親は猶予を与えてくれた。三年間、この千本木ヨルズの百階をワンフロア貸す。その間に自分の納得する道を見つけれ、とのたまう甘やかしぶり。

当初、事務所も自分で探すつもりだったが、父親は頑としてそれを許さず、それならば今すぐに河合グループの一員として腕を振るうようにと言われ、しぶしぶ承諾した。

探偵業を選んだのは他でもない。人々の様々な悩みを解消する手伝いが出来ると思ったから。それも金持ちに限らず、幅広い層の人間と関わりを持ちたいと考えていた。

ところがここは、かの有名な千本木ヨルズ。このような敷居の高そうなところへ、わざわざ探偵の相談に来る人間など皆無に等しかった。様々広告を出し、安価を売りにしていたが、“まさかあのヨルズの事務所が”と、どうにも信用されずにいるようであった。

憐が静かにため息をつく、厚いドアを叩く音がする。

「入れ」

「失礼します」

入ってきたのは、人形のようにきれいな顔をした、十代半ばほどの小柄な少年だった。白いシャツにネクタイ、サスペンダーのついた茶色いチエツクの半ズボンを履いていた。白人の血でも入っているのか、肌の色は透き通るように白かった。

彼は名を生辺夕霧いけへきゆうきりと言い、アメリカの大学を飛び級で卒業した優秀な少年で、憐の父親に引き抜かれて助手を務めていた。

「依頼でも来たか？」

半ばそんなことはないのだろうなと思いつながら、大きなデスクの黒い革張りの椅子を引いて腰掛ける。

「はい」

「そうか、やはり今日も……。ん？ 今“はい”と言ったか？」

幾日ぶりだろうか。思いもよらない返答に、憐はキョトンとした表情で聞き返し、夕霧はそれにコックリと頷いた。

「お通ししてもよろしいですか」

その言葉に憐は立ち上がり、乱れてもないネクタイを直し、依頼人を迎える準備をした。

「ああ」

夕霧はドアを広く開けると、一人の青年を招き入れた。美しい微笑を湛えたその男は、やけに落ち着いた表情で足を踏み入れると、宝石のように透き通った瞳を向けた。

憐はその男の様子に、僅かに違和感を覚えたが、

「初めまして。所長の河合憐です。どうぞお掛けください」

と丁寧に依頼人用のソファへ案内した。

男の名は柳本孝太郎やなぎもとこうたろう。アメリカの大学在学中に、IT関連の会社を単独で立ち上げ、卒業後にはヨーロッパを始め、海外に支社を持つほどに成長させていた。

「河合財閥の方にお会いできるなんて、光栄ですよ」

孝太郎は夕霧の運んできた紅茶を口に運びながら、誰もが思わず見とれてしまいそうになるような、魅惑的な笑みを浮かべた。

カーキ色の五分丈ジャケットにTシャツ、デニムパンツのシンプルな服装の男。一見すると何でもないようだが、どれもこれも最高級のブランド品。特に腕時計など、高級車に匹敵する値段のものだった。

「こちらこそ。それで、ご依頼内容は」

憐の真剣なまなざしを受け流すかのように、孝太郎は背もたれにもたれ掛りながら足を組んだ。

「実はストーカー被害に遭っております」

「ストーカー、ですか」

この男のこの容姿なら、十分にあり得ることだが、憐は男性にもそういうことがあるのかと内心驚いていた。

「そうなんです。会社へ押しつけてきたり、自宅やオフィス、携帯に無言電話が掛かってきたり、妙な手紙が届いたり。本来なら警察に行くべきなのでしょうが、こちら色々事情がございまして」

憐には、この男が本気で悩んでいるようには見えなかった。もちろん、依頼人の孝太郎が嘘をついているかと思っただけではない。彼の口もとに常にある笑みがそう思わせるのか、依頼内容の割に、

緊迫した様子は感ぜられなかった。

仕事があるから、と孝太郎は資料を置いて足早に帰っていった。その背を事務所の入り口まで送ると、様々思案しながら部屋へ戻る。残された茶封筒の中を改めようとした時、再びドアがノックされた。

「入れ」

助手の夕霧が、ドアの隙間からスツと入り込む。

「どうした」

「所長、依頼人がいらっしやいました。別の依頼人です」

本日で二回目。月に数人しか来ないこの事務所に、日に二人とは珍しいことと思いつつ、広告で認知度が高まっているのか、と前向きに考えることにした。

孝太郎から預かった資料を机にしまうと、夕霧に依頼人を通すように言った。

入ってきたのは、大学生と見られる女性。オドオドと辺りを見渡しながら、恐る恐る室内へ足を踏み入れる。

「こ、こんにちは」

察するにこの高級オフィスに気後れしているのであろう、落ち着かない様子でカバンをだき抱えるように持っていた。

「初めまして。所長の河合憐です。どうぞお掛けください」

孝太郎に言ったのと、全く同じセリフで女性をソファアールへと誘導した。

「お電話もせず、急に押しかけてすみません」

そう言って、軽く頭を下げる。

「あ、あの、チラシを見たんですけど……。その、ここに書かれている料金以外は一切不要なんですよね」

憐が発行したチラシをおずおずと、ローテーブルの上へ差し出す。いきなり料金を確かめる自分に羞恥を覚えたのか、少女は頬を紅く染めた。

「ご安心を。それ以外の料金をいただくことは、絶対にございませ
ん」

憐の言葉に安堵の表情を見せた。

女性は名を市川結衣いちかわゆいと言った。有名大学の文学部に通う真面目そうな学生で、ウェーブのかかったボブヘアにカチューシャ、白と黒のストライプのワンピースに、半そでのシャツにミュールを履いた落ち着きのある服装。大きな瞳に、時折見せる恥ずかしげな微笑が印象的だった。

「それで、依頼したい内容とは？」

憐の質問に、結衣の表情が一変した。両手でキュツとスカートを掴み、瞳には涙を溜め始める。

「大丈夫ですか」

憐は内ポケットからチェックのハンカチを取り出すと、結衣へ差し出した。

「す、すみません」

軽く目元を拭くと、精神を落ち着かせようと深く息を吸った。

「実は、最近ストーカーに嫌がらせを受けていて……」

余程怖い思いをしたのか、結衣の体は僅かに震えていた。

先ほどの孝太郎とは様子が大きく異なり、同じストーカー被害者でも、ここまで違うものかと思った。

「詳しいお話を聞かせていただけますか」

結衣はキツとテーブルをにらみつけると、白のショルダーバッグから携帯電話を取り出した。

「実は家の前で待ち伏せる男を、写メしたんです」

「見せてください」

憐は携帯電話を受け取り、ディスプレイを見て目を見開いた。

「これは……」

そこには本日最初の依頼人、柳本孝太郎の姿があった。

「それは奇妙ですね、所長」

夕霧は憐のデスクに、彼が好んで飲む、熱い緑茶を置いた。

結衣が帰ったあと、憐は難しい顔で資料と頭を整理していた。その背後を色とりどりの蛍が舞うように、車のライトやイルミネーションが暗闇に浮かび上がっていた。

「二人目の依頼人、市川結衣さんが撮ったというストーカーの写真には、同じくストーカー被害に遭っているという、最初の依頼人が写っていたなんて」

夕霧は静かに、携帯画像が映し出されたパソコンの画面へ向ける。

「つまり柳本氏の依頼は嘘で、自身がストーカーだった……ということでしょうか」

憐は何も答えず、考え込むように眉をひそめた。

その時メールの着信を告げる電子音が、デスク端のパソコンから奏でられた。デスクトップに現れた、新着メール受信ボックスを開く。

「柳本氏からだ」

メールの件名には、“追加資料”とあった。

本文には、“これでさらに、調査がしやすくなるかと思えます”。と記載されており、その添付ファイルをクリックした。

「動画、防犯カメラの映像だな」

送付されてきた画像を、真剣なまなざしで検証した。

そこは孝太郎の経営する会社のビル入り口。回転扉から中へ入ってきた、女と警備員が、押し問答をしているようだった。それを探知したカメラが、その二人へズームしてゆく。画面いっぱいにはつきりと映し出される女は、紛れもなく結衣だった。

その表情はとても緊迫したもので、女の両肩を掴む警備員に必死に対抗し、その脇をなんとかすり抜けようと奮闘しているようだった。だがその内諦めたのか、恨めしそうに一度振り返って、結衣は回転扉の向こうへ消えた。

「どうということだ」

憐は肘掛に腕を乗せながら、口元へ手をやった。

「互いが互いをストーカーしている、なんてあり得ません。どちらかが、嘘をついているのでしょうかね」

「そう考えるのが自然だろうが、現段階では何とも言えん。まずは、二人の接点について調べるしかないな」

その言葉に、夕霧は静かに頷いた。

「ここ数日の調査結果ですが、どうやら柳本氏の交友関係は、多岐に渡っているようです」

艶やかな髪を左肩の上で一つに束ねた、17、8くらいの少女、双葉が手帳片手に調査内容を報告する。

黒のタンクトップがのぞく、白いドルマンからは、隠し切れないほどに豊かな胸の谷間が垣間見える。腰には太目のベルトを巻き、黒のミニスカートからは、すらりと色白の足が伸びていた。

「政治家や官僚、経済界の大物や芸能関係者まで。それに女性関係が強く目立ちます。これはそこから来たトラブルなんじゃないですかね」

双葉がやれやれと呆れたように、腰に手を当てた。

「そこから来たトラブル」?

具体的に頼む、とまっすぐな瞳を向けてくる隣に、双葉は「え?」と驚きと恥ずかしさをいり混ぜたような表情を見せた。

「で、ですからその、柳本氏は複数の女性とその、深い関係にあるようですよ……。その乱れた男女関係のもつれか何か、かなと」

そこは言わずとも察してくれ、と思う双葉の心情をよそに、隣はふむふむと頷いた。

「柳本氏は市川結衣さんとも、その、深い仲なのか？」

聞きづらいのか、憐はいすから立ち上がって、窓の外を望みながらそう尋ねた。

「いえ、そのような証拠は何一つ」

「では、他には何もなかったか？ 共通の友人や、行きつけの店など」

「出生地や出身校まで調べましたが、全く接点は見当たりませんでした。方やIT関連会社社長、方や一女子大生。街や、経済誌などで偶然見かけたとしか……」

「ふむ」

悩む憐の元へ、一本の電話が入った。

「所長、柳本氏からお電話です」

電話の向こうの夕霧に繋げるよう伝えると、憐が話すより早く、孝太郎の声が聞こえてきた。

「所長さん、今日発売の週刊誌、ご覧になりました？」

「週刊誌ですか？」

憐はちらりと双葉を見上げた。双葉は焦ったように、ソファアームに乗せていたカバンから一冊の雑誌を取り出すと、該当ページを憐へ

差し出した。

「有名IT会社社長、女子大生にストーカー疑惑”。これは……」

電話越しに淡々とした憐の声を聞きながら、孝太郎は週刊誌をデスクの上へ放り投げ、ネクタイを緩めながら窓へ向かった。

「いや、困りましたよ。一応名前は伏せてあるようですが、誰かは大方想像がつく。こんなデタラメな記事を書かれてしまうなんて、営業妨害もいいところです。朝から、確認の電話がひっきりなしで」

「念のため申し上げておきますが、我々は顧客情報を漏らしたり、調査の相手へ勘付くかれるようなことはしておりません」

「やだな。調査対象の女性がリークしたとして、所長さんのところを疑ったりなんてしてませんよ。ただ調査の進み具合は、どうかなのと思ひましてね。あの女性の素性くらいは、もう分かっているのでは」

ここで安易に、市川結衣の情報を与えるわけにはいかなかった。どちらがストーカーなのかも判断できてはいないし、仮に結衣の方がそうだったとして、この度の週刊誌騒ぎで怒った孝太郎が、何をしでかすとも言えない。

「現在調査中ですので」

分かっているともしないとも言わず、曖昧な言葉で憐は拒否した。

「あれ？ 依頼人の僕にも、教えてはいただけないと？」

予想外に、その声に不満が含まれているように思えなかったが、さすが若くして社長にまで上り詰めただけある。自分の真意を隠すのに、随分手馴れていると思った。

「裏を取り、全てが確実に判明し次第、お伝えいたします」

「ま、いいでしょう。楽しみにしていますよ」

受話器を通して、あの柔和な笑みが見えるような気がした。

「所長も、やはり柳本氏を疑ってらっしゃるんですか？」

電話を切るとすぐ、双葉がそう口を開いた。女性同士だから、という理由ではなく、双葉はあの真面目そうな結衣の方が嘘をついているとは思えなかった。

「オレは人を疑うことはしない。ただ、解消すべき疑問点を、無くす必要があるだけだ」

そう言いながら憐は引き出しを開け、茶色の封筒を取り出すと中ものを取り出す。例の市川結衣の写真のほかに、会社に届いた脅迫まがいの手紙や、無言電話や会社周辺での目撃情報の記録が入っていた。録音されたレコーダーもあったが、孝太郎の“もしもし”や“どなた様ですか”といった声以外には、何も聞こえなかった。

そこで憐はあることに気づいた。

「どうかされたんですか？ 所長」

憐の異変に気づいた双葉が、手にしていた資料を置いて憐を見つめた。

「なぜだ」

「何がですか？」

「このストーカーは、柳本氏の自宅へは行っていないようだ」

脅迫めいた、切手のない手紙はどれも会社で発見されたもの。自宅への無言電話はあるものの、そういった手紙が投函されたり、周辺にいるところを目撃されたりといったことは、記録上ないようだった。

「会社へ押しかけるくらいなら、当然家へ行ってもおかしくはないのに」

「柳本氏のご自宅は、最新の防犯対策がなされていますからね。通報システムが作動するのを、恐れたんじゃないですか？ というか、そう我々に思わせている、とか」

得意げに推理を披露するように、双葉は手帳を持った手を上下に軽く振りながら、納得するように頷く。

「最新の防衛対策……。そういえばあの送られてきた映像も、自動異常探知システムがついていたようだしな」

「それはそうですね。なんとと言っても柳本氏は、セキュリティ会

社の代表取締役CEOも務めていらつしゃいますから」

「セキユリティー会社の。そうか」

それで警察に届け出るのが憚られたのか、と思った。セキユリティー会社の社長がストーカー被害に遭っているのは、信用がガタ落ちだ。

「ですからご自身で試す意味も兼ねてあるのか、各種センサーや防犯カメラも多く取り付けられてあるようです」

双葉の話に耳を傾けながら、憐は机に広げてあった資料を丁寧に仕舞うと、次に結衣から預かったものを取り出した。

印字された脅迫まがいの手紙、いたずら電話に関する記録やそれを録音したものを丁寧に確かめる。

結衣のほうは無言電話ではなく、声を機械で変えた音声で録音されていた。男女の区別はつかなかったが、残されていた言葉は、結衣の一日の行動に関するものや、性的な言葉、交際を迫るような内容のものが主要だった。

「あんなイケメンがやってるとしても、嫌々気分になりますね。頭がおかしくなっちゃいますよ」

双葉は苦虫を噛み潰したような顔をしながら、手にしていた手紙をまるで汚いものかのように手放した。

「事の発端は、二ヶ月ほど前から自宅周辺をうろつく柳本氏に気づいたこと、とあるな」

「友人がいち早く察知して教えてくれたそうです。それで彼女も気をつけることができるようになったと。それでも行動が、徐々にエスカレートしていったようですが」

「二人の周辺の人間にも話は聞いたか」

「はい。ですが柳本氏は、会社関係者やその他友人への接触を禁止しているということでしたので、市川結衣さんの周囲に話を聞きました。やはりこの件に関して深く傷ついているようでしたが、それでも本人は健気に、授業やアルバイトにも休まずこなしているそうです」

「アルバイト？ 大学生の内から、随分と積極的に社会活動しているのだな」

「え、あの、大体の大学生はやってると思いますけど……。とにかく現在も週に三度、家庭教師のアルバイトをしています。自宅から歩いていける距離にあるそうなので、時間帯だけ早めてもらったとか」

「そうか」

憐はすっかり冷えた緑茶を口へ流し込んだ。

憐が書類を広げていると、ドアのノック音が響いた。

「入れ」

そう言って資料から顔を上げた憐に、例のごとく夕霧が姿を現す。

「所長、依頼です。どうやら緊急のようなのですが」

「依頼？ ……入ってもらえ」

普段なら喜んで招きいれるところだったが、何せ複雑な案件を二つも抱えていたため、一瞬迷った。だが、“緊急”の言葉に引っかかりを覚えて、拒否することはできなかった。

夕霧を押しよけるかのように、ズカズカと入り込んできた男は、汗だくで、ネクタイも緩み、血走った目の下にはクマが出来ていた。右手には黒のアタッシューケース。

「お願いします！ 助けてください！」

いきなり土下座するその男に、憐はいそいで駆け寄った。

「落ち着いてください。とりあえずソファへ」

足元のふらつく男を引つ張り上げ、ソファーへ座らせた。

「息子が……息子が誘拐されて」

男はポタポタと落ちる涙に、眼鏡を取って乱暴に腕で拭いた。

「警察には絶対に言うなって、それで私はこのアタツシユケースにお金を入れて……」

「落ち着いて、ゆっくりと説明してください。いいですね」

男は夕霧から差し出されたコップの水を、喉の奥へ流し込むと、深く息を吐いて口を開いた。

「昨日、家に帰ったら……部屋が荒らされていて、この置き手紙だけが」

受け取ったA4サイズの手紙には、新聞紙や雑誌を切り抜いて作られた文章が綴られていた。

「息子は預かった。誰にも言うな。返して欲しくば指定する電車の窓から、黒のアタツシユケースに入れた、一億五千万を投げ捨てる」。なるほど、ですが身代金にしては、随分と高額のようですね」

「私、自営業を営んでおります。昔は随分と羽振りがよかったです。ですが、最近は経営も傾いていて首が回らない状態で……。ですがそれを周囲に知られると、ますます状況が悪くなると、海外へ旅行したり、息子にもよい教育を受けさせ、今日まで経営難を隠しておりました。それがこんなことになるなんて！ とりあえず昔のツテ

やなんやて五千万はかき集めました。ですがあと一億なんて、今の私にはとても」

絶望のふちに立たされたかのように、男はソファから滑り落ちて、がっくりと膝をついた。

「残りは私が用意します」

「え？」と驚く男をよそに、憐は携帯電話を取り出すとどこかへ電話をかけ始めた。

「私です。今すぐに一億円用意してください。はい、では」

ピツと電話を切って男に向き直った。

「夕霧、まもなく屋上にヘリが到着するから迎えてくれ。ご安心を、これでお金の心配はありません」

あまりの手際と都合の良さに、男は呆けたように口を開けていた。

「良かったですね、中山さん。息子さんが戻ってこられて」

双葉は客用ソファアの背もたれにこしかけ、憐に向かってそう言った。

「良いわけではない。中山氏は我々の同行すら拒否し、犯人にまんまと逃げられた。お金盗られて、もう会社は潰れるしかないし、これから暮らしていくのに貯金もない」

憐へ緑茶を運びにきた夕霧が、表情を崩さずそう痛言した。

「そ、それはそうだけど」

弱ったなと双葉は、誤魔化すようにタンクトップの位置を直した。

「そうやって勝手に思い込んで、実質が見えないようじゃ、いつまで経っても半人前」

「わ、悪かったわね！」

その会話を聞くでもなく耳にしていた憐は、突然何か気づいたように電話をとると、どこかへ電話をかけた。

「河合探偵事務所です。実は二、三確認したいことが」

どこへかけているのか分からなかったが、どこか興奮気味に思えた。

「ご自身ではない、と。それと二点目の、あの方の家は……やはりそうでしたか。お手数をお掛けしました。では後ほど」

電話を一旦切ると、憐はまた別の所へ電話を掛けて受話器を置いた。

「あの方の家って？ あの、所長？」

勢いよく立ち上がった憐に、二人は驚いたように見やった。

「今から市川結衣さんを迎えに行く」

真っ直ぐなその瞳には、絶対の自信が溢れていた。

「え、今からですか？ あの、所長？」

二人はスーツのジャケットを羽織ながら駆け出す、憐の後を急いで追った。

冷たいコンクリートだけの、だだっ広い地下エリア。ヒンヤリとした空気が肌を撫でた。

「何もない……」

双葉がここは何だろう、と辺りを見回す。まさか鍛錬施設ではあるまい。

憐は壁際に下ろされた、いくつもの黒いシャッターの内の一つへ近づき、その傍のカードリーダーへ部屋のカードキーを通した。ランプが赤から青に変わると、エレベーターが昇降するときのような音が聞こえてきた。

やがてゆっくりとシャッターが開くと、中からすでにエンジンがかかり、ヘッドライトのついたブルーの車が、まるでモーターショーのように、下から照らされた照明の中にお目見えした。

「行くぞ」

三人が近づくと勝手にドアが開き、憐は運転席、夕霧は助手席、双葉は後部座席にそれぞれ乗り込んだ。

滑るように車は走り出す。

そんじょそこらの椅子とは、比べ物にならないほどに、座り心地のよいクリーム色の本皮シートに腰掛ける。柔らかな素材が、そこへすわる者をそっと包み込む。

グレーの本木目パネルに取り付けられたカーナビが、乗車してきた人間を感知し、電子音と共に姿を現した。憐はそれを、前方から視線を外すことなく操作すると、カーナビと連動する、青色LEDの美しいグラフィックのメーターに、矢印が浮かび上がった。

職人が一つ一つ手で仕上げた、革のステアリングが手にフィットするのを感じながら、アクセルを踏む。

後部座席は、リラグゼーションシステム付きのリクライニングシートのように。前の座席のヘッド裏には、無段階に角度調整のでき

る小型液晶がはめ込まれており、となりの席との間には、格納式の小さなテーブルが取り付けられていた。

それを前へスライドさせると下からDVDやCD、デジタル音楽プレイヤーにラジオの操作盤とヘッドフォンが二つ丁寧に収納され、さらにシートとシートの間には、小型の温冷庫が設置されていた。

「す、すい……」

さながら走る小さなホテルに、双葉が呆然としてみると、目の前の液晶に“シートベルトを着用してください”と警告が出る。

「は、はい。すみません」

何だか自分よりこの車の方が偉いような気がして、双葉は軽く会釈しながらシートベルトを締めた。

「所長。なぜ彼女を迎えに？ さっきの電話は一体……それにどこへ行くんです？」

通り過ぎるいくつものヘッドライトの中、双葉が浮かぶ謎を次々にぶつけた。

「疑問点は全て解消された」

「全てって、二つのストーカー事件と、この度の誘拐事件のことですか！？」

双葉は身を乗り出すように、憐へ話しかけた。

「ああ。今から皆に真実を伝える」

「え!?!」

その後はすっかり黙り込んだ憐に、双葉はどこか落ち着かない様子で、流れ行く景色を眺めた。

結衣を拾ってホテルの駐車場へ滑り込んだ。

「あ、あの……」

不安げな表情の結衣の背に、双葉が優しく手を添えてやった。

直通のエレベータに乗り、スイートルームのプレートが掲げられた、立派な観音開きの扉の前に立つ。そこで憐は、結衣をそつと振り返った。

「念のため申し上げておきますが、どうか取り乱されないよう」

首を傾げる結衣に構うことなく、憐は軽くノックした後、マスターキーを差し込んでその部屋の扉を開けた。

スクリーンのような大きな窓を望む一人の男。夜景の広がる街並みに溶け込むかのように、右手を後ろへやりながら、赤色灯だけのセピア色に彩られて、どこか幻想的な雰囲気をかもし出して佇んでいた。

静かに扉が閉められると同時に、その男が振り返る。

「やっとお会いできましたね」

グラス片手に笑みを零す孝太郎に、結衣は両手を握りしめた。

「あなたは……！ このヘンタイ！ あんなことしておいて、よくもそんな風に笑っていられるわね！」

今までの鬱憤を晴らすかのように、結衣は孝太郎へ詰め寄った。

孝太郎は笑みを絶やすことなく、グラスをテーブルへ置いた。

「やっぱり、映像でみるより綺麗な方だ」

結衣はあまりの言葉に、孝太郎の頬を掌で打った。

「ねえ、この場に及んで、まだそんなことを……？」

耐え切れず涙を流す結衣に、双葉が近寄ってハンカチを渡してやった。

「泣かせてしまつて申し訳ありませんが、僕にはあなたのおっしやつてということが理解できません」

「何言つて」

「だつてそもそも、君が僕をストーカーしていたんでしょ？」

その一言に、結衣はしばらく言葉を失った。

「私が？ どうして私が、ストーカーをストーカーする必要があるんです！」

「ですから、僕はあなたをストーカーした覚えなんてありません」

「そんな……」

混乱する二人と双葉は、憐へ一斉に視線を送った。

憐は興奮気味だった空気を冷ますかのように、穏やかに口を開いた。

「今回のキーワードは思い込み。先日起こった誘拐事件、その身代金を狙った犯人が、このストーカー事件の鍵を握っていたんですよ」

「え!？」

その言葉に、皆は驚きの声を上げた。

「所長、どういうことですか？」

「ストーカー事件の始まりについて、覚えているか」

憐にそう言われ、双葉は考えるように視線を上へやった。

「えっと確か結衣さんのケースでは、自宅をうるつく男を友人が目撃……でしたね」

「そう、そして先ほど電話で確認したが、柳本氏の場合は、会社への押しかけ情報を聞いてからだった。そうですね」

「ええ」

そのやりとりに、夕霧がポツリとつぶやいた。

「……どちらも、他人の言葉から始まっていますね」

「その通り」

憐は夕霧を力強く見やった。

「刷り込み。自分たちがストーカーに遭っている、思わされていたということだ」

「でもその後、変な内容の手紙や、無言電話が掛かってきていますし」

双葉の反論を、夕霧が受けた。

「重要なのは“誰に”それをされていると感じるのか、ということですね。市川結衣さんは“自宅周辺をうろつく男”が犯人だと思うだろうし、柳本氏は“押しかけてきた女”が犯人だろうと思いつむ。なぜなら、以前疑わしい人物について聞かされていたから」

「ああ。そしてその思い込みは我々をも縛っていた。待ち伏せしていた人物、防犯カメラの人物。彼らそれぞれが手紙やイタズラ電話の犯人だと、無意識に決め付けていた」

「それじゃあ、犯人は……」

双葉の言葉を遮るように、憐の携帯電話が震えた。それを取って二言三言、会話を交わす。やがてそれが終わると、憐は四人に向き直った。

「その前に一人、客人を紹介しよう」

憐は出入り口の扉をそつと開けた。

「中山さん」

「柳本社長！」

誘拐事件のことで、憐の事務所へ来た自営業の男に、孝太郎は驚きの表情を見せた。同じく男も、見知った顔に意表を突かれたようだった。

「それに息子の家庭教師の結衣先生まで。一体どういうことですか？」

状況を把握し切れていない男を招き入れると、憐はリビングに置かれた、60型程の薄型液晶テレビのリモコンを手に取り操作しながら口を開いた。

「柳本さん、あなたが彼女の自宅周辺を歩き回っていたのは事実です」

「所長、ですから僕は」

「いえ、知らず知らずのうちにそうなっていたのです。見てくださ
い」

憐がテレビに映し出したのは地図。

「結衣さんのお住まいはここ。そしてここからさほど遠くない辺り

に、中山さんの家がある。ここです」

憐は該当箇所を指し示していく。

「ああ、そういうことですか」

孝太郎は腕を組み、テーブルにもたれ掛かってふつと笑った。

「結衣さん。柳本氏は、あなたの家を見るためにうろついていたんじゃない。中山氏の自宅を、見回っていたんですよ」

結衣は急な展開についていけず、何か言いたげに唇を動かしたが、声がでてくることはなかった。

「ちょっと待ってください！ それじゃあ誘拐を仕組んだのって…」

…」

「違う」

双葉は言葉にする前に夕霧に否定され、言おうとしていたことを飲み込んだ。

「この一連の事件で大事なものは、あくまで市川結衣さんと柳本氏に特定の人物からのストーリーカーを喚起させた人物。つまり」

コンコンコンとドアがノックされた。

憐がドアに近寄り、そつと開く。

「どっぞ」

そう促され、足を踏み入れる人物に、皆の視線が集中した。

憐の手によって招き入れられ、その影から若い男がリビングに姿を現した。

黄色いTシャツに、ジーンズのラフな格好の青年。

見覚えのある顔に、結衣と孝太郎の目が見開かれた。

「ダイ君！」

「君は確か、警備員の……」

その二人の反応に、青年は焦ったような表情を浮かべた。

逃げ出そうとしたところを、憐がその腕を掴む。

「どういうことだ！ あんたストーカーの件について話すって、言っただじゃないか！」

「嘘はついていない。第一、なぜ君はそんなにも焦っている」

冷静な憐に、男は乱暴にその腕を振り払った。

「だ、ダイ君？ どうして？ あんなにも真剣に、ストーカーの相談乗ってくれてたじゃない……。それなのに、あの変な手紙も電話

も、全部ダイ君だったの？」

ハラハラと舞い落ちる涙をみた青年は、わざとらしい笑みを浮かべた。

「ち、違うよ！ 僕は結衣ちゃんの味方だって！ こいつら全員グールになって、僕を陥れようとしてるんだ！ 僕は何一つ悪いことなんてしてないよ」

訴えかけられる言葉全てを信じる事が出来ず、結衣は膝をついてうずくまった。

結衣のすすり泣く声が聞こえる中、憐が真相を語り始めた。

「事の始まりは、中山氏のご子息誘拐事件の企てからだ。会社の経営に給する中、中山氏も奥様も、遅くまで帰れない日々が続いていた。まだ一人で食事の用意ができない小学生の息子さんを心配した夫妻は、近所に住む親戚に頼み、二日に一度夕食を作りに来てもらい、どちらかが帰宅するまで付き添ってもらうよう頼んでいた。親戚の来ない日は、結衣さんに用意してもらっていたのでしよう。その後家庭教師の勉強を始め、ご夫妻どちらかの帰宅時間となる。下校途中も友人と一緒に、そのままでは息子さんを誘拐することは出来ない。そこで君は考えた」

憐の鋭い眼光が青年に突き刺さる。

「結衣さんに、ストーカーにつけ狙われていると思わせ、時間帯を早めさせた。食事を用意したあと帰宅する彼女は、ご夫婦が帰られるまでは一人。そこで誘拐のチャンスができるわけだ。そしてこのでっちあげられたストーカー事件は、もう一つの意味を持っていた。

そう、次なる障害解決のための」

「次なる障害……もしかして、家のセキュリティシステムですか？」

双葉の答えに憐は首肯した。

「そつだ。そしてそのセキュリティを担っていた会社の社長が、柳本氏」

憐の視線を受けて軽く頷く。

「だが中山氏は財政難により、これを解除したがっていた。そうでしたね、柳本さん」

「ええ、さきほど電話で答えたとおりです。でも僕が止めました。あれだけの家、セキュリティシステムがないと分かれば、必ずよからぬ事をたくらむ輩に狙われるだろうと思ひましてね。それでもやはりご納得いただけなかったようなので、せめて本当に必要な部分だけに絞ろうということ、中山さん邸、及びその周辺の危険箇所を、提案した僕自ら探っていたんです」

「私はそれを……つけ狙われていると、勘違いしてしまったんですね」

恥ずかしそうに俯く結衣に、孝太郎は優しい笑みを向けた。

「彼はそんな柳本氏が邪魔だった。そこで、このストーカー事件を活用する。柳本氏の信頼が失墜すれば、中山氏は迷わず契約解除に踏み切るだろうと考えた」

「確かにストーカーしている人間の提案したセキュリティなんて、怪しくて使えませんよね……。ですが所長、それなら別に、結衣さんが柳本氏をストーカーしているなんて、思わせる必要ないんじゃないですか？」

「これはあくまで推測だが、結衣さんは初め、警察やそのほかの調査会社へ被害を申し出るのを、躊躇していたのだろう。おそらく逆恨みした犯人が、家族や友人へ手を出すのを恐れて。柳本氏の信用を落とすには、それが表ざたにならなければ意味はない、刻々と変わる状況、時間もない、それなのに結衣さんは行動を起こそうとしない……。そこで犯人は考えた。それならば、柳本氏から探させればいい。二人が出会えば必ずトラブルになる。互いが互いをストーカーとなじり合い、事は大きくなるはずだ、と」

「最低ですね」

双葉は、軽蔑を言葉に込める。

「そこで警備員の立場を利用し、“いつも同じ女性が会社の前をうるついていますよ”、と柳本氏に吹き込み、それから無言電話や手紙を送りつけた。だがそれでもうまくは行かなかった。なぜなら二人が同じ探偵事務所、私のところへ来てしまったからだ。二人の間が、互いのストーカーである奇妙な状況を知っている。だから私としても、簡単に相手の情報を教えたり、引き合わせるわけにはいかなかった。そこで犯人は、仕方なく自ら行動に出ることにした」

「それが週刊誌ですか」

孝太郎は、心底あきれたような視線を青年へ送った。

「ええ。身元が割れぬよう公衆電話を使ったが、雑誌社協力の下でこのものを使ったのか調べ、その時間帯、そのエリアの防犯カメラを調べた結果、君と見られる人物が映し出されていた。これらは全て状況証拠ですが、君の周辺を調査すれば身代金の一億五千万が発見されるはず。札の番号を照会すれば、確実な証拠に」

「ああ！ そうだよ！！ でもこれは全部……全部お前のせいだ結衣！」

隣の言葉を途中で遮り、青年は狂気に満ちた、血走った瞳を向けた。

「わ、私？」

「とぼけるな！ お前が言ったんじゃないか！ お金持ちになりたいって！ 大きな家にすんでみたいって！！ だから僕は！」

「そ、そんなの誰だって憧れるでしょ？ それに私、ダイ君に向かって言ったわけじゃ」

「うるさいウルサイうるさああい！」

「だ、ダイ君」

友人の壊れた姿に、動揺と恐怖を覚えた。手足は震え、怒りと悲しみの入り混じった感情が結衣の中に渦巻いていた。

「もうオレの人生はオシマイだ。だから結衣？ 一緒に死のう」

下卑た笑いを浮かべナイフを取り出すと、一直線に結衣に向かっ

て突進していった。

「きゃあああ！」

恐ろしさに目を瞑る結衣。そのとき憐が鮮やかな手つきで太生の腕を掴み、捻りあげて床へ叩きつけた。青年の腕を背中へ回して押し掛かり、動きを完全に封じる。

「放せ！ 放せえええ！！ 結衣！ 結衣！ 何で僕の気持ちに分からない！ こんなことに、手を染めるほどに愛してるのに！！」

「お前は、どれだけ彼女を傷つければ気が済むんだ！」

未だに暴れる男に、珍しく怒った憐の怒声が飛んだ。

「本当に一番大事なものは……たとえどれだけ自分が傷つこうとも、それを護ろうとするもの。お前が護ろうとしたのは何だ！ お前の気持ち、お前自身じゃないか！」

憐の言葉に、青年は反論できない悔しさを滲ませていた。

「そう、お前が真に愛したのは、彼女じゃない。お前の中の、欲望だ」

震えながら拳を握りしめる青年の涙が、柔らかなカーペットに染み込んでいった。

既に呼んでいた警察に連れられていく青年の背中を、結衣は悲しそうに見つめていた。

「あの、結衣さん？ 一つ気になったのですが」

そんな結衣を支えるように寄り添っていた双葉が、おもむろに口を開いた。

「何と言われて、柳本氏の会社へ乗り込んだんです？ あの男が、結衣さんの姿を防犯カメラに映させるためにおびき寄せたのでしょうが、それにしても鬼気迫る表情で……」

そのときの様子を思い出したのか、結衣は恥ずかしそうに俯いた。

「あ、あれはその……、実は友人が、男性に遊ばれて捨てられたって聞いて。ダイ君にその男性があのか社の人だって言われたものですよから、いてもたってもいられず、あのような醜態を。結局入り口で、ダイ君に追い返されたのですが……」

「恥ずべきことではありません。友人のために、あそこまでしてあげられる方も珍しいと思いますよ」

孝太郎がそつと結衣のとなりへ移動する。

「あ、あの柳本さん、申し訳ありませんでした。勘違いして、ぶつたりして」

深々と頭を下げる結衣に、孝太郎は楽しそうに殴られた箇所へ手をやった。

「いや、確かに結構ききましたよ」

その言葉に、結衣は心底申し訳無さそうな表情を浮かべた。

「もちろん、このお詫びはしていただけるんですよね？ 結衣さん」

美しい微笑みを浮かべ、手を差し出す孝太郎に、結衣は顔を紅く染め上げた。小さく頷いて笑顔を見せながら、そつとその手を取った。

「あの、所長？ あれ止めたほうがいいんですかね」

双葉がそつと憐に耳打ちする。

「だってあの人の女性関係、本当に尋常じゃないんで」

「心配ないだろう。柳本氏は依頼に来たその時からすでに、結衣さんに心惹かれていたようだったからな」

「え？ そんなこと言っていました？」

「言わずとも分かる。でなければあんな顔でストーカー調査の依頼に来たり、報告を楽しみにしたりしないだろう」

「なるほど……。って今回はストーカーじゃなかったものの、随分と変わったご趣味で」

双葉は複雑そうに見やったが、幸せそうに手を繋いで見つめ合う二人に、これでいいのかもしれないと思った。

「とうとうわけで、犯人も無事捕まって、事件は解決したものの、広告どおりの大した依頼料も取れず……ウチは相変わらずの赤字です」

事務所のデスクで、静かに本を読む憐を前に、双葉は息を吐いた。

「もう、所長！ 聞いてます？」

その時ドアのノックオンが響き、夕霧が姿を現した。

「夕霧。依頼か」

本を閉じた憐に、夕霧は盆を見せた。

「いいえ、お茶です」

その一言に、やや空気の緩んだ事務所。

おいしそうに緑茶を飲む憐に、双葉はまあいいか、と微笑んだ。

矛盾等あれば、こっそり教えてください……（……）

朝日の差し込む、広く殺風景なオフィスは、すがすがしい空気に満ち足りていた。

憐はデスクに座って、熱い緑茶をすすりながら、山積みになった新聞や雑誌に目を通していた。

「それにしてもあの件以降、全然依頼来ないですね、所長」

客用ソファアの背もたれに顔を寄せ、双葉はふて腐れたように憐を見やった。「あの件」とは先日請け負った二重ストーカーと誘拐事件のことで、あれ以降少しは依頼が増えるかと期待したが、やはりそううまくはいかないようだった。

「事件がないことはいいことだ。世の中が平和だからな」

のんきなことを言いながら、憐は雑誌から目を離さず、次々とページをめくってゆく。

「いえ、世の中は乱れています、誰もウチに頼みに来ないだけです」

そう言って退屈そうに髪を弄ぶ双葉に苦笑いし、憐は雑誌に視線を戻すと、ある記事を見てピタリと動きを止めた。

「そつだな。確かに世の中は乱れているようだ」

そこには、記事と共にトランプのジョーカーの写真が掲載されていた。奇妙なピエロの影絵に、アルファベットのMと逆さまのJが、それぞれ左上と右下に印字されているのがはっきりと分かる。

「Mr・ジョーカー再来か。頻発する爆発事件と残されたカードの謎」

憐の様子が気になった双葉が、その背後から雑誌を覗き込んで記事を読んだ。ゴシップを専門に取り扱う雑誌の、面白おかしく書き立てられたヘッドラインに、双葉はすこし興味が沸いたようだった。

「所長、誰ですか？ Mr・ジョーカーって」

「そんなことも知らないの」

いつの間そこにいたのか、夕霧が書類を手にドアの前に佇んでいた。

「悪かったわね、誰かさんみたいに物知りじゃなくて」

双葉は新聞から顔を上げると、ふくれっ面で腰に手を当てた。

「Mr・ジョーカー。1800年代後半に現れた謎のゲーマー」

「げ、ゲーマー!？」

思いもよらぬ説明に、双葉は思いのほか、大きな声を出してしまった。だが憐も夕霧も、特にそのことを気にした様子はなく、安堵したように、話を続ける夕霧を見つめた。

「ヤツは世界各国に出没し、その度に爆弾を仕掛けては、大勢の間を殺害した。世間では凶悪な爆弾魔だと思われてるけど、そうじゃない。爆発はあくまでゲームオーバーを示すもの。重要なのはそこまでの過程。ヤツは標的にゲームをさせる。標的自身の命を^けbeさせて」

夕霧の口から淡々と語られる、Mr・ジョーカーなる人物の話に、双葉は信じられないといった顔をする。

「人の生き死を、ゲームなんかで決めるなんて」

一体どういう育ち方をすれば、それも冷酷になれるものか、と怒りにも似た感情が彼女を針のように刺した。

だがそこでふと思う。

「あれ？ 1800年代後半って事は、今から百数十年以上も前の話ですよね？」

「ああ、当然模倣犯だろう。Mr・ジョーカーが残したカードの模様も、ピエロではなく仮面と聞く」

そうは言いながらも、憐はどこかこの件を気にしているように見えた。

「今のところ死傷者は出てないようだけど、その内捕まる。ところで所長、郵便物が届いていました」

憐は開いていた雑誌を閉じると、夕霧に礼を言って、少々厚めの白い封筒を受け取った。

~~~~~ Invitation ~~~~~

「インビテーション……招待状？」

花柄の可愛らしい封筒にくつきりと書かれた英単語を、双葉はやや頭をかしげながら口に出した。

憐は引き出しからペーパーナイフを取り出すと、それを丁寧に開封していった。

本皮のしつかりとしたカバーを開くと、ふわりと花の香りのする用紙に、手書きと見られる美しい文体が綴られていた。

「拝啓、まだまだ残暑の厳しい今日この頃ですが……ふむ、高瀬財閥の令嬢が十六歳になられた事を祝し、船上パーティーが開催されるらしい。夕霧、この日は何か予定は入っていたか？」

「いいえ、所長。しばらくは何も」

「というか、返信用のはがきもないし、いきなりそんな大層な招待状送りつけくるし。出欠確認はナシなんですか？」

「どうしても来て欲しいんだよ、所長には」

うんざりとした表情を浮かべる夕霧に、双葉は「なるほど」と憐が大層その令嬢に気に入られてるらしいと悟った。

「うむ。確かに社交界での関わりは重要だからな」

だから違うって、と双葉は、憐の至極真面目な一言を心の中でそっと否定した。言葉として発せなかったのは、その“違う”理由を、明確に説明せねばなくなるからである。面倒でもあったし、そのお嬢様とやらにも申し訳ないような気がしたのだ。

憐は、どうやら二名までの同行人が許されるようだと知ると、二人へ楽しそうな視線を送った。

「お前たち二人も来るといい。こういう各界の著名人が集まる場は、興味深い話が聞けて良い勉強になる」

その誘いに、興味深い話とやらよりも、用意されるであろう豪華な料理を想像し、双葉はガッツポーズをしながら喜んだ。

「何その格好」

千本木ヨルズ地下駐車場のシャッターの前で、蝶ネクタイと黒い半ズボンのスーツに身を包んだ夕霧が、開口一番そう言った。

「し、仕方ないでしょ？ ドレスが無かったんだもん」

いつもと変わらぬ服装の双葉が、自分でも恥ずかしいと思っ  
ているらしく、俯いて視線をチラチラ泳がせる。

「一緒にいる僕たちが恥かくから、会場では傍によるな」

「何！？ この状況でさらにトドメの一言！？」

その時駐車場のガラス戸が開いて、隣が姿を現した。

体のラインにフィットしたイタリア製のブラックのスーツ。深みのあるワインレッドのネクタイが、黒のストライプのシャツに映える。左の胸ポケットには上品なシルバーのチーフが顔をのぞかせ、長い足をたどって視線を下へ送ると、光沢のあるレザーシューズが、奥ゆかしい女性のように存在感をアピールしすぎることなく、美しさを秘めて周囲を引き立たせていた。

「しよ、所長……」

いつもスーツ姿だが、今日はいつも以上に輝いて見えた。

「すまない、直前に電話が入って遅くなってしまった」

少し息を切らした憐が、二人に向かって謝罪の弁を述べる。

「どうかしたか？ 双葉」

ボーっと自分を見つめる双葉に、憐は不思議そうに首をかしげた。

「い、いえ、なんでも」

見とれていましたとも言えず、双葉は誤魔化すように手を左右に振って否定した。

「それより所長、双葉のこの格好……」

夕霧は後ろ手に手を組み、双葉を呆れたように見やった。

「す、すみません。ドレスが無くて……もしアレでしたら帰ります」

悲しそうに目を伏せる双葉に、憐はシャッター横のカードリーダーを通しながら、振り返った。

「なら買いに行けばいい」

Ｌのアルファベットが特徴のブルーの高級車が、エンジン音少な  
に、金座のとあるブランドショップの前に滑り込んだ。

「ここでもいいか？」

後部座席を振り返ってそう尋ねてくる憐に、双葉は焦ったように返事を返した。

「え、えっと……。そ、そうだこの先に、もうちょっと良いお店があったかもしれない気がしないでもないかも……」

見るからに高そうな匂いのするその店に、何とか別の所へ変えてもらおうと試みた。

「でももう時間ない」

「ちょっと夕霧、余計なこと……！」

「そうだな。双葉には悪いが、ここで決めよう。夕霧はここで待っていてくれ」

「はい」

シートベルトを外して車を降りる憐に、双葉は心で泣きながら貯金の残高を思い出していた。

「ゲ、何これ」

店内はとても明るくきらびやかで、色とりどりのドレスが並んでいた。だがどれも、ケタが一つ二つオカシイのではないか、と思え

るほどの値段に頭を抱える。目を血走らせ、必死に一番安いものを探した。

「決まったか？」

「あ、いえまだ……ど、どれにしようかな」

選ぶフリをしながら、憐の目を盗んでは、デザインやサイズよりも先に値札を確かめる。この際、マダム用だろうとキッズ用だろうと、構いはしない覚悟だった。

そんな双葉に、憐は余程ドレス選びに相当窮していると感じ取った。

「迷っているようなので、あなたの目で彼女に似合うと思うものを選んでやってください」

店員にそう頼む憐に焦ったが、双葉にとっては全くありがたくない。だが、完璧なまでの笑顔を浮かべる美人店員に連れられ、着替えさせられ、抵抗する間もなくフィッティングルームのカーテンが開かれた。

「どうだ、決まっ」

ドレスに着替えた双葉を見て、憐は一瞬で目をそらした。

「しよ、所長……」

双葉も恥ずかしそうに、目を潤ませながら憐を見つめる。



古代ギリシヤの服、ペプロスをモチーフにした、柔らかな素材のゴールドパールのドレスだった。胸元はへそのあたりまで大きく開き、胸を隠す細い布の左右から、隠し切れないふくらみがこぼれ見える。

スカートも正面がかなり高い位置から、パツクリと大きく左右に割れ、白い太ももが露になつており、少しでもかがめば下着が見るのではないか、とハラハラするくらいの露出度だった。

「そ、その、別のトレ、ドレスで似合いそうなものは……」

しどろもどろになつて双葉の方をなるべく見ないようにしながら、隣は店員に向かつてそう尋ねた。もちろん双葉もそれを支持する。見た目のこともあるが、値札のゼロの数の多さにめまいがしていた。

「申し訳ございません。他のものですと、バスタの辺りが苦しいかと。今すぐにご用意できるものとなると、このドレスくらいしか」

申し訳無さそうにする店員に、双葉はがつくりと頭を垂れた。

「そうか、ならそれで。支払いはこれで頼む」

「いつもありがとうございます、河合様」

店員は差し出された黒いカードを受け取ると、レジへと向かった。

「すみません、所長。立替えしてもらつて。ちよくちよくお返ししますから……何年かかるかわかりませんが」

「気にするな。それは、オレからのプレゼントとして受け取つておいてくれ」

「え？　そ、そんな、いけません、こんな高価なもの！」

「たまにはこんなボーナスもいいだろう？」

につこりと優しい笑みを浮かべる憐に、双葉は顔が熱くなるのを感じた。

「わあ〜すつ〜い」

日の暮れかけた紫色の空の下、ボーイによって開けられたドアから、潮の香りが吹き込んだ。

車を降りると、目の前に現れた全長約0・3kmもある真っ白な巨大豪華客船が、その堂々たる姿を現す。

本船は全部で14階層ございます。船内には各種様々な施設を整えており、例えば空腹を満たされたいのならば、海を臨みながら本格的なフレンチフルコースが楽しめる格式高いレストランはいかがでしょうか。フランスの名誉ある賞の数々を受賞したシェフが、自信の一品をご提供いたします。いいえ、和食が好みとおっしゃるならば、とれたての新鮮な魚介類に舌鼓の打てる高級寿司店が隣接しておりますので、ご心配なく。もっと気軽にというお客様には、さまざまな料理が味わえるビュッフェ形式をお勧めいたします。お子様にきつと喜んでいただけるでしょう。

さらに世界各国から取り寄せられ、厳選されたコーヒーや紅茶を味わいながらの映画鑑賞はいかがでしょうか。流行のハリウッド映画を数々上映しているシアターは、ゆったりとしたソファ椅子を配置しております。長時間お座りいただいても問題ありません。

大人のお客様は、ぜひセピア色のムーディーなライトの下、楽団の生演奏で踊りが楽しめるダンスホールへお越しく下さい。お一人でも大丈夫。専門のダンス講師がお相手いたします。さらに華やかなコンサートや芝居が観られる劇場の他、ルーレットやダーツ、スロットやカードゲームで遊べるラスベガスの空気漂うプレイルーム

は紳士淑女の皆様の人気でございます。

潮の風が気になるご婦人方へ、朗報です。本船はエステのサービスも充実しております。当然全て無料。ますます綺麗になってお帰りになられてはいかがでしょうか。

また旅のお土産と記念に、高級ブランド店の限定商品をご推奨いたします。他では絶対に手に入らないバッグやウォレットを手にすれば、あなたも注目の的になるに違いありません。

本船は、あなた様のお望みをきつと叶えられるでしょう。

心行くまで楽しまれたお客様には、最高の眠りを提供いたします。ツインのルームから、広々とした豪華なスイートルームまで、お好みに合わせてお選びください。各部屋のテーブルに用意された特製のワインには、本船が独自に栽培から製造まで手がけた自慢の一本でございます。あなた様のお口に合いますように。では本船で、夢のような旅をお楽しみください

双葉は隣の車のカーナビで聞いた船の説明を思い出し、期待に胸を膨らませていた。

(夢のような旅、か……)

闇に浮かび上がるライトが、そのバックに光る星よりも美しく輝いて見えた。今から明日までこの船で過ごすのかと思うと、どうしようもなく胸が高鳴る。

「タイタニックみたい、実物みたことないけど」

そうつぶやく双葉の背後で、隣は車をボーイへ任せて双葉のいるレッドカーペットへと足を進めていた。

「行く」

さりげなく差し出された腕に、はにかみながら応じた。しかしその背後から、ふて腐れた夕霧の、氷よりも冷たい視線を感じ、ぎこちない笑みに変わる。

だが彼も、憐に背中へ手を添えられる形でエスコートされ、機嫌はずっかり直ったようだった。

受付で招待状を提示し、タラップを上がって乗船した。

「中も豪華」

まるで明治や大正時代の映画の世界へ入り込んだかのように、細部にまでこだわられたレトロな雰囲気の内装にうっとりとした。

床は真紅の柔らかな絨毯が敷き詰められ、綿の上でも歩いているような感覚である。ふと見上げた天井には豪華なガラスのシャンデリアがさりげなく存在感を示している。光沢のあるこげ茶色のフロントにて、グレーの制服に身を包んだ、笑顔のホテルクルーが迎えてくれる。

「ようこそ」

「河合ですが」

「河合様ですね」

モデルのように美人な女性が笑顔で応対する。高そうな万年筆でサインをした憐は、カードキーを受け取って二人を振り返った。

「部屋は11デッキの1137か。まずは荷物を置いて来よう」

大した荷物はないからとボーイを断って、三人でエレベータに向かった。

\*

「……これが船の中!？」

数部屋しかない、ハイエストックオリティーを誇るロイヤルスイートの厚い扉を開けると、目の前にはいきなり豪華な花瓶。さらに両サイドに幾つもの扉が目飛び込んできた。

二十人以上が楽にパーティーができそうなリビングの奥には、広いダイニングと小さなバーカウンター。横の廊下に入れば、キングサイズのベッドが並ぶ寝室に、自動で明かりのつくウォークインクローゼット。

その反対側とダイニングの反対側には、ジャグジーと七色に光るライト付のバスルーム。

極めつけは、バーベキューでもできそうなくらい広い、白のテールとチェアの置かれたバルコニーである。

およそ船内とは思いがたい、広々とした空間が広がっていた。

(わーまるでお姫様気分!)

招待してくれたお嬢様に、双葉は心から感謝した。

「出発するみたい」

室内の豪華な時計が五時半を指しており、くぐもった汽笛の音色も聞こえてきた。夕霧の言葉に双葉は急いでバルコニーへ出ると、雄大な海の景色を眺めた。

「ほんとだ、動き出した!」

手すりから身を乗り出して、徐々に強くなってゆく風を感じる。海の香りを含んだ風が、髪の間をすり抜けてゆくのを、手で押さえ

つけた。

「行ってきまゝす」

岬から手を振る人々に、大きく腕を振り返した。

「貧乏人臭い」

ポツリと放たれた夕霧の一言にも、今はムツとすることはなかった。

「いいじゃない、普段は狭いアパートで暮らしてるんだから、テンションも上がるわよ」

「それはいいが、あまり身を乗り出すと危ないぞ」

「大丈夫ですよ、所長！ 心配……きやつ」

手が滑ってバランスを崩したところを、逞しい腕に支えられた。

「言ってるそばからそれなのか」

憐の胸にしだれかかる格好になり、思わずどきりとした。

「貧乏人臭い上に、バカだ」

「悪かったわね！」

辛らつな夕霧の言葉に、恥ずかしさを誤魔化すように声を上げた。

「あ………そういえばこれって誕生日会でしたよね。プ、プレゼント買うの忘れてた………」

「おまけにマヌケ」

今度こそ反論する言葉が見つからず、消え入りそうな声で「はい、確かに」とつぶやいた。



巨大なシャンデリアが輝く、大きなパーティー会場には、既に着飾った大勢の人々が集まって談笑していた。

「わあ、すご〜い。あ、大栗くん、松ジョンもいる！ えー、ハリウッドスターにサッカー選手も！？ あ、あれもしかしてあれって元首相！？ テレビと一緒に。えっと確か“超感激しまくった！” だっけ？」

はしゃぐ双葉に、夕霧は呆れたようにため息をついた。

「お願いだから、サインとかねだらないでね」

「そ、そんなことしないわよ」

ふと我に返った双葉は、凶星をつかれて恥ずかしくなったのか、エスコート役の隣の腕に添えていた手を、一層強く握んだ。

(それにしても、所長ってやっぱりモテるのね……)

双葉はつくづくそう思った。こうして隣の傍にいただけで、女性たちの嫉妬に満ちた視線を嫌でも浴びる。双葉はそれを受け、“どう？ 羨ましいでしょ？”などと態度を見せられるような度胸はなかった。露出度の高いドレスのこともあり、ただただ隣の影に小さく隠れる。

そんな自分をリードしてくれる隣を、ふと見上げた。

確かに憐は顔立ちも良いし、品もあって背も高い。だが、そんな理由だけではない、何か他の人には無いオーラを纏い、それが人々を引き付けているように思えた。

それが何かと言われれば、双葉にも明確には思い浮かばなかった。

「所長さん」

聞き覚えのある声がして、三人は振り返った。

「ああ、あなたはこの間の」

二重ストーカー事件で依頼に来た、IT関連会社の若き社長、柳本孝太郎の姿があつた。

「どうも。やっと僕も、このようなパーティーに招待されるようになりましてよ」

嬉しそうでもあり、まだもの足りないとも言いたげな表情だった。

孝太郎もやはりイタリアの世界的有名ブランドものの、光沢のあるシルバーのスーツに身を包み、オーシャンブルーのネクタイに、ダイヤモンドのタイピンを付けていた。

シャンパングラスをもつ姿がやけに様になる。

この男も憐と同じくらいスーツがよく似合っていて、先ほどから多くの女性が、男性にエスコートされている横で、不埒な熱い視線

を彼に送り続けていた。

だがどれ程の美女を以ってしても、今の彼を落とすことなど不可能だろう。女性たちの無言の誘いを、ことごとく無視する孝太郎を見て、双葉はそう感じた。

「あの事件の時は、どうもお世話になりました」

「いえ、こちらこそお役に立てて光栄です」

めつたに見られない上司の笑顔に、双葉も微笑ましく思った。

そんな憐にぼんやり見とれていたらしい女性が、テーブルにぶつかってしまふ所を偶然見て、申し訳ないとは思いながらも、クスリと笑う。

「所長さんたちのおかげで助かりました。それにしても……」

孝太郎は憐のとなりにいた双葉を、上から下まで、色っぽい視線で撫でるように見つめた。

「悩殺ものですね、そのドレス」

「あ、いえ、これはその……」

双葉は孝太郎にそう言われ、やっぱりそうかとなるべく肌が見えないよう、あちこち引っ張って押さえる。そのあまりに扇情的な姿に、孝太郎はふと笑みを零した。

「よく似合ってますよ。でもあまり恥ずかしそうにしてらっしゃると、余計にいやらしく見えちゃいますから、ここは堂々と」

そのアドバイスを聞くべきなのかどうか、双葉には分からなかったが、とりあえず背筋を伸ばしてシャンとしてみた。

その瞬間、双葉は背中に電気が走ったような、ゾクリとした感覚を覚えた。

（え？ な、何？）

急いで辺りを見回すが、会話に華を咲かせる人々の姿が見えるだけで、こちらを見ている人影など、一つもない。

（気のせい……かな）

「どうかしたのか」

周囲に視線を泳がせる双葉を、憐は眉をひそめ、心配そうな表情で覗き込む。

「え、い、いいえ何も」

双葉は不安に思いながらも、その原因をはっきりとは言えない以上、憐や夕霧に安易に自分の感じたことを告げるのが憚られた。

「憐様〜！」

遠くから聞こえてきたその大きな呼び声に、憐は視線を上げた。

一人少女が高いヒールにも関わらず、危なっかしくテーブルの間をすり抜けて走り寄ってくる。その後ろには、複数のサングラスをかけた黒服のボディガードたちが、軍事訓練のような走りで続いていた。

「きゃッ」

近くまで来ていた少女がバランスを崩し、倒れこみそうになったところを憐が受け止める。

「おっと。大丈夫ですか、綾音さん」

「は、はい……」

温かな憐の胸元にわざと顔を寄せ、ポーっと憐の整った顔を眺めて嬉しそうに微笑む。この美しい彼女の名は高瀬綾音<sup>たかせあやね</sup>といった。本日のパーティーの主人公で、河合財閥に次ぐ勢力を誇る高瀬財閥の一人娘。今春名門のお嬢様高校へ進学したばかりの華の女子高生だった。

長い髪はサイドの高い位置で一つにまとめられ、生花でゴージャスなアレンジが施されていた。さらに宝石のついたきらびやかな力チューシャが、一層の華やかさを添える。

真紅と黒がモチーフの、大胆に肩を出したドレス。タイトな胸元は大きなリボンが施され、まるで大きなバラを逆さにしてつけたような、膝上丈のボリウムのあるスカートが、ふんわりと細い色白の足を包み込む。

若さもあつてか、本日の主役の名に相応しいほどの、何者にも勝る輝きを放っていた。

「本当に来てくださったのですわね、憐様。綾音、とくつても嬉しいですわ！」

転びそうになったところを、憐に抱きとめられた格好のまま、綾音は飛び切りの笑顔で微笑みかけた。もちろん心からのものである。高瀬財閥の娘として、彼女は両親に大切に育てられてきた。というより、大切に育てられすぎたというべきか。

彼女はめったなことでは笑わない。奮発して買った高級なネックレスも、レアモノのバッグも、月に買った土地さえも、どれだけ素晴らしい物をプレゼントしようと、「いただいておくわ」のそっけない一言で全て済ませる。

それでも、多くの男たちが、綾音への貢物をこと欠かさないのは、それだけ彼女の笑顔を渴望していたから。それほどまでに、綾音の笑顔は特別に美しかった。

「お誕生日おめでとうございます、綾音さん。急用で出席できなくなった父の分も、私が祝福を」

そんな綾音の笑顔を、特別何をするでもなく、見られることのがたさ（彼女に貢ぐ男たちにとってはの話だが）を知る由も無く、憐はありきたりな言葉で彼女を祝った。

“父が急用で”

出掛けにかかってきた電話とは、そのこと

だったのか、と双葉はぼんやりと思う。

「まあ、感激ですわ！」

特別感激するようなことを、憐が吐いたわけでもない。しかし、憐に恋する綾音にとって、彼の自分に対して発せられる言葉の一つは、奮発してプレゼントされた高級なネックレスよりも、レアモノのバッグよりも、月に買った土地よりも、遥かに上にランクインされていた。

幸せそうに再び憐の胸元へ顔を埋めた綾音と、双葉の視線がかち合った。その瞬間、表情が一変し、憎しみのこもった冷たい視線が双葉を貫いた。彼女は目で人を殺せるのか、と思うくらいの鋭さだった。

「憐様、こちらの方は？」

憐から少し距離をとり、まるで品定めをするかのように、双葉を上から下まで眺め回す。

「ああ、紹介が遅れました。私の助手の羽嶋双葉と、生辺夕霧です」

憐の紹介に合わせ、二人は「どうも」とかるく頭を下げた。

「そうですね、助手さんですの」

やけにトゲがあるように聞こえるのは、勘違いではないのだろうか  
と双葉は思った。

「いいドレスですわね。主役の私が霞んでしまいそうですわ」



一生に一度の結婚式に、白やピンクのドレスを着てきたわけでもあるまい。確かに少々露出度が高い。だが綾音とて、双葉には及ばないが、やけに胸元を強調したドレスであるし、周りを外国から雇った、美形ボディガードに囲まれながらの移動をしている。

明らかに綾音のほうが目立っていたし、彼女の方でも、他人の影に自分が隠れることがあるなど思っていない。

だがそうではない。憐の傍にいるこの女が気に入らないのだ。距離的な意味ではなく、憐に名前を呼ばれ、顔を覚えられ、気軽に話のできる女が。

双葉にもそれが分かっていたが、憐の記憶を失わせることもできないし、これ以上困らせるわけにもいかない。一体どうやって切り返せばいいのやら、と考えを巡らせていると夕霧が一步進み出た。

「所長、僕が双葉のエスコート役を引き受けますから、後はお二人でどうぞ」

その言葉に綾音はすっかりと有頂天になり、その気になって憐の腕に自分の腕を絡ませた。

鈍い憐が、綾音の根深い嫉妬心に気づいたのかどうか分からないが、いや、彼のことだから本当に双葉のセクシーなドレスが、綾音以上に目立ちすぎると思っただろう。取り敢えず、双葉にこの場から離れてもらうことにした。

「そうだな。頼んだ」

憐の言葉に夕霧はコクリと頷くと、双葉の手をとってズカズカと

場所を移動した。

「ちょっと、夕霧、いいの？」

夕霧は言葉話すのと同時期に、すでに九九が言えた。漢字や外国語、数式を覚えるのも早く、小学生にして高校生の問題を楽に解いては、大人を驚かせていた。そんな彼を周囲は天才として崇め、距離を置き、線を引き、時には、研究材料のような扱いも受けさせてきた。

それは夕霧の人格形成に、大きな影響を与えた。

お前は違う世界の人間で、ワレワレとは違うのだと、冷たい孤独の闇に閉じ込められるような感覚に、常にさらされていた。

両親にすら、まるで腫れ物にでも触るように扱われ、ガラスの壁で仕切られているかのように感じていた。

だからこそ夕霧は、ずっと一人ぶ厚い殻へ閉じこもって、人と関わらないように過ごしてきた。

他人といることで、逆に彼は世界で一人きりのような錯覚に陥るのだ。

だが憐は違った。彼は夕霧を線の中へ引き入れてくれた。手を伸ばし、距離を失くしてくれた。彼の夕霧への扱いは、あの人に対してもこの人に対してもどの人に対しても、見せる態度と同じで、決して変わらないものだった。

それにひどく心が安らいだ日があったことを、夕霧は覚えている。

双葉は詳しい事情は知らずとも、この少年が憐に、全幅の信頼を置いていたことは知っていた。それはまるで母を慕う子供のように、裏切られるなど、想像すらしていないかのようだった。

それほどまで憐に心酔していたからこそ、時々彼は独占欲のようなものを見せた。

憐にべつたりの綾音に、良い感情を抱いていなかったはず。

それでも敢えて綾音へ憐を差し出すようなマネをした彼に、双葉は驚きを隠せなかった。

「ねえ、夕霧、聞いてる？」

「年に一度の誕生日くらい、好きにさせてあげればいい」

彼なりの優しさの表れなのだろうか。夕霧の意外な一面を見たような気がした双葉は、その背中にそっと微笑む。

だが夕霧は双葉から手を放すと、エスコートの約束はどこへやら、人の波に紛れていった。

「全く。女性を一人で取り残すなんて、天才がちゃんちゃらおかしいわね。ま、いつか」

一人でも全く気にならない性格の双葉は、パーティーの料理に早くも目を奪われる。

一流シェフが炎を上げて、目の前で厚いステーキを焼き、香ばしい匂いが鼻をくすぐる。別のテーブルでは、職人が大きなマグロの解体ショーを繰り広げ、即座に寿司や刺身や味噌汁にして提供していた。

舌の肥えたセレブたちの要望に十分応えられる、高級なワインやシャンパンが立ち並び、ソムリエが客の好みの一本を紹介しようと、一つ一つ丁寧に説明をしていた。

甘い匂いにつられてみれば、ずらりと並ぶ宝石のようなケーキたちが目に入る。さらには大きく盛られたフルーツの山が、まるで雪山のような輝きを湛えて佇んでいた。

「幸せ……」

高級料理に舌鼓を打ち、ご満悦の表情を浮かべる双葉。途中何人もの男性に声をかけられたが、適当にかわしてやり過ごしていた。オレンジジュース片手に、次なる美味を探して会場をうろついていると、トンツと誰かにぶつかった。

「あ、す、すみません！」

グラスを床へ落としてしまい、飛び散ったジュースがスーツのすそを濡らしたことで、双葉は肝を冷やした。高級なスーツなら、クーリーニング代もバカにならないはず。

ハンカチを取り出し、急いで拭こうとすると、突然ぶつかった相手に手首を掴まれた。

「そんな格好で屈もうとするとは、随分とサービス精神旺盛な女だな」

少し赤みを帯びた髪をした、切れ長の瞳の若い男。深緑と明るい

茶色のオッドアイと、その端正な顔立ちにドキリとし、同時にゾックとするような感覚を受けた。

「あ、あの……でも」

「一人か」

言葉に訛りがあったわけではないが、髪の色と瞳の色から、日本人ではないだろうと思った。

「い、いえ、むこうにツレ」

男から視線を外したその瞬間、掴まれていた手首を思い切り引っ張られ、抵抗する間もなく強引に唇を奪われた。

「っ……!?!」

腕を掴んでいた男の手が背中へと、艶かしい動きで回ってゆき、体を密着させてくる。

大衆の面前での熱く深い口付けに、近くにいた人々からの、痛いほどの視線をひしひしと感じた。

さらに男の大きな手が、ドレスの中へ入り込み、双葉の柔らかな胸を直に包み込んで動く。

抵抗したい。それなのに、なぜか体がピクリとも動かさなかった。

「スーツの詫び代はもらった」

たっぷりとキスと胸の感触を堪能した男は、さらに離れる間際にもドレスの上から軽く胸に触れ、スカートの切れ間から手を突っ込んで、太ももを撫でた。

そして、何事も無かったかのように、人々の間に姿を消していった。

男が見えなくなって体が自由になったが、あまりのできごとによる場に立ち尽くしていた。

「な、な、な、何……今の……」

急いで周囲を見回したが、男の姿はもうどこにもなく、さきほどまでのにぎやかな会場があるだけだった。

「双葉、どうした」

憐は人ごみの中を掻き分け、誰かを探している様子の彼女を見つけた。

双葉はどこかぎこちなく視線を泳がせ、誤魔化すように口を開いた。

「所長、いえ、別に。あ、綾音さんは？」

憐がエスコートしていたはずの、本パーティーの主役の姿が見えず、双葉は周囲を見渡した。

その様子に、若干の違和感を覚えつつも、憐はその問いに指をさして答えた。

「ああ、彼女ならあそこに」

憐が正面のステージを指差した瞬間、照明が落とされ、蝶ネクタイ姿の司会者が、スポットライトの中に浮かび上がった。

「皆様、本日は高瀬財閥主催、高瀬綾音16歳の誕生日パーティーへ、ようこそお越しくださいました！」

ステージ上部の巨大テレビに映像とテロップが流れ、あちこちから拍手が湧き上がった。

スピーカーからの録音ではない、楽団員の生演奏で一気に会場を

盛り上げる。

「それでは本日の主役、高瀬綾音から、皆様へ感謝の言葉を述べたいと思います」

憐と双葉は、慎重に人の間を縫いながらステージへと近づいた。

「あ、夕霧。あんたどこ行ってたのよ！」

その途中で見つけた夕霧を捕まえ、自分を置いていったことへの不満をぶつける。

「それはこっちのセリフ。そっちが勝手にはぐれた」

「うっ、生意気」

年下の少年相手に拳を握りしめながら、双葉はステージへ上がった綾音を見上げた。

スポットライトに照らされた綾音は、生来の美しさと、その自信に溢れた威風堂々とした様から、ああ、この人は、輝くことを運命づけられた人間なんだと双葉は思った。

「皆様、本日は私のために、お忙しい中お集まり頂き、誠にありがとうございました」

彼女はまるで、遊説中の政治家のようなきはきとした口調で、集まる人々を見渡しながら礼を述べた。その度に、満天の星空を凝縮したような、ダイヤモンドのピアスが揺れる。



「皆様よりいただきました、心よりの贈り物の数々、その気持ちを受け止め、ひとつひとつ一生大事にして参ります」

そう言って胸に手を当て、言葉を強調するしぐさを取ると、気持ちを切り替えるかのように小さく息を吐いた。

「さて、私も16という女性にとって節目の歳を迎え、いつもとは少し違った気持ちで、この場に立たせていただいております。なぜなら16は女性が結婚を許される年齢、そして私も心に決めた男性が、今この会場にいらしているのです！」

綾音の思いもよらない発表に、観客のみならず、彼女の両親が驚きに顔を見合わせた。

「あの、所長？ 念のためお聞きしますが、ご結婚の予定は……」

双葉はまさかと思い、自分のとなりで、休めの姿勢で話に耳を傾けていた憐を見上げた。

「結婚？ なぜだ。そんな予定は全くないが」

キョトンとした表情でそう答える憐に、「そ、そうですよね」とぎこちない笑顔を見せた。

どうするつもりなんだろうかとステージへ目をやると、満面の笑みを浮かべた綾音が、明らかに憐を見つめていた。

「ゆ、夕霧」

双葉は嫌な予感を抱えつつ、同じく休めの姿勢で話を聞く夕霧に、そっと耳打ちした。

「まさかと思うけど、あのお嬢様……」

「こんな大勢の人たちがいる前でプロポーズなんてしたら、所長のことだから、あの人に恥をかかせまいと受ける可能性大。卑怯な手」

完全に不機嫌丸出しの夕霧に、双葉は恐怖すら感じた。

「そ、そうね、何とか誤魔化し」

その時突然、足元から大きな爆発音と、床がビリビリと震えるような振動が走った。

「な、何！？ 何事ですか？」

ステージ上の綾音も、ボディガードに守られるようにしてどこかへ連れてゆかれていく。

「……所長」

双葉は不安になって憐を見上げた。

「まさか私が、タイタニックみたいとか言ったから……」

船に乗る前、この船をそう表現したことがあらぬ想像を駆り立てた。双葉はまさかとは思いなながらも、言霊という言葉もあるし、と

不安に襲われた。

「お前にそんな力あるか」

双葉の心中を知ってか知らずか、夕霧の言葉が彼女を一刀両断する。

「う、うるさいわね」

至極尤もな事を年下の夕霧に言われ、双葉は恥ずかしそうに唇を尖らせた。

「例え何かあっても、ここは陸からそう離れた場所にあるわけでもないし、天候も穏やかで救助隊もすぐ来られる。心配するな」

憐にもそう言われ、双葉は「ですよね」と安堵の表情を浮かべた。

だが憐は、影で慌ただしく動き回るスタッフを、鋭い視線で見つめていた。夕霧もそれに気づき、そつとその場から離れた。

「え、皆様、どうやらエンジントラブルが発生し、現在緊急停止いたしました。ですがご心配なく。明日には無事、殺伐とした現実世界へ戻られているでしょうから」

穏やかな笑いを会場に起こし、司会者は「下手な冗談でした」と頭をかいた。

「よし、よし、よし、まずは大成功」

会場の隅に、ニタリとした笑みを浮かべながら、その光景を見つめる若い男がいた。

長めのウエーブがかかった茶色い髪に、紫のラメが入った派手なスーツを身につけ、宝石の散りばめられたタイピン、王冠印がついた金色の高級スイス製腕時計が光っていた。

赤のワインを円を描くように揺らし、喉の奥へ一気に流し込む。

「お楽しみはこれからだ。見せ付けてやるよ、このMr・ジョーカ  
ーの実力をね」

肩を震わせ笑う男に、誰一人として気づいたものはいなかった。

パーティーの演目が次々と催され、有名バイオリニストとピアノストの、優雅な二重奏が終わった。

未だにエンジンはストップしていたが、最早だれもそのことには気に留めず、パーティーや船内の施設を存分に満喫していた。

「所長、どうやらさっきの爆発で、エンジンと通信機器がやられたみたいですよ」

どこかへ行っていた夕霧が、憐の背後からそつと声を掛けた。憐はあえて夕霧の方は見ず、前を見つめたままそれに答えた。

「通信機器も？」

「はい。それと、MとJのアルファベットが入った、ピエロのカードが発見されたよ」

どんな手を使ったのか、夕霧の見せた携帯電話のディスプレイには、例のトランプがくつきりと写し出されていた。

それをちらり見た憐は、渋い顔で眉間にしわをよせた。

「模倣犯が、何をしようとしているのか分かりませんが、これで終わりとは思えません」

パチンと携帯を閉じてポケットにしまい、夕霧も真剣なまなざし

を憐へ向けた。

司会者が笑顔で、次なる演目の紹介に移ろうとしたところへ、突然プツリと画面が途切れた。

みな注目が集まる中、まるで浮き出るように、ピエロの格好をした男を映し出された。

『皆さん、初めまして。Mr.ジョーカーです』

会場中の視線が、大きなモニターへ釘付けになる。

ピエロは黄色と黄緑の二色のカラーリングが施されたアフロのカツラ、赤く大きな鼻、やけに派手な水玉の衣装を身につけ、画面の中で手を振っていた。

「は？ Mr.ジョーカーって誰？」

「何？ あのピエロ」

「どうせなら、出てきて何かしなさいよ」

訳の分からない映像に、続々と不満の声が噴出した。

「おい、何だこれは。今すぐ止める！」

突然流れ出した映像に、裏方のスタッフたちが焦った。耳を押さえ、インカムを通して小声で叱りつけた。

「あ、所長！ これってもしかして、あの雑誌に載ってた!？」

双葉が驚いたように憐を見やる。

「ああ。例の模倣犯だろう」

ほとんど断定的な憐の口調に、双葉は不安げにテレビを見上げた。

『この船に巨大爆弾を仕掛けました。早く逃げないと爆発します。さあ、どうする！』

ピエロは黄色い手袋をした人差し指で、画面の向こう側から客を指差した。

確かにその人物の言っていることは、重大かつ深刻なことであるはずであった。だがどこか間が抜けているというか、信用しがたいというか、誰も早く逃げなくては、という気にならないようであった。

ただそこへ立ち尽くし、呆れた様子で話をする。

そんな人々の心情もしらず、出入り口付近で満足げに笑う男がいた。

「これで前フリは完璧だ。買い取った廃屋での爆破実験も、さっきのエンジン爆発も、今この時の恐怖を煽るためのプロローグ。ここで外に待機させている、わが社特性の救援隊の船に高瀬お嬢様や、さつき完全にスルーされた、爆乳セクシー美女をご案内すれば……絶対二人とも僕に惚れる！もしかして、き、キスとかしてくれるかも！フッフッフ！」

そう言ってクセ髪の男は、黒い衛星携帯電話を取り出し、位置を確認するために救援隊へ電話をかけた。

『もしもし、ああ風雅坊ちゃん』

しばらく待った後、電話に出たのはしまりのない声の男だった。それでも風雅は気にも留めず、嬉々とした表情で口を開く。

「準備は整っているな」

『はい？ 何おっしゃってるんですか。計画は変更になったって、お電話してこられたじゃないですか。もう隊員たちも陸へ上がって、解散してしまってますよ』

「な、そんなバカな！ 僕がいつ うッ」

風雅の背後から手が伸びて、ものすごい力で口を布で塞がれ、そのまま意識を失った。

『さくあ、早く逃げないと、大変なこと』

依然流れていたピエロの映像は、ぶつつりと途中で切られた。

「えー皆様、大変お騒がせ致しました。どうやらスタッフの、手違いだったようです。ご心配をお掛けし、真に申し訳ございませんでした。ではショーの続きをお見せいたしましょう」

司会者の言葉に、会場は再び和やかな雰囲気を取り戻した。

「ではお次は……あれ、誰だ？」



ステージ中央には既に、マントと仮面を身に付けた男が佇んでいた。まるで突然、降って沸いたかのように現れた男に、裏方の人間たちはなぜ気づかなかったのかと驚いた。

スタッフが駆け上がったて下ろそうとするが、突如スポットライトが彼を明るく照らし出し、観客が拍手に沸いた。

見れば男は口が耳まで裂けた、不気味なマスクで顔全体を覆っていた。だがそんな仮面とは対照的に、コミカルな仕草で次々とマジックを披露する。

鳩を出し、花を出し、カードを出し、宙にも浮いてみせる。たちまち仮面男のペースになり、折角の雰囲気壊すまいと、スタッフも大人しく引き下がった。

次の瞬間、男は何も無い空中から大きな黒い布を取り出すと、どこにも仕掛けはないと言いたげに、裏と表をそれぞれ観客たちに見せた。波打つように布を揺らしながら持ち上げ、自分の姿を完全に隠す。

好奇心に満ちた観客たちが見つめる中、布がはらりと落ちると、仮面男の姿はなく、代わりに猿ぐつわを噛まされ、背もたれのある冷たい金属の椅子に固定されたクセ髪の方が現れた。

その瞬間、パーティーホールに体の芯へ伝わるような、重厚なパイプオルガンの音が響き渡った。

「な、何？ 何なの？」

空気の振動が体にまとわりついて来る様な、妙な感覚だった。まるでこれから始まる何かを告げる、ファンファーレのようだと双葉

は思った。

悪魔に侵された真夜中の教会で、闇にうごめく見えない相手に立ち向かう、エクソシストのように、双葉は全神経を集中させて様子を窺った。テーブルが変形するのではないか、床に飲み込まれるのではないか、そんな馬鹿げた気配すら感じていた。

さきほどからどうも嫌な予感がする。自分の考えすぎなのだろうか、そう思おうとしてみても、頭で鳴り響く警戒音を止めることが出来ない。

突然、電源の切れていたはずの巨大テレビが砂嵐になり、双葉はハッとして見上げる。真っ白な背景に、消えた仮面の男が映し出された。

ライトが、やや下から当たっていたからなのだろうか。マジックを披露していた時とは打って変わって、マスクから狂気のようなものがあふれ出ているような気がした。あの大きく裂けた仮面の口から、今にも真っ赤な鮮血が滴り落ちてくるのではないかと、手に脂汗が滲んだ。

それに前髪に隠れた仮面の目を見ていると、張り詰めた糸の上に立たされているような、一歩でも動けば真っ黒な谷底へ落ちて行きそうな錯覚に陥る。自分は怖くて足が震え始めているというのに、その場にいた人間はのん気に、これ見事と拍手喝采を送っていた。それがまた、とても異様な光景に見えた。

そこで初めて、男は口を開いた。

「皆様、ここで本日最大の余興を、お見せいたしましたしょう。この私

の前にいる、椅子に固定された男。この男の生死を、決めようではありませんか」

機械的で変えられた声が、頭上から降り注いで、脳内へ染み込んでいく。

「生死を決めるって、どういうことだ？」

集まった人々は一体どんなイリュージョンかと、ザワザワと興奮気味に傍にいる者と話す。

「ルールは簡単。私の出す謎を、時間内に解いて、この男を無事に脱出させてください。できなければ、椅子内部の小型爆弾が、この男を吹き飛ばします」

マジックの一環なのか、何なのか。どよめく観衆の中から、面白がって手を挙げる男が出た。その男が舞台へ近づくと、仮面男が再び口を開いた。

「ただし、こちらをご覧ください」

画面が切り替わって映し出されたのは、船内のある部分のようだった。壁に大きな黒い箱が取り付けられている様子が見えた。

「爆弾は椅子内部だけで無く、船の至る所に仕掛けられています。そしてまもなく、バクハツスル」

男がそう言った瞬間、ひととき大きな爆破音と、下から突き上げられるような衝撃が船を襲った。

「な、何？ 嘘!？」

とても立ってはいられず、全員が床へ倒れこんだ。

「船底に穴でも開けられたんじゃない」

「そんな……ッ」

夕霧のとんでもない予想に、双葉は声を詰まらせた。

「私の名前はMad マッド Joker ジョーカー。さあ、ゲームをしよう。この男の命をbet ベットして」

一瞬のうちにパニックに陥った船内で、その男の背筋の凍る、ゾッとするような声はやけにはっきりと聞こえた。

逃げ惑う人々の波に逆流するように、憐は静かに舞台へと近づいていった。

「ん〜！ んん〜」

風雅は猿ぐつわをかまされ、目に涙を浮かべながら、視線で憐に助けを請うていた。

憐は静かにステージへ上がり、椅子を丹念に調べた。膝について椅子の下を見上げると、確かに小型の爆弾が仕掛けられていた。赤や青の配線が複雑に絡み合い、設計図も道具も無い状況での解体は不可能と判断し、顔を上げた。

風雅の腹部は金属の太いベルトで固定されており、両手は膝の上で一つに縛られていた。金属ベルトの中央には、大きな錠前が取り付けられており、念のため上へ引っ張ってはみたが、やはりびくともしない。

「満足したか？」

テレビの中の男に話しかけられ、それが録画でないことを知る。

憐はゆっくりりと、画面を見上げて口を開いた。

「お前の目的は何だ。人の命でゲームなど、なぜそんなことをする」

静かだった。

小船から手を伸ばし、水面へそつと指をつけるかのように静かな口調だった。

だが水に浸されたその指から、大きく広がってゆく波紋のように、憐の瞳には言い知れぬ怒りが込められていた。

「目的？ もちろん、楽しむためだ」

感情も抑揚も無い声で、ジョーカーと名乗る男はそう言った。

「楽しむため？」

「後ろを見る。お前の助手以外、誰一人残ってはいない。さっき、私に挑戦したいと名乗り出た男も」

憐がその通り後ろを振り返ると、心配そうに見つめる助手たち二人がいるだけだった。先ほどまで、おいしい料理に舌鼓を打ち、会話に華を咲かせ、美酒に酔いしれていた人々で溢れていた会場が、今はガランとして誰もいない。まるでゴースタウンのような不気味さが、ホール全体に充満していた。

「それが何だ。危険な場所から遠ざかるうとするのは、人として当然のこと」

そう言いながら、再びジョーカーへと視線を戻した。

仮面で表情は知れないが、なぜか男が笑った気がした。

「死を目前にすると、人間はその本性を現すかのごとく一変する。生への欲求が、ありとあらゆる思いやりや優しさの仮面を剥いで捨てさせ、理性も何もない丸裸の人間を露にする。ここからいち早く逃げれば助かるだろう。この男の命と引き換えに。普段は他人の命

を軽視する人間を憎むくせに、いとも容易くそちらへ転ずる」

「何が言いたい」

「勘違いするな。これは批判ではない。むしろ褒め称えているのだ、人間の生存本能システムの素晴らしさを。死への恐怖は人を変える。体裁、思想、良心、常識を捨て、生きるために全てを掛けようとする。それは命をベットされた本人も、私の挑戦を受けようという第三者も同じ。さあ、生きてみる！ 平和な日常で錆びついた脳を、訪れようとする死から逃れるために呼び覚ませ！ 貴様らの極限まで磨かれた能力全てで、私に挑むがいい。そうであってこそ、ゲームというものは面白いのだから」

憐は怒りを堪えるように奥歯を噛み締めると、ステージから降りて2人の元へと向かった。

「この場はオレに任せて、お前たちもここから救助船へ避難するんだ。柳本氏が呼んでいるはず。さあ、早く」

「いやです！ 残ります！」

自分たちにだけ逃げろという憐に、双葉は食い下がった。ここにいたところで、これといった才覚を持ち合わせていない自分に、何も出来ないことは分かっていた。だが、それでも、憐と一緒に立ち向かいたいという思いがあった。

だが憐は、「双葉、オレを困らせないでくれ」と難しい表情を見せ、ひどく寂しさを伴わせた。

憐にも、助手としての双葉の気持ちを痛いほどに感じていたが、巻き込みたくないという気持ちは、決して譲れるものではなかった。

憐の有無を言わせぬ物言いに、双葉はそれ以上何も言えなくなり、黙って俯いた。

「所長、僕」

「夕霧、お前もダメだ。ここを脱出する際、海にもぐる必要があるかもしれない。お前は泳ぎが苦手だろう」

夕霧に対しても、厳しく諭すように忠告した。大きな手を頭に乘せられ、口調とは裏腹なその優しい動作に、夕霧も力なくうな垂れた。

最善の道は何か、夕霧にははっきりと分かっていた。ここに残ること、掛かるであろう、憐への余計な心的負担を無くすことを優先すべきだということ。

頭で考えることと、心で感じることとの間に、大きな食い違いを覚えながら、夕霧は静かに自分の足元を見つめていた。

「所長、絶対に生きて戻ってくださいね」

「ああ、当然だ」

双葉は憐の力強い言葉と微笑みに、僅かに不安が吸い取られたような気がした。

「さあ、行け」

二人は何度か振り返りながら、足早にホールを抜けていった。



憐はそれを確認すると、再びステージに上がって、風雅の猿ぐつわと腕の縄を取った。

「つけて！ 助けてええ！！ 早く早く早く！！ 嫌だ〜いや〜」

大人の男の情けない叫びに、憐も一瞬驚いた。

「あ、慌てなくてもいい。大丈夫だ、安心しろ」

何とか落ち着かせようとする憐の努力もむなしく、風雅は鼻息を荒くする。

「これ、これなんだ！」

自由になった手で、胸ポケットを探って何かを取り出した。

「この中のどれかなんだよ！」

風雅が取り出したのは、ホルダーに付けられた、五本の銀色の鍵だった。それぞれに？〜？まで番号が刻み込まれている。

「一個ずつ試していけば、絶対」

「謎を解いて鍵を開け、ここから脱出せよ」

ジョーカーが、風雅の言葉を遮るように口を開いた。

「もし誤った答えを出せば、その時点で爆弾は爆発するので慎重に」

「ええええええ！？ そんなあ〜」

僅かな希望を絶たれ、風雅は本気で涙を零した。

「タイムリミットはビデオ終了後、正味三分。では、スタート」

ジョーカーは机の上で組んでいた指をほどき、仰々しく広げてみせた。

これはT市で起きた、一家惨殺事件に関する記録である。

現場は築40年以上になる、二階建ての古びたアパート。名はここでは伏せておく。

間取りは玄関を入れてまず六畳のダイニングキッチン、その奥に四畳半の和室があり、さらに奥に六畳ほどの和室とベランダがあった。

被害者は電気工のKさん(42)一家4人。妻(39)や子供たち二人と共に、無残な姿で発見された。

現場から500mほど離れた川で、刃をバラバラに砕いて小さくし、ビニール袋に入れられた状態で刃渡り20cmほどの包丁が発見された。指紋は発見されなかったが、ルミノール反応が出た。

入手ルートは不明。犯人宅から持ち出されたものの可能性が高い。

死亡推定時刻は夜の9時前後。玄関のドアには異常が見られなかったため、顔見知りによる犯行と推測された。

一家は、妻と長女は台所、次女は四畳半の居間、そして主のKさんは一番奥の和室にて、箱型テレビに覆いかぶさるようにならして無くなっていった。そのとなりの縦長の小さな本棚には、血痕の付いた受話器が、本体から外れた状態で垂れ下がっていた。

妻、及び子供たちは心臓を一突きにされた即死。Kさんのみが、複数個所刺されたことによる、失血死だった。

テレビや新聞にて、家族構成、死亡推定時刻、それぞれの死因、凶器とみられる包丁の情報が報道された。

容疑者は以下の五人である。彼ら全員にアリバイはない。

|   |    |     |      |                   |
|---|----|-----|------|-------------------|
| ? | 中村 | そよ子 | (62) | 大家                |
| ? | 虹川 | 滝蔵  | (56) | 無職、詐欺の前科あり        |
| ? | 向出 | 加尾也 | (48) | 金貸し Kさんへ1000万円の貸し |
| ? | 石持 | 勝臣  | (42) | 会社員 友人            |
| ? | 典定 | 東眞  | (42) | 土木作業員 友人          |

以下はを取り調べた際の記録画像である

### #Case1・中村そよ子

「まさか自分の管理してるアパートで、こんなことになるなんてねえ？　だ、だから言ってるでしょ？　アタシは何も知らないって。何、恨み？　アタシがなんであの人恨むのよ。そりゃ立ち退きの件ではモメてたわよ？　他の住人は皆よそへ移ってくれたのに、あの人だけは頑として出て行かないって。それがあの結果でしょ？　もう最悪。え？　別に。更地にして売っちゃおうかと思ってただけ。な……ちよつと私の借金の話は関係ないでしょ！？」

### #Case2・虹川滝蔵

「さつき別の刑事デカに聞いたんだけどよ、電気工がテレビに抱きついてって、本望だよな、ハハハハ　はあ？　んなことするわきゃねえだろが、折角シャバに出てきたんだぜ？　第一ムシヨにぶち込まれたくらいで、殺人なんかすつかよ。……に、女房と別れる羽目になつたって、別に未練もねえよあんな女」

# Case 3 .

むかいでかあや  
向出加尾也

「貸したものの返せって言つて何が悪い。自分で言つのもなんだけどよ、オレがあいつら殺す動機より、あいつらがオレを殺す動機の方が、強えんじゃねえのか？　なあ、そうだろ？　刑事さん。あ？　お、オレがあのお詐欺師野郎の仲間？　憶測で物言つてんじゃねえよ！　第一凶器だつてよ、バラバラになつて捨てられてたつて言つが、オレならもつと上手くやるね。例えば氷を使ったトリックとかよ……。だからオレがやったつて証拠あんのか、ゴラア！」

# Case 4 .

いしもちかつおみ  
石持勝臣

「本当に、アイツがこんなことになるなんて。それに、私が容疑者というのも納得できません！　イジメ……？　警察つて、そういうことも調べるんですね。そうですよ、けどそれはあくまで学生時代の昔のこと、今は仲良くしてたんです！　それがあんなにも無残な姿で発見されて……。信じてくださいよ！」

# Case 5 .

のりさただあずま  
典定東貞

「僕がここへ呼ばれたつてことは、調べがついているんですね。ええ、そうですよ、僕はアイツの奥さんに惚れてました。友達の嫁

さんだからって、どうして好きになっちゃだめなんですか？ え、困ってた？ だって僕が電話してるのに、あっちが嫌な顔して出ないから。でも家に押しかけたりなんて、無粋なまねはしてませんよ？ ただ遠くから眺めていれば、それでいいんです……。え？ そうだな、犯人は悪い奴じゃないと思いますよ？ 彼女が一人で悲しい思いをしないよう、子供をよりそ……。あ、いえ、何でも」

\*

「ビデオはここまで。さあ、犯人は誰だ。三分以内に答えよ！」

「ビデオはここまで。ちなみに船の爆弾は、椅子の爆弾の爆発時間の三分後。さあ、犯人は誰だ！」

ジョーカーの言葉に反応するかのように、タイマーに切り替わった画面の数字が減ってゆく。ゲーム終了までのカウントダウンが始まった。

「ちよつとあんた！ 早く何とかしれくれよ！ このままじゃ死んじゃうよー！ ねえったら！ ねえ、ねえ、ねえ！」

「少し黙っていてくれないか！」

泣き喚く風雅を一喝し、憐はあごに手を置いて推理に没頭し始めた。

（いくらなんでも情報が少なすぎる……！ これで犯人を特定しろというのか！）

浸水の影響なのか、空調が壊れて温まった空気が、ホールに充満していた。それが肌に張り付き、じっとり汗ばみ始めるのを感じる。

（いや、落ち着け、解けないようにはできていないはず。これはあくまでゲームだ。証言は全て真実と捉え、深く考えすぎるより、表面をいかに正確に掴むかが大事だ。……気になることは2点。まず

はなぜ、凶器をバラバラにする必要があったのか。隠すためだとするなら、折角ばらばらにしたものを、なぜビニール袋に一箇所にまとめておいたんだ。次に引つかかるのはあの二人の発言。たしか、報道されていると言われている事項にはないこと。だがそれを確かめる手段が

口惜しそうに瞳を強く閉じた。

「ああ、そういえばまだ、少し続きがあったな。重大なヒントになるかもしれん」

ジョーカーの言葉に、憐はハツとしたように画面を見上げた。まるで浮き出るようにそこへ映し出された大家の女を、睨むように見つめる。

「ああ、そうそう、そうい……ば……たし……ね」

身を乗り出して何か話そうとする女。だがザーザーとノイズが邪魔をして、その言葉を遮ってしまう。

(浸水で電気系統が限界か。くっ、折角の手がかりが)

「……な、のよ。暗かつ……、きり……は言えないん、けど」

雑音の合間に発せられる言葉に、慎重に耳を傾け、単語を繋ぎ合わせる。



（“暗くてはつきりとは”？ 目撃情報か！？）

砂嵐と共に次の画像に切り替わったが、画面が歪んで人物すら特定できず、やはり音声途切れ途切れに聞こえるだけだった。

「違……て、呼び……なすりつ、て……よ！ 怖……ら、それ、逃  
」

そこで再びジョーカーに戻った。

「さ、あ。後、1、ん。じっく、考、まえ」

時間を掛けている暇など無かった。爆弾のこともあるが、ほとんど海水が迫ってきているのを感じていた。現に隣の足元はじつとりと濡れていて、舗装されていない雨上がりの小道のように、べつとりと湿り気を含んでいた。

静かに、ゆっくりと確実に危険がそこまで迫ってきている。浮いた椅子や机が、互いにぶつかっては跳ね返る音が、まるで死神の足音のように感ぜられた。

それでも隣は、諦めるような気配など少しも見せず、脳内で考えうる可能性を全て挙げては削除していく。

（呼び出された？ だとしたらあの発言も頷ける。だが、どちらかに絞り込むのは無理だ）

「ねえ、ヤバイって！ ねえ！」

隣がタイマーを見ると残り22秒。

「なあ！ 早くしてくれって！ 全く目星もついてないのか！？」

風雅の方も必死だった。今こんなところで、こんな形で、生涯を終えたいはずなどない。

憐はゆっくりと口を開く。

「いや、現場にいた人間にしか分からない発言をした、4番の石持いしもち勝臣かつおみ、もしくは5番典定東真のりさだあずまのどちらかはず。さきほどの目撃証言で、どちらかが犯人に呼び出され、現場に赴いてしまったとするなら、残りは一人。だが、さきほどの証言が、一体誰のものだったのか……」

「分かった！ 犯人は4番だ！」

叫ぶようにそう言い切った風雅に、憐は虚を突かれたような顔をする。

「4番？ なぜだ」

「5番のストーカー男は部屋を盗撮してたんだよ！ だから現場を知っててもおかしくない」

残り8秒。

「盗撮」？ そうか、そういえば 「

残り7秒。

“ 僕が電話してるのに、あっちが嫌な顔して出ないから ”

「確かにそうだ。電話の向こうの相手の顔を知ることなど、不可能  
なはず。よく気づいたな!」

残り4秒。憐は急いで4番の鍵を取り、鍵穴の入り口へ当てた。

ルールは簡単。私の出す謎を、時間内に解いて、この男を無事に  
脱出させてください

(何だ?)

一瞬、ジョーカーの言葉が憐の脳裏を過ぎった。

もし誤った答えを出せば、その時点で爆弾は爆発するので慎重  
に

タイムリミットはビデオ終了後、正味三分

ビデオはここまで。さあ、犯人は誰だ。三分以内に答えよ

そこまで思い出して、憐はピタリと手を止めた。

「……いや……違う」

鍵を差し込もうとしたまま、微動だにしない憐に、風雅は今度こそ焦って涙を流した。

「なあ、おい！ どうしたんだよ！ 早く！！ ママあゝ！！」

残り1秒。そして

海に浮かぶ大きな救助船の上で、憐たちの乗った、今まさに沈みつつある船を見つめながら、双葉は祈るような気持ちで両手を握りしめ、強く目を閉じていた。

「大丈夫」

「夕霧……」

「所長は絶対に負けない」

まっすぐに船を見つめる夕霧の背中に、双葉はそっと手を添えた。

「そ、そうだよ。分かってる」

双葉がそうつぶやいた瞬間、皮膚が波打つような巨大な爆発音と、後ろへ吹き飛ばされるような風が吹きつけ、ビルのように高い水柱が上がった。波に揺られて船が激しく上下する。

「所長……！」

「早く、早く、救命ボートを！」

慌ただしくなった船内で、夕霧の音が響いた。

急いでボートの用意をする船員たちを尻目に、双葉は欄干を握りしめ、ひたすらに無事を願っていた。

「所長！ 所長〜！！」

大きな救助船からモーターボートへ急いで乗り換え、双葉や夕霧は、孝太郎の操縦で現場へと向かった。

炎上する豪華客船の火が、漆黒の海に映りこみ、ゆらゆらとまるで風に揺れる草原のように、一面に広がっていた。

「あそこ！」

やや興奮気味の夕霧が、暗闇に浮かぶ人影を指差した。その方向へ、双葉も身乗り出す。

「所長！」

憐だった。すっかりと気を失った風雅の首元に腕を回し、ゆっくりとボートへと近づいて来てくる。

「せーの！」

二人をボートの上に引き上げると、憐はどかりとボートの床へ腰掛け、ぐっしよりと濡れた髪をかき上げた。

ネクタイを外し、肌蹴た胸元に雫が伝ってゆく。孝太郎に柔らかなバスタオルを手渡され、礼を言って顔を埋めた。

温かなそのタオルに包まれ、やっと元の世界へ返ることが出来た  
実感がわいた。

「所長！ 良かった、無事で……」

その格好では、と孝太郎が貸してくれたスーツのジャケットを羽  
織った双葉が、憐の首筋に抱きついた。

「ふ、双葉、すまない。心配を、かけたな」

やや頬を赤く染めながら、憐はタオルから顔を放し、謝罪の弁を  
口にした。

「所長さん、本当にご無事で何よりです。ですが、結局あの容疑者  
の中で、一体誰が犯人だったんです？」

「ビデオの内容をご存知なのですか？」

孝太郎の質問に、憐は驚いたように返した。

「ああ、実はあの映像、ホールのテレビにだけ映し出されていたわ  
けではないんです。おそらくどこかから電波をとばして……です  
からある一定の範囲内にあるテレビで、観ることができたんですよ」

「そうでしたか」

憐は風雅の脈を確認していた夕霧が頷くのを見て、安堵した表情  
をみせ、タオルを肩にかけて三人に向き直った。

「私、犯人わかりましたよ！ 5の人ですよね」

双葉が興奮気味に、憐を見つめる。

「いや、違っ」

「違っ?」

「どういうことですか、所長」

夕霧は風雅の傍で正座をしながら、背筋を伸ばして興味深そうな顔をした。

「最初は石持の“それがあんなにも無残な姿で発見されて……”という言葉の中の“あんなにも”という、まるで見てきたような言葉と、ストーカーしていた、のりさた典定の“彼女が一人で悲しい思いをしないよう、子供をよりそ……”という犯人しか知りえないような情報をを漏らした一言が気にかかった」

「私もそこまでは分かりました。それでヒントのビデオで言った、のりさた大家さんの石持の目撃証言で、のりさた典定が犯人だと思っただんです」

双葉の言葉に、憐は目を細めた。

「そうか。アレはのりさた典定の目撃証言だったのか。こちらでは電気系統の関係で、途切れた音声と画像で確認できなかったんだ。だが、それも今から思えば、犯人を特定させようという、罠だったんだな」

「わ、罠……? え、だって、それによって、石持の証言に整合性が出たんじゃ?」



「んー、ですがまだ、凶器の謎が解けていませんよね。あのビデオの内容は一つ一つ必ず意味を持っているはず。わざわざ“刃がバラバラにされた凶器が見つかった”というフレーズがあったからには、そこに謎を解くヒントがあるはず……ですよ、所長さん」

孝太郎の言葉に憐は静かに頷いた。

「ええ。犯人は、凶器を隠すためにバラバラにしたのではない。むしろ見つけてもらう必要があったんだ」

憐はそこで、一呼吸置いた。

「自分が、他殺だと見せかけるために」

一瞬開いた間に聞こえる、波が静かに上下する音が、皆の声にならない驚きを表していた。

「た、他殺だと……見せかける？」

やっと出てきた言葉に、止まっていた空気が動き出した。

「それじゃあ犯人は……」

夕霧は確信したように、憐をしっかりと見据えた。

「そう　被害者の一家の主、Kさんだ」

「一家心中!？」

それに憐が重々しく首肯する。

「ちなみにこれはオレが気づいたことではないんだが、5の典定はのりさだどうやら盗撮カメラを仕掛けていて、それで現場の状況を知っていたようだ。となると、誰もおかしなことを言っていないし、与えられた情報の範囲内に怪しい人物だと言われる人間がいなくなる。だが違った。まだ犯人の候補はいる」

「それが、Kさん」

双葉は珍しく難しい顔をしながら、納得したようなそぶりを見せた。だがそこで腑に落ちない点に気づき、口を開く。

「でもKさんだったら、誰がああ凶器を川へ？ 自宅から500メートル離れてたんですよね？」

「あれは、今回の事件で用いられた凶器ではない。Kさんが前もって自分の血液を抜き取って掛け、バラバラに壊したもの。同じ型の包丁を使っても、傷跡と同じ刃型が出るとは限らないと思っただKさんが、正確な刃の形を隠すためにそうしてから川へ捨てたんだろう。そして凶器のない部屋での、一家惨殺事件は、Kさんの思惑通り、他殺と推定された」

「何のために……」

「おそらく4の石持を恨み、罪を着せようとしたのだろう。ビデオからは分からなかったが、犯人が罪を擦り付けるために彼を呼び出したのだから、そう考えて差し支えない」

「それじゃあ本当の凶器はどこへ？」

「テレビの中」

双葉の疑問に夕霧は小さく、だがはっきりとそう答えた。

「テレビ？ そっか、Kさんが最後に覆いかぶさっていたっていう。なんだ、てっきりあの容疑者たちの中に犯人がいると思ってたのに、騙された気分……。あれ？ でも犯人がKさんなら、爆弾が仕掛けられたあの椅子の鍵は、一体どうやって開けたんですか？」

双葉の問いに、憐はどこか疲れたようにうな垂れた。

「鍵など、必要じゃなかったんだ」

「え、でも確かめてたじゃないですか。鍵がかかっているかどうか……。」「

「確かめ方が間違っていた。鍵がかかっているかどうかではなく、鍵が開かなければ、金属のベルトが外れないことを、確かめるべきだったんだ」

憐は、炎を伴いながらゆっくりと沈んでゆく船を見つめた。

「そう、思い返せば、ヤツは一言も言っていなかったんだ。あの五人の容疑者に犯人がいるとも、鍵を使って脱出しろともな……」

船はまるでゲームの終焉を告げるかのように、淡い波音と共に、その大きな体を深い海へと完全に隠した。

「我々は、随分と踊らされたようですね。あの、Mr・ジョーカーなる男に」

孝太郎も同じようにその方向見つめ、風にネクタイを揺らしていた。

「これが、救助船なのか……」

ボートから母船へ乗り換えた憐は、その甲板の光景に驚いた。

「この船はどうやら、柳本氏の会社が展開しようとしている、富裕層向けの警備船のようです。今回のことは、いい宣伝になったようですよ」

夕霧はいつものように、腰の後ろで手を組みながら、淡々とそう述べた。

「なるほど」

甲板には、まるでビアガーデンのように、たくさんの白いテーブルが並んでいた。タキシードを着たボーイまでいて、避難していた乗客たちに飲食のサービスを行っていた。もちろん、事件の恐怖で活気こそはなかったが、みな落ち着いた様子で、出された飲み物に口をつけていた。

左サイドには大きなテレビが置いてあり、それで船内と同じ映像を見ていたのかと、憐は思った。

「憐様っ！」

憐が振り返るより早く、綾音はその広い胸へダイブした。

「あ、綾音さん」

憐は驚きながらも、しっかりと綾音を抱きとめた。

「憐様……綾音、心配いたしましたのよ。憐様のことを信じておりましたが、どうしても万が一のことを考えてしまつて……」

綾音は憐の胸で、おいおいと泣くようなそぶりを見せる。

(嘘っぽい)

心配したのは本当だろうが、今は憐に抱きつく口実に過ぎないの  
だろうな、と双葉は感じた。

「すみません。迷惑を、お掛けしました」

だがそんなことに憐が気づくはずも無く、自分を心配して涙を零  
す綾音に、申し訳無さそうに謝罪した。

「いいんですの！ だってこういう試練を乗り越えてこそ、二人の  
距離が一層近くなるんですもの。こんな風に……」

綾音は意図的に、憐の体に自分の胸が当たるよう、強く抱きしめ  
て擦り付けた。

(どどどどさくさに紛れて何してるの、この子!?)

周囲を省みることない、大胆な行動に、双葉はなぜか自分が恥ず  
かしく感じて、思わず目を泳がせた。

「綾音さん、端から我々の間に距離などありませんよ」

「……憐、様？」

綾音は大きな瞳をより大きく開け、期待するように憐を見つめた。

「綾音さん。今まではっきり申し上げたことはありませんでしたが……」

「は、はい……」

「私は常日頃から、あなたのことを我が妹のように思っています」

今までのどこかロマンチックな雰囲気はどこへやら、綾音は表情を凍らせてしまった。だがそんなことに微塵も気づかない憐は、誰もが目を奪われるような優しい微笑みを向け、綾音の頭を軽く撫でる。

「い……いもうと」

（所長らしいわね）

軽く殴られたような衝撃を覚える綾音に、申し訳ないと思いつつも、双葉は思わずふきだすのを、押さえることが出来なかった。

そのことに気づいた綾音に、憎しみの込められた目で睨み付けられ、双葉は咳払いをして誤魔化した。

「あれ、今、何か落ちたみたいだけど？」

「え？」

足元を指差す夕霧に、双葉は一步退いた。

「トランプ？」

双葉は屈んでそれを拾い上げ、面を返して言葉を失った。

「どうかしたのか？」

綾音から解放され、二人の助手の元へ帰ってきた憐に、双葉は恐る恐るそのカードを手渡した。

憐の表情が真剣そのものに変わる。

「どつやらやつは……本物だったようだな」

憐は、MとJ、そして中央に不気味な仮面が描かれたトランプに、どこか思いを巡らせるような眼をした。

暗い海上で、一人の男が救助船に冷たい視線を送っていた。

「人は選択肢を用意されると、無意識にそこから選び取るうとする。せっぱ詰まった状況なら、尚更……」



水上バイクに跨ったオツドアイの男が、口元に笑みを浮かべる。

「今回は負けたが、久しぶりの楽しいゲームだった。また会おう、河合憐」

男はそついい残し、水しぶきを上げて、闇に包まれた海面を滑って行った。

「ねえ、それがお前から出て来たっていうことは、お前、どこかでジョーカーに接触したんじゃないの？」

「え？ そんな訳……」

そのとき双葉の脳裏に、パーティー会場での出来事が甦った。キスされ、胸を触られ、スカートの中にまで手を突っ込まれたことを思い出し、赤面する。

（あの男……イケメンじゃなかったら、ぶち殺してるんだから！）

「どうなのさ」

怒りに燃える双葉に、冷静な夕霧の声が割って入った。

「え？ いや、そのえつとあれは確か……って、水上バイク？」

素直に全てを言うのが憚られ、どうにか別のストーリーを仕立て上げようとあたふたしている、謎の水上バイクが遠ざかってゆく姿を見つけ、首をかしげた。

救護室からやっと起きだしたらしい今回の被害者、風雅が、走り去るバイクに愕然とする。

「ああ！ 僕のマレリアートちゃんがあゝ！！」

こつそり持ち込んでいた高級水上バイクが、何者かに連れ去られていく様に、愕然とした表情が張り付いていた。

手すりから身を乗り出し、届くはずもないのに、どうにか止めようと必死に手を伸ばす。周囲の人々は気味悪がり、徐々に傍から離れていった。

「まぬけがもう一匹」

「まさかそのマヌケに、私が含まれてるんじゃないでしょうね」

腕を組んで睨み付ける双葉に、夕霧は呆れたような視線を送る。

「お前、気づいてないかもしれないけど、柳本氏に借りたジャケットト……着たまま所長に抱きついたでしょ」

「……あ」

憐が助かったことを喜ぶあまり、救助ボートの上で、びしょびしょの憐にしがみ付いたことを思い出し、ハッとして羽織っていたジャケットを広げた。

案の定水に濡れ、シワシワになったそれに、双葉は肝を冷やした。

「僕の見立てでは、最低価格70万」

「な……なじゆ」

電池の切れたロボットのようになり、瞬きもせずに固まる双葉に「だから言ったでしょ」と、夕霧の冷視線が突き刺さった。

後日、ジャケットの件は快く許してもらったものの、風雅の水上海上バイクは、めちゃくちゃに破壊された、無残な姿で見えられた。愛車を失い、ローンだけを払い続けることになった風雅の叫びが、大海に響き渡ったという。

「ま、因果応報ですよ。エンジン壊してあんなイタズラしかけてたんですから」

自分の失態はすっかりと忘れ、双葉は事務所のデスクに座る憐へそう言った。

「そんなこと言わないでくださいよ、双葉さん」

「って、何でコイツがここにいるんですか!」

双葉は大きな声を出しながら、エプロンを締め、お茶汲みをする

風雅を指差した。

「コイツのせいで、大変な目に遭ったっていうのに。ねえ、所長！？」

優雅の運んできた緑茶を飲みながら、ゆったりと新聞に目を通す憐を見やった。

「ん？ いや、働きたいというから雇ったんだ」

新聞から目をあげることも無く、憐は平然とそう言い放つ。

「働きたいからって……ウチは赤字なんですよ！？」

大きなデスクに両手をつき、何とか憐の考えを改めさせようと詰め寄った。だが憐はそれを聞くと、一瞬なにか考えるそぶりをみせ、ごそごそと引き出しを漁って、通帳と印鑑を机の上へ置いた。

「よし、ならオレの個人口座から、マイナス分を補っておいでくれ」

「個人口座……ですか？」

通帳に手を伸ばし、何ともなしに開く双葉と、何気なく覗き込む風雅。

「……ぐ」

「……ぬ」

一瞬静まり返ったその直後、千本木ヨルズの最上階にて、この世

のものとは思えぬ悲鳴を上げ、憐の足元へひれ伏す二人の姿が見られた。

「どうぞ、所長、コーヒーでございます！」

風雅は、やや長めのパーマがかかった髪を後ろで一つに束ね、ウエイターよろしく隣の机に一杯のコーヒーを差し出した。フワリと、挽きたてのコーヒー豆の匂いが香る。

よほどの自信作なのか、風雅はベージュ色のエプロンをしめたまま、得意げな笑みを見せ、早く飲んでくれと言わんばかりに憐を見つめた。

「あ、ああ。すまないな」

憐はすこし戸惑い気味に返事をし、赤い木の実が描かれた、英国の高級コーヒーカップとソーサーに手を伸ばした。

だがそれを邪魔するかのように、いつのまにかそこにいた夕霧が、トンと湯気のたった緑茶を置く。

「所長はコーヒーが苦手。出すなら緑茶にしろ」

自分の仕事をとられたからなのか、やや不機嫌な夕霧が、冷たく風雅を見据えた。

年下に叱られ、風雅は慌てた様子で憐を見やった。

「そ、そうなのでございますか！？ 失礼致しました！」

急いで持ってきたものを回収しようとするが、憐はカップから手を放そうとはしなかった。

「いや、風雅が折角用意してくれたものだ。ありがたく頂こう」

「所長……」

風雅はまるで、神に感謝するいたいけな少年のように、両手を胸の前で合わせて目を輝かせた。

それにあまりいい気がしなかったのか、夕霧は軽く頬を膨らませてふて腐れる。

「ちょっとさ、夕霧？ あ、失礼します」

ノックもせず、ドアを大きく開けてから入室の言葉を付け加えた双葉は、左手に持った漆塗りの茶筒を軽く振った。

「もうお茶葉ないんだけど、買いためとかしてる？」

「それな」

「あーそれじゃあ、僕がどこかで買ってきますから！」

何か言いかけた夕霧の言葉を切って、風雅は背中のエプロン紐を外しながら、ドアを出て行った。

「ねえ、アイツ、本当に大会社社長のお坊ちゃん？ やけに雑用係が、体に染み付いてるみたいだけど……」

そそくさと出て行った、風雅の残像を見つめるように、双葉はドアに視線をやったまま来客用ソファに腰掛けた。

「働き者が来てくれて助かる」

相変わらずの、のんびりとした憐の発言だったが、「実際は彼が色々余計なことをしてくれて、赤字に拍車をかけているんですけど」とは言えなかった。

「遅いわね」

双葉は頭の後ろで手を組み、どっとソファへもたれかかった、風雅が出て行ってから、既に40分以上も経過していた。別にそれほどお茶が飲みたいというわけではなかったが、特にすることもないので、風雅がちらりと気になっただけである。

ドアをノックする音が響き、帰ってきたのかと視線を上げると、盆の上に淹れたての茶を乗せた夕霧だった。

「あれ？ お茶あったの？」

「ここで使ってるお茶の葉は、茶園から直接取り寄せしたもの」

「え？ それじゃあアイツ何しに行ったのよ……」



「僕が言おうとしたら先に出て行った。自業自得」

デスクの上にお茶を置く夕霧の横顔に、本当に自業自得なのかしら、と双葉は思った。

「何か面白いニュースでもやってないかな」

赤いボタンを押すと、何もなかったはずの白い壁の一部が縦に開き、押し出されるように、大型液晶テレビがその姿を現した。最初は驚いたが、今となっては慣れたもの。

映し出された映像に、双葉は少し興味を持った。

「ん？ 立てこもり？」

双葉の声に、憐も夕霧もテレビへ視線を移した。

リポーターがヘリコプターから、興奮気味に状況を伝えていた。

『現在、西ノ方百貨店の前に来ております。犯人は複数の人質を取り、依然立てこもっている様子。えー現在までに、伝わっております情報によりますと、犯人の数は四人、逃走資金1億円と海外への逃亡手段、そして刑務所に収監されている、連続強盗犯、金尾暮蔵の釈放を要求している模様です。繰り返します、立てこもっている犯人たちは……』

「やれやれ、この間の爆弾魔再来といい、物騒な世の中ですね」

双葉は背もたれに肘をつき、頬を乗せて呆れたように中継を観て

いた。

『あ、犯人が窓側へやってきました。カメラさん、寄って寄って！犯人が人質の一人を連れ、窓越しに姿を現しました！』

画面には、犯人と拳銃を突きつけられている、人質の姿が映し出された。

「ちょ、あれ、え！？」

その部屋に居た三人は、驚きに声を失った。

『犯人が、まわりを取り囲んでいる警官たちに、何か叫んでいるようです。あ、人質の方も何か……えっと“ちょうちょう”？“そそう”？“しょちょう”？ですかね。ああ……恐ろしいのでしょう、涙を流している模様です』

「ふ、風雅……」

映し出された光景に双葉は、呆れるべきなのか、同情すべきなのか、一体どういう感情を抱くべきなのか分からなかった。

『おや？ 人質の方が、手に何か持っていますね……何かのメッセージでしょうか』

「それは烏龍茶」

お茶の種類も分からないのか、との夕霧の冷ややかな突っ込みとは対照的に、憐は真剣な表情で立ち上がった。

「所長？」

双葉もテレビから視線を外し、憐を見つめた。

「迎えに行ってくる」

「迎えに……って、あ、ちょっと待ってくださいよ！」

憐の大きな背を、二人は急いで追いかけた。

「おい、出て来いコラ！ いい加減疲れんだよ。さっさとそのモジヤモジヤ殺つて、出てこいや！」

「ちょっと侠さん！ 何言ってるんですか、警察としてあるまじき発言ですよ！？ マスコミに知られたら……」

一人の若い刑事が、防弾チョッキにノーヘル姿の中途半端な装備で、開きっぱなしのパトカーのドアにもたれ掛かっていた。左手の拡声器で、気だるそうに犯人に話しかける上司に、部下は誰かに聞かれてはいないかと、焦ったように周りを見渡した。

「スイッチ入れてねえよ」

そう言つて辛そうに、凝り固まった肩を回す男は、名をかみしよしきようすけ上照侠輔と言つた。階級は警部補、しゃんと立てば存外背は高く、体も鍛えているようで、がっちりとして見えた。

だがシャツはアイロンもかかっていなければ、襟ぐりや袖口もきちんと洗濯されておらず、おまけにボタンもいくつか取れかかっていた。

さらに侠輔はろくに料理も出来ず、コンビニの弁当やお握り、カップ麺やパン類ばかりを食していた。それはさすがに体にも悪いと本人として自覚はしていたが、何分不器用で、この間も特製チャーハンに挑戦して火事を引き起こしかけて、大家の怒りを買つたため、炊事はすっかり諦めモードだった。

「随分と、気の抜けた対応をするんですね」

呆れたような声を背中に掛けられ、侠輔は勢いよく振り返った。

この暑い最中、ビシッとスーツを着こなす黒髪の男とその連れに、侠輔は一瞬、刑事の顔を見せた。

「おいおい、部外者は立ち入り禁止だぜ？」

肩に拡声器をのせ、軽い口調とは裏腹に、鋭く三人を観察する。

「それなら心配ありません」

憐は内ポケットから黒の薄い手帳を出すと、それを侠輔に手渡した。

漆黒と金色の、二色刷りのその手帳は、金枠の上半分に猛々しい龍の絵が描かれていた。その下には何やら斜体の英単語と、さらにその下部には、金で塗りつぶされた長方形に、アルファベットで *en Kawaii* と名前が入っていた。

「あんだこれ、デイ……スペシャルパス？ あいにくここは、遊園地じゃねえんだよ」

聞きなれぬ英単語列を口に出し、侠輔は渋い顔をした。

「違いますよ、俠さん！ 知らないんですか？ デイテクティブ・スペシャルパス！ 世界探偵機構、WDOが選んだ、12人の探偵に選ばれたものだけに与えられる、特別な探偵証！」

「探偵証だ？」

ピンと来ていない様子の侠輔に、部下はやや興奮気味に説明を始める。

「この手帳を持っている者は、世界各国どの公共機関にでも立ち入ることが可能で、その申し出を、正当な理由なしに断ることは出来ないんです！ そんなことをすれば、その国はWDOの探偵にある一定期間から無期限の間、依頼することができなくなる。ある種警察バッチ以上の力があるんです。それに……」

部下の青年はそこで一旦言葉を切ると、聞かれてはまずいことなのか、憐をチラチラ見ながら声をひそめて話し始めた。

「河合つて多分あの河合財閥の方ですよ。警察関係者とも太いパイプ持ってるみたいですから、下手するとクビ飛びますって！」

「へー」

部下の精一杯の脅しにも、この男には聞かないようで、興味なさそうに手帳を裏返した。

見ると確かにWDOの文字と、D-??（12人の探偵）の金文字が縦に並んで記されていた。

「ああ、自己紹介まだだったな。オレは警視庁捜査一課特殊捜査班の上照侠輔。で、いくら積んだんだ？ お坊ちゃん探偵さんよ」

小ばかにしたような笑みを見せながら、憐の胸元へ手帳を放り投

げた。

「ちよつとあんた……」

あまりの言い草に反論しようとした双葉を、憐は手で制止する。

「それよりも、状況を教えてもらいたい」

「それは高田永礼たかだながれ巡査部長から、どうぞ」

侠輔はサーカスの道化のように、わざとらしく手で部下を指し示し、自身は開けっ放しの車の助手席に腰掛け、置いてあつたペットボトルのスポーツ飲料を飲み干した。

永礼はそんな上司に少々呆れた顔をするが、今更かと息を吐いた。

「えつと犯人グループは四人、とはいえいずれも完全武装をしていて、銃や手榴弾なども所持している模様です。要求は現金一億円と逃走用の車、海外へ逃亡するための航空機の手配、それに収監中の凶悪犯、金尾呉蔵かなおくれぞうの釈放です。こちらも何とか時間を稼いで、隙を窺つてはいるんですが、犯人側はすでにしびれを切らせているようで、何度か銃を乱射しています。幸い死傷者は出てはいませんが、先ほど申し上げた通り、手榴弾も所持していることから、予断を許さない状況が続いています」

憐は永礼の話をきちんと確かめるように、軽く頷きながら聞いていた。

「なるほど、分かりました。私の助手も人質に取られているようですし、ここまで来たからには、私が後をお引き受けします」

そんな真剣な言葉を、侠輔は鼻で笑いながら、空になったボトルで憐を指した。

「いい心意気だ。ケドよ、あんたに何が出来るってんだ？ こつちだつて立てこもりに関してはプロなんだぜ。そのオレらが手をこまねいてるってのに、お前みたいなの」

「いいからそれ貸しなさいよ！」

「おい、お前」

双葉は侠輔から拡声器を奪い取ると、それを憐に手渡した。

憐はどこかへ電話を一本入れた後、一言「申し訳ない」と侠輔に詫びを入れると、バリケードを作る武装した警官隊たちの間をすり抜け、その前に立った。

「あんだってんだよ」

犯人のほうへ向かってゆく憐の背を、侠輔は苦々しげな表情で見つめた。

「聞こえるか、聞こえたら返事をしろ」

建物内にいる犯人に向かって、憐は拡声器越しに呼びかけた。

「遅えぞ！ 準備はできたのか！」



なかなか自分たちの要求が通らないことにイライラし、ぶち切れる寸前の犯人は、半ば怒鳴るようにして憐に答えた。

「ああ。お前たちの要求は全て呑む」

だが憐はあくまで冷静に、相手を刺激することなく淡々とそう告げた。

その言葉に真っ先に反応したのは、犯人ではなく、今まで交渉を取り成していた侠輔の方で、信じられない、と目を見開いた。

「な、何だと！？ 要求を全て呑むだ？ 何言ってるんだ、アイツ！」

止めに入ろうとした侠輔の耳に、甲高いブレーキ音が聞こえ、後ろを振り返った。ヌーの群れのようなパトカーの最後尾に、この場には到底相応しくない、豪華なリムジンが乗りつけていた。

「お前らー！ オレはここだ！」

でっぷりとした、白いカッターシャツに灰色のスラックス姿の恰幅のいい男が車から姿を現し、犯人たちへ大きく手を振る姿が目に入った。

「か、金尾。本当に釈放したのか……」

今までの刑事生活で見たことの無い光景に、侠輔は声を詰まらせた。

金尾は札束の入ったスーツケースを、これ見よがしに高々と掲げ、

仲間に見せ付ける。

「見ただろ。金尾は解放した。警官隊は全て撤退させる。その代わり人質の解放を約束しろ」

拡声器でそう告げる憐に、犯人たちは喜びに、互いの肩を叩きあう。国家機関への完全なる勝利に、酔いしれているようだった。

「うづうづ……な、なんで僕があ」

「うるせえ、早く歩け！」

一人を残して全員の解放を約束した犯人と共に、銃をコメカミに突きつけられた風雅が、この世の終わりのような表情を貼り付けて、百貨店から連れ出されて来た。

「テメエら警察も、大したことねえよな！　ハハハハハ！」

犯人たちは得意げな顔で、武器を捨て、おとなしく彼らの様子を見守るしかない警官たちの姿を小ばかにしたように見渡した。

「探偵風情が好き勝手しやがって……！」

憐に指示され、手も足も出せなくなった警官たちの間を、まるで勝利軍の凱旋のように意気揚々と歩き、リムジンへ乗り込んでゆく

犯人たちを見送りながら、俠輔は奥歯を強く噛み締めた。

僕はひどくささくれた縄で、後ろ手にきつく縛られ、麻布を頭に被せられると、二人の男に両脇を抱えられて、引きずられるようにどこかへ連れられて行かれた。

二の腕に食い込む野太い指が、同じところを随分長く押さえつけていて、どうにも痛くてたまらない。少しでも場所をずらして楽になるうと体をよじりたくとも、すっかりやせ細った体では、あのでっぷりとした男たちには、とても敵いそうになかったし、抵抗する様子を僅かでも見せれば、またあの使い古された長い鞭で僕を打つのだらうと、ぐっと耐えていた。

奴らがいつも飲んでいる安っぽいブランデーの香りが、奴らが口を開くたびに、獣臭い吐息に混じって吐き出されてゆく。それでなくとも無理やりに連れられてきたこの場所は、やけに湿気が多く、そして気管が遮られそうになるほどにホコリっぽかった。最初の頃はひどくむせ返っていたものだ。

連れてこられて数日した頃に、やっと差し出された食事。犬の使うボウルよりも質の悪い、ボコボコのアルミ皿に入れられたベチャベチャの小麦粉の塊が、まだ胃の中でとけきれずに、ぐるぐる渦巻いているように感じた。気分が心底悪いが、吐き出す気力さえも起きない。

これから一体どうなるんだろう　豚臭い麻布を被せられ、視界を遮断された状態の中、まるで他人事のようにぼんやりと考えていると、前方から大勢の人間の声が聞こえてきた。これから何か楽しいことが起こるのだらう、皆一様に興奮したようにささやき合っ

いた。

何だろう……。今の僕に、それを知るすべは無い。

勢いよくカーテンが開かれる音と共に、強い光が当たるのが分かった。麻袋の小さな隙間から、目を貫くような光線が入り込んでくる。しばらく日光に浴びていなかった僕には、強すぎる光だった。

それと同時に人々の拍手や喝采が頭の上へ降り注ぎ、それは僕へのものであると何となく解した。

麻袋と縄が乱暴に取られ、僕はやっと周囲を見渡すことが出来た。薄汚れた黄色とオレンジのボーダーの大きな円形のサーカス用のテントは、周囲にぐるりと観客席が設置されていた。席は一つ残らず埋まっていて、立ち見客の一人が酒瓶を片手に、下卑た笑いを浮かべているのが見えた。

彼らに見下ろされるように、僕は地面がむき出しになったままの土のステージに座り込んでいた。

司会と見られるガタイのいいヒゲの男が、マイク片手に何か大声で叫ぶ。でも僕には、その聞きなれない言葉を理解することができなかった。

何？ 何なの？ 帰りたいよ……。所長……。

突如不安になった僕は、正面に気配を感じた。真っ暗な鉄格子の向こうから、鋭い爪と牙を生やした獅子が、目をランランと輝かせて僕を見ていた。

待って……。待ってよ、こんなので

僕の必死の呼びかけに、視界の男がにやりと口元をゆがめ、そして勢いよく檻が開け放たれた。

「うわああああ！　ってことになったらどうしよおお！　やだよ〜！　何でもするから許してええ！　僕を売り飛ばさないでえ！　ママ〜！　所長お〜！！！」

「うるせえよ、何言ってるんだテメエー！　早く乗れ！」

男たちは一人ギヤーギヤー騒がしい風雅に両脇から拳銃を押し付けながら、滑走路に用意された小型の航空機へと乗り込んだ。

半べそをかきながら、操縦席の後ろへ座った風雅は、これから起こるかもしれない様々なシチュエーションを勝手に思い浮かべては騒ぎ出し、ついにはガツクリと頭を垂れておとなしくなった。

「うっし、じゃあ出発しろ！　下手な真似しやがったら、ただじゃおかねえからな！」

男たちは前の座席に座る操縦士二人へ銃を突きつけ、操縦士の二人はおとなしく機体を動かし始めた。

「よしよしよし！ 上手くいったぜ！」

動き出す機体に、男たちはにやける顔を押しさえつけることができなかった。海外へ逃亡し、手に入れた金で遊び、無くなればまた同じ手口で金を巻き上げればいい、簡単なことだ。

「てか、オレらどこ行くんだ？」

「そっぴゃ、そっぴゃ。じゃ、とりあえずハワイでも行くか！」

「うっしゅー！ おい、パイロット！ ハワイに行け！ ハワイ！」

「I'm sorry, sir？」

振り返ったサラサラとした髪の毛、人形のように端正な顔の副操縦士が、男へ冷たい視線を向ける。

「お、おいやべーよ、外人じゃねえか！」

「確かにパイロットを日本人にしろ、なんて言ってねえけど……そこは空気読めよ、チクシヨウが！」

「ど、どうします？」

弟分にどうするかと尋ねられ、金尾は少々戸惑い気味の表情を見せた。ここで格好の悪いところはみせられない。

「んなもんフリーリングで通じるわ！ デイスイズ、ハッピー！」

「アニキ、それ違うんじゃない……」

「あ？　じゃあ、アィムハワイ、うおんちゅー」

「……」

弟分たちの冷たい視線に冷や汗をかきながら、金尾はパイロットたちにそう告げた。思いが通じたのか、副操縦士が前を見据えたまま静かに口を開く。

「Ladies and gentlemen. Thank you for flying with DTC airline service to HELL. We will be taking off shortly. Please make sure that your seat belt is securely fastened. Especially you, there. Sea-weed head. (みなさま、地獄行きDTC航空をご利用頂きありがとうございます。まもなく離陸いたしますので、シートベルトがきちんと締まっているかご確認ください。とくにその海藻頭)」

副操縦士のその言葉に、風雅はハツとしたように顔を上げ、頷く。操縦席の二人と視線を合わせた。

「何なになに、何言ってるのか分かんねえって！　ハワイは通じたのか？」

「とりあえず、シートベルトが何とかって言ってましたよ」



「お、お前英語できるじゃねえか！」

金尾は感心しながらシートベルトを装着した。

「は、ここまでくりや安心だな」

上空へ飛び立った機体から、眼下に広がる真っ青な海を見下ろす。穏やかな風に応答するように、小さな波が立っていた。

白線を描いて走る船もいくつも見える。

「おい、機内サービスはねえのか？ フィッシュォーチキン？」

男は楽しげに操縦席へ話しかける。

「機内サービス？ これのこと？」

「え？」

副操縦しは突如流暢な日本語でそう言うと、脇にあった赤い大きなボタンを押した。

その瞬間、天井の一部が開き、爆音を巻き上げて、男たちの間に座っていた人質が座ったまま、遙か上空へと飛び上がった。いった。

「ああああ所長おおお」

跡形も無く消え去った人質に、男たちはキョトンとした表情で顔を見合わせる。

「え？ なに、どういうこと……？」

「人質……飛び去りました」

呆然と空を見上げる男たちは、ハツとしたように操縦席を睨みつけた。

「っておい、どうなってんだコラ……！」

返事をしない操縦席へ詰め寄ったが、憐と夕霧の二人はマイクの付いたヘッドフォンを座席に置いたまま、両サイドの扉を開けて男たちを見ていた。

「Have a nice flight (よい空の旅を)」

無表情で手を振り、落ちてゆく二人に、男たちは思考がついてゆかず、しばらくあっけに取られていた。

「あ、アニキ！ やばいですよ、これどうやって動かすんすか!？」

けたたましい警戒音鳴り響く中、我に返った男たちは、パニックになりながら操縦パネルのボタンを押しまくった。

「オレに聞くな！ 知るかよ！」

「ちょっとこれ、もうヤバイですよ！」

「待て待て待て！！ ぎいやあああああ！！」

操縦士の居なくなった飛行機は、男たちの絶叫と共に、真っ逆さまに海へとダイブしていった。

「大丈夫？ 風雅」

海上でモーター付ボートに乗って待機していた双葉に拾われ、風雅はびしょ濡れの体をぐったりと横たわらせた。

「もう、空も海も大嫌い……。でも売り飛ばされなくてよかった……  
はは、はははは」

何かとトラブルに見舞われることへ嫌気が差したものの、自分が勝手に想定した最悪の事態を免れた安心から、風雅は不気味な笑いを浮かべた。

（何笑ってんのかしら、気持ち悪……）

そんな風雅から、双葉は少し自身の体を遠ざけた。

「良かったですね。人質も無事でしたし、犯人も全員確保できましたし」

たかだながれ  
高田永礼巡査部長は、機体と犯人の回収真つ只中の海を背に、自身の上司へにこやかに話しかけた。探偵たちの手法は随分荒っぽいものだったが、まるで映画のようにダイナミックで鮮やかだったと、不謹慎ながらに思っていた。

「俠さん？」

何も答えない俠輔に、永礼は首をかしげた。

「何が良かったんだよ。オレらの面目丸つぶれだってんだ」

「で、ですけどああでもしなきゃ、死傷者が出てたかもしれませんし」

「出てねえよ！ 出させるわけ、ねえだろ……」

「あ、あの、俠さん！」

犯人逮捕に沸く警官や野次馬たちを尻目に、俠輔は遠くで警官たちと和やかに話す憐を、冷たく睨みつけると、一人覆面パトカーのドアを乱暴に開けて乗り込み、車を急発進させてその場を去っていた。

真っ暗な山道を、一台の車が走り抜ける。午後から急激に悪化した天候が、今まさにクライマックスを迎えていた。大きな雨粒が、強く叩きつけるように車体へ降り注がれる。

「酷い雨ですね」

夕霧は両手を膝の上に乗せ、行儀よく助手席に座り、つぶやくようにそう言った。

「そうだな。予報では曇りと言っていたんだが」

カーナビの端に浮く小さな雲のマークも、今はただむなしだけ。夕霧は不満げにそれをちらりと一瞥し、山の天気は変わりやすいですからね、と左右に猛スピードで動くワイパーへ視線を戻した。所々に設置された街灯や、時たますれ違う車のヘッドライトの明かりが、まるで水性インクに水を零してしまったかのように滲む。一瞬クリアになってもすぐ、水に濡れたフロントガラスは、目の前の視界を容赦なく遮った。

「あ、あの〜」

申し訳無さそうな声を出す後部座席の双葉に、憐は「どうした」と優しく尋ねた。

双葉は恥ずかしそうに口ごもりながら、両手でカフェオレの缶を

ギュツと握りしめる。

「お、お手洗いにいきたいのですが……」

モジモジとそう言う双葉に、夕霧は呆れたような視線を送った。

「だから言った。水分取りすぎだって。それ何本目？」

そう言って双葉の手元の缶をジト目で見やる。

「し、仕方ないでしょ。のど乾いちゃうんだもん」

本当は大してのどなど渴いていなかった。車内の冷温庫に入っている、その辺の自販機では手に入らない高級な缶ジュースやコーヒ―に、手が止まらなくなっただけのこと。だがそんなことを言えば、この少年にどれだけ冷たい目で見られることか。

そう思った双葉は、とっさにありきたりな嘘をついた。

「だ、大体こんな山奥にまで来させるほうもどうかしら？ それも犬が逃げたとかって依頼でしょ。案の定自分で戻ってきたし。こんなことなら私も、風雅みたいに事務所で留守番しておけばよかった」

「自分で行きたいって言うたくせに、よく言う。どうせ、おいしい山の幸があるっていうのに、釣られたんでしょ」

図星をつかれた双葉は、ウツと声を詰まらせた。

「あんたはうるさいの。そんなことよりあの、所長……」

トイレに行きたいなど、人間としてごく自然な現象ではある。だ

がそれをわざわざ口に出す　それも相手は知性も財力もあり、おまけに容姿まで整った若い男　その恥ずかしさを乗り越え、それでも言わざるを得ないほどに限界が近かった。この尿意を目の前の生意気な年下少年へ移す方法はないものかと、できもしないことを考える。

「うん、そうだな。だがこの辺りには、ガソリンスタンドも無いよ  
うだ」

憐は少々困ったようにナビを見つめた。

「その辺でしてくれば？」

「できるわけないでしょが！」

冷ややかな夕霧の言葉に双葉が声を荒げた瞬間、憐は何かを見つけて小さく声を上げた。

「あそこで借りよう」

見ると車道から少し外れたところに、大きな古びた洋館が建っていた。この天候だからか、それとも時間帯だからなのか、それとも常にそうなのか。明かりはついてはいたが、どことなく嫌な雰囲気纏った屋敷だった。

いつもの双葉なら、そんな怪しげな所へ立ち寄ろうとすることに断固拒否をいただろう。それを臆病者だと言われるのは彼女にとつて少々心外だが、お化け屋敷のように、“絶対に安全だ”と心の底では分かっているのと、何があるのか分からない場所へ足を運ぶのとではわけが違う。わざわざ“そういうスポット”的な所へ行く人の心理が、双葉には全く理解できなかつた。

だが今は、恐怖よりも勝っているものがある。

警戒心を忘れ、これで一安心だと双葉は胸をなで下ろした。



砂利道へ滑るように車を入れ、憐は入り口に程近いところへ車を停めた。エンジンを止め、雨が滝のように流れる助手席のウィンドウの向こうをしばらく見つめる。

一息をつくくと、シートベルトを外しながら後ろを振り返った。

「双葉、行こうか。夕霧、お前はここで待っていてくれ」

そう告げると、二人は強く降りしきる雨の中を駆け足で玄関まで行き着いた。

「夜分遅くにすみません、どなたかいらっしやいますか」

チャイムが見当たらないため、憐はやや強めにドアを叩いてそう言った。まるでチヨコレート板が二枚並べられたような、こげ茶色の重厚な扉から野太い音が響く。

玄関口は小さな屋根が激しい雨を遮ぎってくれていたが、少々肌寒さが二人を襲った。

なかなか応答の無い扉の向こうに、双葉は軽く不安を覚えた。

（まさか誰もいないなんてことはないわよね？ 期待させておいて、勘弁してよ）

やがてゆったりとした足音が聞こえ、ロックが外される音がし、錆びた蝶番の音と共に薄くドアが開けられた。

双葉は良かった、と無意識に頬を緩ませる。

「どちら様かの」

そう言つて顔を出したのは、口の周りに長いヒゲを蓄えた老人だった。顔には年齢相応のシワと染みがあり、頭頂部の髪は申し訳程度に覆っているだけ。やけに腰も曲がっていて、とても背の低い印象を受けた。

柔らかなベージュのスーツの首元には、コインタイプのループタイを締めていた。埋め込まれた光の欠片が、キラキラと輝いていた。この老人自身の上品さから、その何不自由ない穏やかな生活スタイルが垣間見えるかのようにだった。

「突然申し訳ない。実はお手洗いをお借りできないかと思ひまして。お願いできませんか」

憐の丁寧な物言いに、老人はまぶたの垂れ下がった細い目でチラリと双葉を見上げ、その必死な形相にクスリと笑った。

「どうぞ、お入りください」

そう言つと一歩下がって大きく扉を開き、骨とくたびれた皮が張り付いただけの貧相な手で、招き入れてくれた。

まるで、チェス盤のような模様のタイルがあしらわれた玄関ホールへ足を踏み入れる。白熱灯のためか、屋敷は全体的に暖色系の色に包まれ、どんよりと薄暗かった。高級そうなねじ巻き式の大きな柱時計が、黄金色の振り子を左右に揺らして、静かな空間に時を刻む音を奏でる。

目的を忘れ、物珍しそうに周りを見ていた双葉は、ふと視線を上げて「きゃっ」と小さく悲鳴を上げ、憐の腕へしがみ付いた。

「これは……」

憐は双葉に腕を掴まれたまま、その方向を見上げる。

「ああ驚かせてしまって、すいませんね、お嬢さん」

老人はそう言うと、杖をつきながら、大きな一枚の絵の下へ近づいていった。

正面に掲げられたその大きな絵には、白髪を振り乱した裸の男が描かれていた。やせ細った両手で肉塊となった子供を抱え、既に頭と両腕のないその子の肉を、目を見開いてむさぼるように食らいついていた。暗い背景に、体から引きちぎられてゆく血肉の赤さが目につく。

「その絵は確か、“Saturno devorando a un hijo”直訳で息子をむさぼっているサターン。日本名は“我が子を食らうサトルヌス”、でしたね」

憐の言葉に、老人はゆっくりと頷いた。

「はい。19世紀に描かれた、かの有名なスペインの画家、ゴヤの作品です」

「き、気持ち悪い……」

双葉は眉間にシワを寄せ、ますます憐の腕を強く掴む。そんな双葉を安心させるかのように、老人は軽い調子で短く笑った。

「何、絵は嘸み付いたりしませんよ。まあ、魔よけのようなものです。さ、どうぞこちらへ」

右手の廊下を進んだところにある手洗い場へと、急いで駆け込んで行く双葉の背に苦笑いしながら、憐は廊下を見渡した。点々と取り付けられた明かりが、薄暗く辺りを照らす長い廊下は、まるで博物館のようにたくさんの絵が飾られていた。

「いいコレクションですね。17〜19世紀にかけての作品が、ほぼ年代順に並べられている。模写のようですが、本当に美術館のようです」

「ほう、お若いのに大した目をお持ちのようですね。以前まではたくさん本物も飾っておったのですが、やはり良いものは独り占めすべきではありませんからの。ついこの間寄贈したばかりです」

老人の話しを聞きながら、憐は額縁に積もったホコリへ目をやる。その視線に気づいたのか、老人は少々気まずそうに頭を掻いた。

「いや、お恥ずかしいことで、老人一人の手では中々手入れが行き届んもので」

「このような立派なお屋敷にお一人で？ ああ、いえ、初対面で不躰なことをお聞きいたしました」

「いえいえ、お気になさらず。妻と結婚した後も、子宝に恵まれず、妻が亡くなった後はずっと一人で暮らしております」

老人は杖に両手を乗せながら、どこかさみしそうにそう言った。

「そうでしたか」

「わー、これは玄関のと違ってステキな絵ですね」

いつの間にか化粧室から出てきていた双葉が、持参していたミニタオルで手を拭きながらそう言った。すっかりいつもの調子が戻ったようで、表情も心なしか明るくなっていった。

T字になっている廊下の突き当りへ近づくと、そこに飾られていた絵をじつと見つめる。

「お気に召していただけましたか、お嬢さん。これはとある画家が描いたものなんですがね、私も特に好きな一枚なんです」

老人は穏やかな瞳でその絵を見つめた。柔らかな色彩の中、小屋を背景にはつらつとした少年が犬と戯れる様子が描かれ、片隅には少年を優しく見守る両親らしき二人の姿があった。少年の瞳の輝き、犬の毛の柔らかさ、日の光の温かさや、森の爽やかな香りが風に乗って伝わって来るようだった。

「へ〜」と言いながら額縁へ触れる双葉に、「それ、実はウン百万するんですよ」とぼそりとささやかれ、即座に手を引っ込めた。

「す、すみません！ 大事な絵に……」

不用意に高価なものへ触れてしまったことに、双葉は慌てて謝罪した。だが老人はさほど気にするでもなく、おだやかに笑う。

「いいんです。ところでお二人さん、今夜はここへお泊りになられてはいかがです？ もう夜も遅いですし外はこの雨。危険も多いこ

とでしよう」

「え、そんな、悪いですよ。ね、所長」

遠慮がちに両手を振る双葉の腹の虫が、むなしく廊下に鳴り響いた。

「軽いお夜食も出しますよ？ ちょうど夕飯に、と作ったスープが余っておりますから」

イタズラっぽい笑みを見せる老人に、双葉は嬉しさと照れくささで、はにかむように笑った。

「おつきな絵」

食堂の壁際に並べられたチェストに手をつき、双葉は横に長いその絵を見上げた。

「この絵はえつと確か、ダヴィンチの“最後の晚餐”よね？ ここには数々の秘密が込められてるんだって。どうやったらそんなの思いつくのかしら」

どこかで読みかじった内容を、誰にともなく得意げに話す。ふとチェストへ目を移すと、たくさん写真たてが並んでいた。

手に取った一つは、若き頃の老人とその妻らしき人物が、キレイな洋服に身を包んで映っていた。

「よつぽど奥さんが大事だったのね。奥さんを撮った写真がいっぱい。けど……」

小さな額縁に入れられた写真は、どれも一人の女性が優しそうな笑みを湛えてはいた。だが、どこか俯き加減のものばかりで、伏せ目がちなものが多く見受けられた。

「あんまり写真に撮られるの、好きじゃなかったのかな？」

夕霧は双葉のうるさい独り言に、だからどうしたとばかりに口を開いた。

「で？ 何でこういうことになったの」

椅子を引き、自分の向かいに座る双葉を見つめながらそう言い放った。

食堂のテーブルは、まるで最後の晚餐の絵を髣髴とさせるような長い長いテーブルだった。入り口に一番近い方に、準備のため出て行った老人を待ちながら、三人寂しく腰掛けていた。手伝おうかとの双葉の申し出にも、老人は客人にそんなことはさせられないと一人で台所へ向かっていった。

トイレを借りるだけのはずが、宿泊まですることになったことと、車から屋敷へ行く際に、雨の中を走らざるを得なかったことに、夕霧は不満を抱いていた。頭に残る水滴を、忌々しそうにフルフル振って落とす。

「所長も僕も、お前みたいにヒマじゃないのに」

「い〜じゃない、他人のご厚意を無駄にするほうが失礼なの」

双葉はどこかわくわくとした様子でそう言い返すと、となりに座る憐に「そうですね、所長？」と同意を求めた。

憐はその呼びかけに突如現実呼び戻されたかのように「あ、ああ」と少々間の抜けたような声で答える。

「そうだな。いいんじゃないか、急ぎの用も無いし」

憐が良いというのなら、夕霧に反論はできない。ムツとすねたように少し唇を尖らせて、俯き加減に憐を見つめっていると、ドアノブを捻り、扉を押し開ける音と共に老人が食堂へ姿を現した。



「お待たせしました。さあ、どうぞ」

老人はそう言うと、銀色のカートに乗せたスープを三人の前へ置いてゆく。

「いただきます」

双葉はまずスープと共に置かれた、水の入った美しい器へ手を伸ばして持ち上げた。

「ねえ」

「何よ」

向かい側から浴びせられる呆れた視線に、双葉は口元へ持つていこうとしていた手を止めた。

「それ、どうする気」

「どうするって……大丈夫よ、車に乗る前にはもう水分を取り過ぎないから」

「お前のトイレ事情なんか知らない」

「じゃあ何。交換して欲しいわけ？」

どンドンと趣旨から外れてゆく会話に、憐が助け舟を出した。

「双葉、それはフィンガーボウルと言って、手を洗うための水だ」

「え？」

隣の言った意味が一瞬判断できず、双葉はしばし思考を停止させた。

そして目を泳がせ、咳払いをしながら、ゆっくりと持ち上げたボウルを元の位置へ戻す。ふとみた自分を見つめる夕霧の顔が、あまりにも悲哀に満ちていたため、「あんた今、“これだから貧乏人は”って思ったでしょ！」と恥ずかしさを込めて言い放った。

「ノーコメント」

その一言に、双葉はテーブルの下で密かに拳を握りしめた。

\*

「あゝ、美味しかった！ お風呂ももらってすっきりしたし」

老人の後ろに続くように、軋む階段を上がり、三人は二階の長い廊下を歩いていった。

「そうですか、それは良かった」

老人は軽く振り返りながら笑ってそう言いつと、廊下の途中の、扉の前で止まった。

「今夜はここでお休みください」

老人が扉を開け、左手で滑らかに室内を示した。

「ここは談話室です。部屋の左手の三枚の扉の向こうは、それぞれ寝室になっております。私は一階の食堂傍の部屋におります。ま、ごゆっくりどうぞ」

「ここまで親切にして頂き、本当に申し訳ない」

「いいんですよ、これも何かのご縁。ああ、ですがひとつ」

階段の方へ向かっていた老人が、ピタリとその足を止めた。

「あまり屋敷内を歩き回られないよう。この通り、照明も暗い。ケガでもなされば一大事ですから」

「大々丈夫ですよ。もうおなかイッパイで、完全に眠気に襲われますから」

おなかを軽く叩きながらそう言ってのける双葉に、老人はヒゲを揺らして笑った。

「そうですね。ではおやすみなさい」

老人の姿が見えなくなると、三人は部屋へ足を踏み入れる。天井のすずらんのような明かりが、夕焼けのような色で部屋を染めていた。

部屋はずいぶんと質素で、がらんとしていた。中央にローテーブルを挟むように、アンティークなソファが置かれていたほかは、鏡と小物が数点飾られた背の低いキャビネットがあるだけ。

だが双葉はそんなことを気にするでもなく、大きな四角い窓へ近寄

り、カーテンを開けた。

「まだ随分と降ってますね」

雨は依然勢力を衰えさせることなく、大きな雨粒が窓を叩いていた。テレビは置いてなかったため、双葉は何十年前のものかと思えるような古びたラジオへ近づき、スイッチを入れた。

ノイズの向こうに聞こえる低い男性の声を辿って、チューニングを合わせる。

やがてはつきりと聞こえてきた天気予報に、耳を傾けた。

『 から降り出したこの激しい雨は、明日の未明に向かって徐々に回復するでしょう。明日朝は曇り、お昼前後には青空が見えるでしょう』

「明日は曇りのち晴れ、か。これで交通もスムーズになるわね。当たればー、だけど」

そう言っただ葉は、軽快な口調で話し始めた男性DJの声を遮るように、パチンと電源を落とした。

「じゃ、おやすみなさい」

「おやすみなさい」

それぞれ寝室へと姿を消す双葉と夕霧に「おやすみ」と笑顔を向けると、隣は窓の傍へ寄ってカーテンから外を望んだ。

「とある画家の絵。写真を撮られるのが苦手な妻。夜食。明日は曇りのち晴れ。交通もスムーズに、か」

そう呟くと、そっとカーテンを閉じた。

「お世話になりました」

双葉の明るい声が、屋敷の玄関ホールに響いた。憐と夕霧も、それぞれに礼を述べた。依然空は厚い雲に覆われ、日差しが十分に届いてはいなかった。だが雨はすっかりとやみ、森に包まれた洋館に、冷涼な空気が満ちていた。

「ではお気をつけて」

老人は最後まで柔和な表情で、細かい砂埃を巻き上げながら遠ざかってゆく車に、手を振り続けていた。

やがて姿が見えなくなると、老人は扉を閉め、少々疲れたように息を吐くと、玄関ホールに飾られたゴヤの絵を、しばらく睨みつけるように見つめた。

\*\*\*

激しいノック音の後、老人はゆっくりと扉を開けた。

「ちんたらしてんじゃねえよ。くそじじい」

扉の向こうに立っていたのは、鋭い目をした中年の男だった。タバコをくわえた口元には無精ひげを生やし、よれよれの古いスーツに、シャツのボタンも三つ目まで開けた、だらしない格好をしていた。

「で？ どこにあるんだ」

男はタイルの上にタバコをほうり投げて踏みつけると、吐き捨てるようにそう言った。

「どこにあんだよ！ アレは！」

イライラを隠しきれず、男は老人へ詰め寄った。肩を揺さぶられながら俯むいていた老人は、男の手を離れると、何も言わずに前を歩きだした。

手洗い場を通り抜け、廊下の突き当たりへと男を誘こびなつ。

「ほれ、ここにある」

老人が杖で指し示したのは、少年と犬の戯れる、あの穏やかな絵だった。

男は目を見開き、右の口角をうれしさにつりあげると、ハツとしたように急いでその絵に駆け寄り、額を握りしめた。

「そうか、こんなところに」

男はいとおしそうに額縁をなでると、やがて絵を強引に壁から取り外して、いそいそと玄関まで運んでいった。

「これで俺も……」

「少し、待つてもらえますか」

喜びに満ちた男が、ホールへとさしかかったところで、前方からそんな声がかかった。

男が顔をあげると、まるでシルエットのように、一人の背の高い男の姿が見えた。

「その絵をおいて、私の話を聞いていただけますか」

憐は男を見つめ、もの静かにそう言った。

見知らぬ三人組の登場に、男は眉間にしわを寄せた。

「誰だ！ テメーらは！ これは俺のもんだ！ 誰にもやらねえからな！」

憐は、絵を抱きしめ、狂ったようにそう吐き捨てる男から視線を外すと、悲痛な面持ちでこうつぶやいた。

「もうやめませんか。こんな悲しい計画を続けるのは」

いぶかしげな顔をする男が、憐の視線の先をたどると、そこには杖に両手をのせ、じっと床を見つめる老人の姿があった。

老人は俯いたまま微動だにせず、一言も声をあげなかった。そんな状況に痺れを切らした男は、「何わけのわかんねえこと言ってるだよ！ どけ！」と玄関扉へと近づいてゆく。

「まず気になったのは、高額だというその絵」

男が歩を進めるのにも動じず、憐はぼつりとそう言った。

憐の言葉に、男は鼻で笑う。

「絵だ？ こいつが欲しいのか。だったらくれてやるよ！」

男は額を裏返して絵を外し、キャンバスの裏から書類のようなものを引き剥がす、絵だけ放り投げた。

憐は無造作に叩きつけられた絵に、ゆっくりとした足取りで近づく、緩慢な動作でそれを拾い上げた。



「とある画家の絵。写真を撮られるのが苦手な妻。夜食。そして天気”今回の計画を知ることになった手がかりです」

憐は石のように動きのない老人を見やる。

「その絵は私が描いたもの。高値などつくはずがございません。本当に価値があるのは、その絵の裏に隠していた家の権利書くらいですかな。ですがだからと言って、私が何かしましたでしょうか」

老人は憐の言葉を肯定するでも否定するでもなく、抑揚のない声でそう言った。

「あなたは夜食を勧めてくださった時、フィンガーボウルを出された。手を使うものがあるならまだしも、スープのみの食事なら、わざわざあれを出す必要はない。ではどうして……答えは一つ。そうせざるを得なかったんですね。なぜなら」

憐は自分の横で、緊張したように唇を真一文字に結ぶ助手に目をやった。

「双葉が、毒のついたその額縁に触れてしまったから。だから双葉がそれ以上額縁に触れないよう釘を刺し、毒を中和する薬を含んだ水で手を浸させた」

「おい、ちょっと待てよ！ ど、毒だ？ 何のためにそんなもん……」

「分かりませんか」

頬を引きつらせて詰め寄る男に、憐は澄み切った瞳でそう尋ねた。

いや、“尋ね”てはいたが、それは確信めいた語気を含んだものだった。男もそれを感じ取っていたものの、それを口にする事に迷いがあつたのか、「何なんだよ！ はつきり言え！」と唾を撒き散らしながらまくし立てた。

憐は緊迫する空気を一旦終わらせるかのように、軽く目を閉じ、再び漆黒の瞳で男を見据える。

「これはある人物を殺害する計画です。権利書をダシに家へ呼び寄せ、毒のついた部分に触れさせ、その手で食べ物やタバコなどを口にし、死に至らしめようという計画……。そのある人物とは……息子さん、あなたですよ」

凜としたその一言に、男は声を詰まらせ、あたりは宙を舞うホコリが世界を制したかのように静まり返った。

「チェストの上の写真。奥様の写真がたくさんあるにも関わらず、どれも俯き加減でまるで“写真嫌い”のように見えた。でも実際は……」

憐は内ポケットから出した古びた紙を、片手で広げて見せた。

「奥様は、息子さんを見つめてらっしゃったんですね」

老人はそこで初めて、苦悶の表情を見せた。

「待てよ！ それじゃあ、オレが昨日の大雨で足止め食ってなきや……、ここに来てたらオレは。テメエ……なんでオレを！」

男が老人に掴みかかろうと足を踏み出す前に、老人が重々しく口を開いた。

「サトウルヌスがなぜ、我が子を食らっているのかご存じですか」

誰に尋ねるでもなく、老人は絵を見上げてそう言った。半身のなくなつた子供を食らう、恐ろしい形相の怪物を、穏やかな秋風にたなびく稲穂のように、静かに見つめていた。

「彼は自分の子に権力を奪われるという予言を受け、己の身に降りかかるうとする破滅の危機に恐怖を抱いたのです。その脅威から我が身を守らんとし、5人の子を食らい続けた。そう、結局は自分自身のため」

絵から視線を下ろすと、老人は自嘲気味に笑った。

「息子はいつからかギャンブルにのめり込み、借金や、恐喝、強盗、暴力行為を繰り返して、たくさんの方々を傷つけ、ご迷惑をおかけしてきました。何度逮捕され、何度刑務所から出てこようとも、何一つ変わらぬ悪行三昧。たまに顔を出すと思えば金かねカネ……。この屋敷の絵も、寄贈したではありません。もう随分前に息子に売り飛ばされ……。私もあのサトウルヌスと同じですよ。財産を息子に吸い取られ、私自身が破滅に追い込まれてゆくのに耐えられなかった。ですからせめて、妻がこよなく愛したこの屋敷だけは守ろう。そう、思っただんです」

老人は杖に乗せた両手を、硬く握りしめ、己の罪を淡々と口にした。

「それは、違うんじゃないですか？」

今まで押し黙っていた双葉が口を開いた。ついそう言ったものの、

お呼びでない自分が口を出すことがおこがましいと思ったのか、少々視線を泳がせた。それでも老人を見据え、はっきりと自分の思ったことを述べる。

「こ、これは私の勘ですけど、おじいさんは、思い出して欲しかったんじゃないですか？ 楽しかったあの日のこと。家族で過ごした毎日のこと。変わって欲しかった。いえ、元に戻って欲しかったんですよね。あのころの息子さんに。だから思い出のあの絵の裏に敢えて権利書を隠して、毒を中和するクスリを用意して、温かいスープを用意して夜中まで明かりを灯して待っていた。違いますか」

双葉がそういい終えるか否かの内に、老人はフツと力が抜けたようにドツと床へ倒れこんだ。冷たいタイルの上で、震える拳を握りしめ、搾り出すように声を上げた。

「それが叶わぬのなら、私もここで……この生を終えようと思っておりました。昨日、天气が荒れなければ、あなた方がここへ来なければ、お嬢さんがあの絵に触れなければ……きつと……私たちは

」

胸のうちで凝り固まっていた悪心が溶け出すかのように、老人のシワだらけのまぶたから行く筋もの涙が流れ落ちた。

やっと見え始めた一筋の日の光が、ステンドグラスの天使を通し、憐の手に持たれた少年の絵を優しく包んでいた。

\*\*\*

「いいんですか、所長。あの二人をあのまま放っておいて」

帰りの車の中で、夕霧は少々後味が悪そうにそう言った。

「いいじゃない。あとのことは二人で話し合って決めるって言うってんだし。そういえば、あの怖い玄関の絵の人は結局どうなったの？」

後部座席から、夕霧とは対照的にどこか晴れ晴れとした表情の双葉がそう問いかけた。

「あれは人じゃない。ローマやギリシャ神話の神様。ちなみに食べられた子供たちも神だから死なない。お腹の中で生きて、父親に対して怒ってた」

双葉は「え？ そうなんだ」と、夕霧の口から語られる話に聞き入った。

「結局最後に生まれた子は、母親によって飲み込まれるのを免れて別の場所で育った。その子がおなかに閉じ込められてた兄弟たちを吐き出させて、力を合わせて父親を倒したらしい」

「ふうん、なるほどね。結局は親子、仲良くするのが一番ってわけか」

「分かって言ってるの、それ」

「当たり前でしょ？ 私はアンタより年上のお姉さんなの。何でも知ってるんだから」

「じゃあ、あの絵のタイトルは何だったでしょう」

「もう、何回も聞いたから分かるわよ。えっと、我が子に……噛み付いている、ガ……ガブリチョコフだったかしら？」

「所長、本日の予定ですが」

「無視すんじゃないわよ！」

自分のもの覚えの悪さに恥ずかしさを覚えた双葉は、ごまかすように夕霧へそう食ってか掛かった。

「ウルサイ。所長、例の件ですが、これから直接警視庁へ向かいますか」

夕霧は横でハンドルを握る憐に向かって、そう尋ねた。

「いや、一旦事務所へ戻ろう。風雅も拾ってやらないと。電話をしておいてやってくれ」

「はい、分かりました」

双葉は二人の会話に出てきた、ある単語に目を丸くした。

「け、警視庁……？ 何で？」

「エム・エス・アイMSIからの要請らしい」

憐にそれだけ言われると、双葉はいつものように滑らかに走る車の中で、MSIが何なのかを考えながら缶コーヒーに口をつけた。

File・4・4

悲しい計画(後書き)

何かおかしな所があったら「一報を」笑)

「へー、ここがかの有名な」

千代田区霞ヶ関、桜田通りの面した一角に、地下三階、地上十八階建てのビルがそびえ立つ。向かいにの赤レンガの建物は法務省、となりには総務省、道路と濠を挟んだ向こう側に皇居、傍には他にも外務省、農林水産省、経済産業省、高等裁判所などが建ち並ぶ。そういつた重要な区域なためか、多くのパトカーが警備に当たっているのが見受けられた。

憐は警視庁の入り口に立つ制服の警官へ、探偵手帳を見せると、中へ車を進めた。

受付で二、三言葉を交わしてしばらく待っていると、すぐに誰かが降りてきた。

「この度はどうも、ご足労おかけしました」

背広のボタンを留めながら、憐へ手を差し伸べたのは、四十前後の男。平群警部へぐりだった。平群は刑事らしいといえば刑事らしい人物で、気軽に四人へ声をかけるが、その鋭い目が警戒心を緩めることはない。全てを見透かされるような気がするような、謎めいた力を感じた。

平群は何も彼らを怪しい人物として見ているわけではないが、一種の職業病であるらしかった。

双葉は何一つ悪いことをしたわけではないが、刑事にそんな目を向けられれば、イヤでもごこちなくなる。そんなぎこちなさをまた、



妙に思われはしないかと不安になった。

「大丈夫ですよ、双葉さん。もっと堂々としていればいいんです」

風雅はそう言って、やたらと胸を張って歩く。彼の細やかな気遣いにたまには感謝することはあるが、馬鹿なのが難点だと思った。

「こちらです」

平群はそう言って、ある部屋の扉を開けた。

「ここが、MSIの本部です」

思いの外、広い部屋だった。前方の大きなスクリーンには、プロジェクターから映し出された警視庁のロゴが上下左右、クルクルと回転している。傍にはなにやら資料のたくさん張られたホワイトボード、積み上げられた資料の上にマイクも置いてある。

左右に十列ほど、白の長いテーブルが並び、すでにいくつか人影も見えた。

「どうぞ」

中へと誘う平群に、双葉がずっと疑問に思っていたことを口にした。

「あの、ちょっといいですか？　ここって何の捜査を？」

「おいおい、んなことも知らずに来たのか？」

呆れたような、ぶっきらぼうな声に振り返る。妙に聞き覚えのあ

る声だった。

「あ、あなた……」

そこにいたのは、風雅が人質に取られたときに現場を指揮していた、あの若い刑事、侠輔だった。彼は相変わらずのだからしない格好で、ポケットに手を突っ込み、ふて腐れたように突っ立っていた。

「MSI、Mr. ジョーカー特別捜査本部だ。お荷物助手サン」

「お、お荷物……」

何か言い返そうとする双葉の脇をすり抜ける瞬間、ちらりと憐の方を見た。その顔に、あからさまな不快感が滲んでいる。荒れた高校生のように、乱暴に適当な場所へ腰掛けると、首に手を当てながら左右へ捻っていた。

何がそんなに気に入らないのかと問いただしてやるうかと思っただが、双葉がそちらへ向かう前に彼の部下が申し訳無さそうに頬をかいて進み出た。

「す、すみません。侠さん何かイライラしてて」

永礼は申し訳無さそうにそう言うが、どこか彼を庇っているようにも感じる。やはり警察と言う組織は、仲間意識がよほど強いのだろうかと思っただ。

（嫌な奴）

腕を組み、鼻から勢い良く息を吐き出しながら、双葉は侠輔の後頭部を睨みつけた。

「失礼しました。どうぞ」

平群は少々申し訳なさそうに謝罪すると、四人を席へと案内した。

暇だった双葉は、そっと辺りを見渡す。彼ら四人と侠輔、永礼、平群の他にも三名いた。

一人は、いかにもキャリアウーマンといった人物だった。高そうなスーツに身を包み、背筋をピンと伸ばして座っている。髪を上方で結び上げ、赤く染められた唇はキツと真一文字に結ばれていた。先ほどから何かパソコンへ打ち込んでいる、その光に照らされた顔は、相当な美人だと思った。

二人目はサルに良く似た顔の男。難しい顔をしながら、資料をパラパラとめくり、また顔をしかめる。申し訳ないが、それがまたサルにしか見えないと思った。

三人目は暗い部屋にもかかわらずサングラスをかけている、筋肉隆々の男。何をするでもなく、テーブルの上で手を組んで、じつと岩のように動かない。なぜか左右の手両方に腕時計をしていて、文字盤が青白い光を放っていた。

「あの、もしかしてこれだけなんですかね」

風雅が声をひそめ、こつそりと双葉へそう言った。彼女も同じことを考えていた。あのイカレタ爆弾魔を捜査するというのに、この席の空き具合は納得がいかない。

「まさか。そのうち来るでしょ？」

双葉がそういい終わった直後、平群が壇上へ上がった。マイクを軽く叩いて入っているか確かめると、それを口元へ近づける。

「この主任官を務めることになった、平群だ。メンバーが揃ったところで、MSIの会議を始める」

これで全員だという予想外の言葉に、双葉も風雅も目を大きく見開いた。

「では会議を始める。岸警部補、頼む」

そう言って平群<sup>へぐり</sup>が目配せしたのは、眼光鋭い女刑事だった。彼女は軽く頷くと、資料とパソコンを持って壇上へ向かった。

女刑事の名前は岸麗華と言った。最近はやりの“独立した女”の匂いが立ちこめ、張り詰めたような空気を漂わせている。触れればケガをしそうなほどに緊張感をその身から滲ませる麗華は、近寄りがたい雰囲気があるものの、体にフィットした質のいいスーツと傷一つ無いきれいなヒールからも、確実に仕事をこなす力があるだろうという安心感はあった。

「情報通信局情報技術解析科から参りました岸です。現段階で分かっているジョーカーの情報をまとめましたのでご覧ください」

スクリーンの画面が黒く切り替わり、米粒のような人々が大勢映し出された上空からの写真と、その左側にジョーカーの情報がずらりと並んでいた。

被疑者：Mad Joker 本名不明

容疑：テロ防止法違反 有印公文書偽造 など

国籍：不明

出生地：不明

年齢：不明

性別：不明

家族：不明

経歴：不明

利き手：両利き

特記：変装を得意とし、偽造パスポート、運転免許証等を多数所有  
複数言語を操る

MJ-? (ワン)との関係は不明

「おいおいおい、ほとんど何も分かってねえじゃねえかよ」

そうつぶやいたのは侠輔だった。面倒くさそうに、頭の後ろを丸めた資料でかいている。

「上照刑事の言うとおりです。ジョーカーに関してはほとんど何も分かっておりません」

小さなつぶやきは、しっかりと彼女の耳に届いていたらしい。

「それで、その上空からの写真は何なんだ？」

手を挙げてそう尋ねたのは、双葉がサルに似ていると感じた、宇治野警部補だった。

「これは2年前、アメリカのカリフォルニア州にて撮られた写真です。実はジョーカーがこの間日本で姿を現し、本格的に活動を再開する4、5年ほど前から、香港、サンクトペテルブルク、マルセイユの世界中で奇妙な爆弾事件が勃発しており、いずれも犯人は検挙されておりません。このカリフォルニアでの写真は爆弾事件の直後に撮られたもので、逃げ惑う人々の中に紛れてジョーカーが逃走した可能性があるかとみられます」

「その世界中で起こったという未解決の爆弾事件と、ジョーカーの関連性は？ 例のカードは残されていたのですか」

岩のようにジツと動かなかつた東寺刑事が、低い声でそう尋ねた。さすがにサングラス越しではスクリーンが見えにくかつたのか、額にめがねを押し上げ、意外にもつぶらな瞳で壇上を見上げていた。

「いいえ、カードは見つかりませんでした。ですが使用された爆弾が、MJ-?や今回豪華客船爆発事件でジョーカーの使用されたものと酷似していると、鑑識から報告がありました」

「MJ-?」……?」

双葉は静かに首を傾げた。ジョーカーのデータが映し出されているスクリーンにも、“MJ-?との関連は不明”と特記してある。何のことだろうかと思つたことが口をついて出た。

それは前列に座つていた平群が、双葉へ首を軽く捻つて振り返りながら小声で答えた。

「MJ-?とは、我々が名づけた呼称です。最初にジョーカーが現れたのは19世紀後半のこと。同じジョーカーを名乗ってはいるが、同一人物とは思えない。区別をつけるために、初代ジョーカーをMJ-?と呼ぶことにしました」

その説明に、なるほどと頷く。

侠輔は大きく息を吐き出し、手も上げずに問いかけた。

「で? 世界中で“予行練習”してたジョーカーが、何で日本から本格的に活動の再開を始めたんすか?」

麗華はその質問を待つていたかのように軽く頷くと、憐へ視線を送つた。

「それについては、河合さんが良くご存知なのではないでしょうか」  
(所長が?)

双葉はとなりに座る憐の横顔を見つめた。憐はほとんど物音も立てずに静かに立ち上がると、腰の後ろで軽く握った。

「はい。私の所属しております、世界探偵機構、WDOは19世紀後半に発足し、現在に至るまで、世界から合計12人の探偵を選んで、捜査のための特別な権力を与えています」

そついいながら、内ポケットから黒皮の探偵証を取り出した。

「これには龍が描かれています、正確には“辰”。12人とは十ニ支を表し、それぞれ“子”<sup>ね</sup>から“亥”<sup>い</sup>の称号が与えられていて、空きが出ればその度に埋められます。この辰はある事情で長らく空きが続いていましたが、100年ぶりに私が、1年半ほど前に受け継ぎました。前任者は同じく日本人の、甲斐山真司<sup>かみやましんじ</sup>、あなたがたのおっしゃるMJ-?を追い詰め、相討ちとなって命を落とした伝説の探偵です」

双葉は甲斐山真司なる人物を知らなかったが、世界的な犯罪者を追い詰めたという一言で、どれだけの実力の持ち主かが分かる気がした。

「だったら話はカンタンだ」

シンとした室内で突如侠輔が口を開いた。不敵な笑みを浮かべ、憐を見つめる。その双眸には、鈍い光が宿っているような気がした。



「イカレタ爆弾魔はお前を狙ってる。初めて負けた相手に復讐し、再び世界中で“遊ぶ”ためだ。他人の命を掛け金にな」

侠輔の言葉に、双葉は少々怯えたように、再び画面を見つめた。逃げ惑う人々が映された写真の中から、ジョーカーがこちらを見据えているような、嫌な予感がした。

憐たちはMSI本部から出て、廊下を歩いてエレベータへと向かっていた。今日は軽い顔合わせと、捜査方針を決めるだけで終わった。特に長時間の拘束を受けていたわけでもないが、部屋から出た双葉は、疲れたように息を吐いた。

「何にも分かってないなんて、まるで幽霊でも捕まえようとしてみるみたいですね」

本格的な捜査はまだ始まったばかりではあるが、それにしても手がかりが少ない。お嬢様の誕生会で起こった事件も、証拠を積んでいたであろう船は海の藻屑となつて湾の底に沈んでいる。

ジョーカーは憐を狙っているのだ。もしかすれば、今も変装して傍にいてもかもしれない。何食わぬ顔で笑いながら、後ろ手にナイフを握っているのかもしれない。

素性の分からない相手に標的にされるとするのは、想像以上に恐ろしいことだった。

不安になつて弱音を吐いた双葉は、そつと憐を見上げた。

「奴にはしつかりとした実体があるんだ。着実に追っていけば、必ず尻尾は掴める」

当の憐は焦つた様子はなく、まっすぐ双葉の眼を見て言い切つた。その漆黒の瞳に吸い込まれそうになり、彼女は慌てて視線を外した。

(所長なら、大丈夫よね)

自分へ言い聞かせるように、双葉は小さく頷いた。

「え、ちよ、何でオレが？」

「つべこべ言うな上照<sup>かみしょう</sup>。監察官に色々告げ口されてえか」

「脅しかよ……」

「何なら土下座して、靴の裏でも舐めてやろうか？」

「そっちの方が怖えんですが、警部」

言い合うような声に後ろを振り返ると、平群<sup>へぐり</sup>警部と侠輔が少々もみ合いながら部屋から出てきた。

「じゃあ頼んだからな」

背中を見せたまま手を振り、平群は反対側へと歩いていった。残された侠輔は軽く舌打ちすると、機嫌が悪そうな顔で憐を見た。ポケットに手を突っ込み、憐を睨み付けたままずんと廊下を進む。四人を少し通り過ぎたところで、ハタと足を止めた。

「行くぞ」

その言葉に、一同はキョトンとした。一体どこへ行くというのか。侠輔は急に四人を振り返ると、

「お前らの護衛をすることになったんだよ」

そう言って、半ば諦めたようにため息をついた。

\*\*\*

「護衛はいいけど、よりによってこの人なんてね」

双葉は夕霧へ、こっそりとそう耳打ちした。誰に言われたわけでもないのに、夕霧はきつちりとした休めの姿勢で立ち、滑るように動くエレベータの階数表示を見上げていた。

よく見れば、憐も同じ姿勢で階数ボタンの前に立っている。

「別に誰だつて良い。所長の盾になってくれるなら」

「ああ、それもそうか」

「おい、聞こえてんだよ、ガキ共」

侠輔は壁にもたれながら腕を組み、こそこそと話す二人を鋭く見据えた。こんなことに本気で噛み付くところからも、彼は成人しているとはいえ心はどこか幼いようだった。

エレベータは軽音を立て、一階に着く前に停止した。

滑るようにドアが開くと、一人の男が立っていた。

誰がどう見ても“落ち込んでいる”と言える様子の男は、頭を垂れ、エレベータが来たことにすら気づいていない。そんな男の雰囲気のないか、スーツまでよれて元気の無いように見えた。場所が場所なら“出た”のかと思ってしまうところだ。

「あの、大丈夫ですか？」

双葉は恐る恐る話しかけ、憐は開ボタンをそつと押した。

「あれ、後藤」

侠輔はそう声をかけ、顔色の悪いその男へ近づいた。後藤と呼ばれた刑事は、侠輔を見上げると、衿元を掴んでそのままエレベータの奥へと強く押し付けた。

「何、何、何、何だよ！」

泣き出しそうな後藤に、俠輔は焦ったようにそう尋ねた。

「俠輔、オレ……財布落とした」

エレベータに乗っていた全員が、何だと呆れ返った。確かに財布を落としたのはシヨックだろうが、まるで人生が終わったとでも言いたげな表情でそれを言われれば、拍子抜けするのも仕方が無い。

「財布？ お巡りさんに言って来いよ。幸い今ならそこら中にいるぞ」

「落としてすぐ、遺失物の届けは出した」

「それじゃあ後は、拾った奴が善良な市民であることを願うんだな。泥棒かそうじゃないか。確立は五分と五分だ」

淡々と返す俠輔に、後藤は胸倉から手を離して崩れるように座り込んだ。うめき声を上げて泣いているようにも見える。

「あんだよ、そんなに大金入ってたんか？」

足元でグズグズ言っている大の男に、俠輔は呆れながらも、少々同情するような表情を見せた。口は悪いが、情のある男なのだろう。

「よろしければ、私たちが探しましょうか？」

憐の声に後藤はハツと顔を上げた。

「我々は小さいながら、探偵業を営んでおります。お力にな  
「  
「お願いします！」

憐の言葉を途中で遮り、後藤は憐の両手を硬く握りしめた。涙でびしょびしょに汚れた顔をほころばせる後藤に、憐は戸惑いながらも懸命に微笑んだ。

＊＊

「落とした財布探しねえ。それで金もらえるんだったらいいよなあ。ま、河合財閥のお坊ちゃん商売なんかこんなもんか。おっと失礼、本音が」

憐の運転する車に乗った侠輔は、遠慮するそぶりなど微塵も見せず、シートにふんぞり返っていた。となりに座るそんな侠輔を、双葉はジト目でみやる。

「私たちは真剣に仕事してます！　というか、所長の車が四人乗りだから全員は乗れないけど、どうしてあなたがこっちの車なんですか？　後藤さんに自分の車運転させてまで……」

美しいブルーの車の後ろに、綺麗なワインレッドの車が続いている。電車通勤の後藤は車を所有しておらず、侠輔の車を借りて後ろについていた。風雅を助手席に乗せているが、どうもその運転技術は疑わしく、少々ふらついている。

「“どうして”って護衛なんだから、その対象者と離れるわけにはいかねえだろ」

そうは言っているが、双葉にはただラクしたかっただけのように見えた。

「いい車ですね」

夕霧は行儀良く助手席に座りながら、侠輔へポツリとそういった。

「最高時速300km以上出る、英国の高級スポーツカー。羽のエンジンが特徴で、確か日本へはあまり輸出されていない。新車の価格は3000万を超えるものも」  
「さ、3000万!？」

双葉は驚いて後ろを走る赤い車を振り返った。そういわれて見れば、確かに高そうに見える。

彼女に気づいた風雅が、妙な笑顔でこちらに手を振った。お前に用はない、と双葉は真顔で座りなおす。

意外なことに、侠輔は明らかに動揺したように目を泳がせていた。

「へ、へー中古で買ったからな。よく知らねえ」

「それでも普通の新車より随分高いはず。年式もまだ新しい」

「奮発したんだよ。文句あんのか？」

「奮発して買った車を、外車の左ハンドルに不慣れな人間に運転させるんですか」

「何が言いたいんだよ！ お前」

眉をひそめ、侠輔は明らかに苛立っていた。

「夕霧、妙な勘ぐりはよせ。すみません、上照刑事」  
「助手はちゃんとしつけとけ」

隣の謝罪に気を落ち着かせるように息を吐き出すと、胸ポケットから、タバコの箱を取り出して軽く左右に振った。

「これ、別にいいよな」

大した確認も取らずに一本口にくわえたその瞬間、双葉と夕霧の目から、氷よりも冷たい視線が注がれた。

ライターで、火をつけようとしていたその動作がピタリと止まる。

「わあつたよ……すいませんでしたね、非喫煙者さま」

火のついていないタバコを大人しくくわえ、肘について外の景色を眺めた。その横顔は、どこか陰があるように見えた。



二台の高級車は、一台は滑るように、一台は少々頼りなさげに路肩へ停車した。六人全員がぞろぞろと車から出てくる。

「この辺りで、無くした可能性が高いつてわけか」

侠輔はずっとガマンしていたのである。車から降りた途端にタバコに火をつけ、ゆっくりと煙を吐き出した。

タバコを奥歯で噛むようにくわえると、辺りを大きく見渡す。

「……にしても後藤、お前こんなトコで何やってたんだ？ いや、聞くまでもねえか」

侠輔は後藤を振り返ると、口の端を上げてニヤリと笑った。

やってきたのは、ピンクやら黄緑やら紫やら、けばけばしい色の建物がずらりと並ぶ裏通り。宿泊やら休憩やらの怪しげな文字が踊り、駐車場には目隠しの為の汚い暖簾がぶら下がっていた。

「誤解すんなよ、侠輔。オレはこの間ここで」

「麻薬密売人とながりのあると見られる、ホテル経営者、満谷辰哉容疑者を逮捕した。ですよね」

夕霧が、一步步み出てそう言った。

「え、あ、ああ」

「警察は随分前から満谷容疑者をマークしており、麻薬密売人との

つながりも濃厚と見られる。ただし、今回は麻薬関連での逮捕ではなく、あくまで風営法違反での別件逮捕。警察はそこから密売人の関係を辿っていこうとしているようだが、未だに所持品や自宅、ホテルからも麻薬は見つかっておらず、満谷に口を割らせることもできていない」

感心したように夕霧を見つめる後藤に、「新聞で読みました」と付け加えた。

「で、その満谷を逮捕しようとした時、アイツ裏口に隠し扉作ってやがってさ。そこから裏道を通ってこの通路に来て、あのホテルの角を曲がった裏の大きなゴミ捨て場で取り押さえたんだ。オレは向こうから回り込んで行ったんだけど……。逃げたヤツを追い掛け回したり揉み合ったりしたから、落としたのはその時しかないと思うんだけどなあ」

後藤は再び落胆したような表情を浮かべ、長い長い息を吐いた。

「ケドお前、ここしかないってのにまだ探してなかったのか？」  
「そりゃあホテルの中は見えて回ったし、他の捜査員にもオレの、黒いワニ皮の長札財布拾ってないか聞いてまわったさ。けど、仕事終わってからだったからもう暗かったし、目を皿にしながら一人でこんなトコうるついでたら、盗撮犯にでも間違われかねないだろ？だからオレの通った経路はまだ探してないんだ」

侠輔は、なるほどな、と煙を吐き出した。

「それじゃあ、お前が通ったルートを探して　　っておい、何やってんだ」

憐は一人でどこかへ歩き出し、容疑者が逮捕されたというホテルの前で立ち止まった。安っぽいラブホテルと憐は、まるで小屋に置かれたアンティークな高級家具のように、あまりにも不釣り合いだった。

しかし当の本人の興味は別のところへあるらしく、まじまじとホテルを見つめている。

「話聞いてたのか？ 名探偵さんよ。そこはもう探し ヒトの話聞けやこら！」

侠輔の声を無視し、憐はホテルへと入っていった。夕霧も、当然のようにその後ろへ続いてゆく。

「所長、待ってくださいよ！」

侠輔は走り出そうとした双葉の細い手首を、パシッと掴んだ。

「お前はオレたちと外を探せ」

「ええ！」

嫌な顔をする双葉にも構わず、侠輔は手首を引っ張って歩き出した。

「後藤、お前はそのモジャモジャ頭と組んで探せよ」

強引に物事を決める侠輔に、双葉はムツとした。

「ちよつと勝手に決めないでよ！」

「そうですよ！ 僕が双葉さんと組みます！」

双葉と風雅の抗議に、侠輔はため息をついて振り返った。

「あのなあ、あの男が逮捕されて、下手したらこの辺にやつ仲間が様子見にウロついてるかもしれないねえんだぜ？ 一般市民同士が手組んでどうすんだよ、馬鹿モジャ」

温室育ちの風雅は、“馬鹿モジャ”などといわれたことにショックを受け、口を開けたまま硬直してしまった。

「そんなに危ないんなら、四人で探せば……」

「別に、あくまで可能性の話っただけだ」

それを聞いた双葉は、二手に分かれて効率をよくし、さっさとこの件を終わらせたいんだなと直感した。

「侠輔、そのコが可愛いからって、イカガわしいことすんなよ。オレは犯罪者には、誰だろうと迷い無くワツパかけるからな」

「そりゃあ、保障できねえな。オレのほうに、誘われるかもしれないねえし」

と言って、半笑いで双葉を見つめる。

だが、前髪の間隙から見える意外にも透き通った瞳に、双葉は不覚にもどきりとした。

「わ、私があなたに何するっていうんですか！」

一瞬でも見とれてしまったことを誤魔化すように、乱暴に侠輔の手を払って睨み付けた。だが侠輔はすでに双葉の方は見ておらず、さっさと背を向けて歩き出している。つくづく勝手な男だと思った。

「お前らも、男同士でこんなトコ歩いて、変な目で見られねえようにな」

「あいつ、それが嫌でオレに男の方押し付けたのかよ……！」

後藤の呆れたような声も、聞こえていないフリをしているようだ。つた。

「あ、あの後藤さん？」

双葉は恐る恐る、小声で後藤へ話しかけた。後藤は幾分気持ちに余裕が出たのか、人の良さそうな顔に笑顔を浮かべている。

「あの上照かみしほって刑事、いつもあなんですか？　いつつも嫌味っらしいって言うか、子供っぽいって言うか、自分勝手って言うか。ほんっと大人げないですよね」

今までの言動の数々を思い浮かべ、双葉の嫌そうな顔でそう言った。だが後藤は、言っていることがよく分からないとばかりに、きよとんと不思議そうな顔をする。

「侠輔が？　いやあ、同期の中じゃ一番の出世頭だし、仕事熱心で頼りになるよ。普段からも付き合ひよくて、いい奴だと思うけどなあ。ああ、さっきのいかかわしい云々ことだったら気にしないで。ああ見えて刑事であることに誇り持ってるし、そんなこと絶対にする奴じゃないからさ」

（仕事熱心でいい奴……？　刑事の誇り？　あの人か？）

双葉は後藤の言葉を信じきれず、訝しげな顔で侠輔の背中を見据

えた。

「おい、何してんだ！」

突然振り返った侠輔に双葉はヒヤリとし、急いでその後を追いかけた。

「ないなあ……」

双葉は、ゴミ置き場をざっと眺めてそう呟いた。

特に雨が降り出しそうというわけではないが、場所が場所と言うこともあって、どこかどんよりとした不気味な雰囲気か漂っていた。それを誤魔化すように、ゴミ箱のふたを開ける。

「……ッ」

見てはいけない、いかがわしい類のものを目にし、声を詰まらせて、バンツと乱暴にフタを閉じた。

「おい、あつたか？」

その声にまた、ビクリとする。

物音に反応した侠輔が、建物の影から現れた。この状況がかなり面倒くさいのか、後頭部を荒くかきむしる。

「ありません。本当にこの辺りに落としたんですかね？」

腰に手を当て、周りを見渡した。室外機の裏や、雨でよれたダンボールも恐る恐るのぞいたが、それらしきものはどうにも見当たらない。

「もうよ、財布とかどうでもよくな？ どうせ大したモン入ってねえよ」

侠輔はそばにあった青色のゴミ箱の内、一番きれいなもの  
上へ座ると、新しいタバコに火をつけ、フウと白い煙を吐き出した。  
次々とタバコに手を出す姿を見ると、どうやらかなりのヘビース  
モーカーらしい。

値上がりしようと思える気はない。むしろその前に、買いだめし  
ているクチだろうと思った。

「あなた、それでも後藤さんのお友達ですか？ あなたにとっては  
大したものじゃなくても、後藤さんにとっては大切なものなんです  
よ？ 第一あなたは」

「あなた、あなたって。オレはお前の旦那じゃねえっつの」

（この屁理屈男ッ……！）

ギョツと密かに拳を握りしめる。

タバコの煙を漂わせる男の横顔を睨み付けた。

双葉はその様子にどこか違和感を覚えた。

いつもは若い男がタバコを吸っていると、どこか薄っぺらくチャ  
ラついた感じを受けた。タバコはやはり、ダンディーなオヤジが吸  
う姿が一番映えると信じていた。だが、この男にはあまり軽さを感じ  
ない。

なぜだかははっきりとは分からなかった。ただ、勢いよく噴出さ  
れた煙が、最後には跡形もなく消えてしまふ、哀愁のようなものが、  
この男にも感じられるからかもしれないと思った。

（“哀愁？”）

双葉は少々可笑しくなった。自分がそう感じたこととはいえ、そ  
んな繊細な言葉とこの男が、あまりにミスマッチに思えたからであ



る。

ガサツで乱暴、口も悪く態度も最低だ。しかし一方で、彼の周りにいるものたちは、こぞって彼を慕っている。それがなぜなのか、双葉は少し興味が沸いた。

そんな双葉を歯牙にもかけず、侠輔はため息をついて、ビルの間から見える空を見上げていた。

奇抜な色の建物の上をゆっくりと通り過ぎてゆく、真っ白な雲を眺めていた。

「あいつ」

「え？」

ぼつと考え事をしていたことで、いきなりの会話についていけなかった。

双葉は大きな眼をしばたかせる。

「お前の上司」

「所長が、何か？」

「本当に優秀な探偵なんか？ なんつてえか、“頭でっかちでインテリのボンボン”、って感じしかしねえけど」

双葉はムツとした。相当、金持ちにコンプレックスでも抱いているのかと思った。

「にしても、さぞかしご立派で有名な大学をご卒業されたんだろうけど、それで職業がしがない探偵だ？ は、笑わせんな。将来が約束された、金持ちの道楽にしか思えねえぜ」

尊敬する憐を侮辱され、双葉は怒りを募らせた。やはり嫌な奴だ。

「アンタに何が分かるのよ！ 所長はね、確かに有名財閥の御曹司だけど、絶対にそれを鼻にかけたりしないし、犬探しの依頼だろうがなんだろうが、一つひとつ真摯に取り組んでるわよ！ 警察が何？ それがそんなに偉いの？ アンタなんか、コソコソ隠れてスパード違反でも取り締まってるのがお似合いよ！」

そこまで言い切ると、双葉は肩で息をしながら、侠輔をにらみつけた。侠輔は、どこか自嘲的な笑みを浮かべる。

タバコを立てて弄び、火のついた先へぼんやり眼を向けていた。なぜかちょうど、線香のように見えた。

「オレ、母親を殺されたんだ」

いきなりの告白に、双葉は声を失った。

「オレが六つの時。道歩いてたら、ナイフでいきなり、らしい。犯人は特定されてねえし、だからもちろん掴まってねえ。それが、悔しくて、もどかしくてよ。だってそうだろ？ いきなり肉親奪われてさ。それが誰の仕業なのか、どうしてなのか。全く分からねえんだぜ……。そ。オレが警察入ったのは、その犯人をこの手で捕まえてやりてえっていう、至極単純な動機だ」

口もとは柔らかな弧を描いていたが、その眼は悲哀に満ちているように思えた。

「確かに、刑事になるうって思ったのはそれがきっかけだ。けど、今はもつと純粹に、この刑事の仕事に信念持つてる。だからスパード違反“でも”なんて馬鹿にされると、傷つくんですけど？」

ずるい男だと思った。

自分から相手を怒らせるようなことを言っておきながら、双葉には反論の余地を許さない。話の内容もそうだが、何よりもその強者の視線が有無を言わせなかった。

それだけ彼の信念が、しっかりと彼の中に根付いているのかもしれないと思った。後藤の、“あいつは刑事であることに誇りを持っている”という言葉を思い出す。

「す、すみません。言い過ぎてしまつて。け、けど元はといえばあなたが」

「来い」

いきなり手首を掴まれ、双葉は狭い路地へ連れ込まれた。

「ちよちよちよ ッ」

抵抗むなしく、あろうことか双葉をラブホテル入り口へと強引に引っ張り込んでゆく。

(何で……)

必死に抗うが、相手は大の男、それも現役の刑事に勝てるはずもない。大きな手で口を塞がれ、抵抗できないように両手首を腹の前で一つに拘束された。

入り口入ってすぐの壁に、乱暴に押し当てられる。ひどく背中が冷えた。

“まさか”という思いが、双葉の中を駆け巡る。

侠輔は獣のような眼差しで、そつと顔を近づけてきた。

怖さに震え、ギョッと目を瞑る。

「……ついてきては、ねえようだな」

双葉の肩口から向こうをのぞき、軽く息を吐いて双葉の拘束を解いた。あまりのことに、しばらく呆けたように侠輔を見つめた。

「い、いいきなり、何するんですか!」

やっとのことで、双葉は頬を赤く染めながら反論した。少々声が震えているのは、致し方ない。

「し。でかい声出すんじゃない。さっきいたんだよ。どうにもクセエ野郎どもが」

侠輔はさきほど、チラリと怪しげな男たちの姿を見ていた。明らかに一癖も二癖もある連中。ゴミ箱を蹴飛ばし、中を漁り、必死になって何かを探しているようだと感じた。

「もしかしてさ」

侠輔は口角を嫌味っぽく上げる。両手を壁につき、その間に双葉を閉じ込めた。そのしぐさや顔が何とも色っぽい。この男は、態度の悪ささえ改善されれば、鼻筋も通った、なかなかの良い男だった。ほんのりタバコの香りが鼻腔をくすぐり、少々長めの前髪から力強い双眸がのぞく。

「このままホテルに引っ張り込まれて、オレにやられちゃうかもと  
か思った?」

「ッ……」

凶星だ。寸分の狂いもない。

しかし、誰がそれを正直に言えよう。一応いたいけな少女のつもりだ。

ただ「何言ってるんですか」ときこちな返し、その精一杯の様子に侠輔は笑った。

「安心しろ。オレは未成年のガキに興味ねえから」

そう言っさつさと離れてゆく。

「ガキって……そういうあなたはいくつなんですか？ 私とそれほど変わらないんでしょ」

「いやいや、オレは超人だから」

何が超人だ。意味が分からない、と双葉は頬を膨らませる。

「あれ、何か踏んだか」

ホテルから出ようとした侠輔は、何やら黒い物体を踏みつけ、そっと拾い上げた。

（黒いワニ皮の長札財布……？）

まさかこれか？ と侠輔は思った。

（後藤の野郎、道一本間違えてたんじゃねえか）

労力返せよ、などとケチなことを考えていると、背後で靴音がして急いで振り返った。

「それをこちらへ渡してもらおうか」

ストライプの黒スーツを着た、小柄な男がそう言った。後ろには、人相の悪い男たちがニタつきながら大勢控えている。反対側からも、ぞろぞろと現れ、完全に退路を断られた。

小柄な男は、一見穏やかな雰囲気を纏っているように見えた。しかし侠輔は、こういう男が一番危ないことをよく知っていた。

冷たい風が小路を吹きぬけ、枯れ葉がクルクルと押し流されていった。

憐は警備していた警察官に事情を話し、ホテルの事務室に足を踏み入れた。狭いその部屋は、足の悪い机と、乱雑に段ボール箱が積み上げられているだけ。窓もないその部屋の下部に、なるほど、一人がやっと通れるほどの隠し扉があった。

「こちらをお使いください」

人の良さそうな若い警官から、礼言って手袋を受け取った。それをしっかりと両手にはめ、机の上や中を探ってみるが、様々押収された後なのか、残っているのは、どれも大したものではなかった。だが、ふとあるものが目に留まる。

（靴跡が、片方だけ……？）

壁側のカーペットの端に、少々くつきりと靴型がついている。しかし、もう一方が見当たらなかった。

憐はその靴跡に自身の足を当て、少々考え、片方の膝を折って屈んだ。

「！これは」

まっすぐに貫かれた一本の線を撫でた。カーペットは、まるでネコの毛をしきつめたような、赤色の古びた絨毯であった。深さもあり、踏めば靴のままでも、柔らかいという感覚がある。

その毛に隠れるかのように、うっすらと線が見えた。

「所長」

どこから持ってきたのか、夕霧は工具を手にしていた。まるで手術中の医師の助手の様に、それを手渡す。憐は、それを隙間に差し込み、てこのように持ち上げた。

まるで小さな爆弾が破裂するような音と共に、勢いよく蓋が外れる。

中をのぞくと、長方形のくぼみに、何か収まっている。それをとっと持ち上げた。

「黒いワニ皮の……」

憐と夕霧は、その財布に釘付けになるように見つめていた。やがて、我に返るように互いをみやる。そのまま無言で立ち上がり、驚いて背後から声をかける警官を無視し、飛ぶようにその場を離れた。

\*\*\*

「彼女とお楽しみのところ悪いね、お兄さん。それは私の財布だ」

スーツの男は渡せとばかりに、侠輔へ手を差し伸べる。男たちのニヤついた顔と、ガムを咀嚼する粘着質な音が、かえって緊張感を生んでいた。

双葉は恐ろしさに、縮み上がっていたが、侠輔の方はさすがにうべきか、堂々としている。

「本当か？ それじゃあ、中に入ってる物と金額でも言ってもらおうか。じゃなきゃ交番に行け」



「分からない奴だな、あんたも。知り合いが落としたんだよ。我々は見かけがこうだからなあ。警察なんか行って、あらぬ疑い掛けられんのも面倒だ。さ、大人しく渡せ」

あくまで、口調は至極穏やかだった。だが、見るからに善良な一般市民と言いがたい男たちの言葉を、鵜呑みに出来るはずが無い。

(まさか本当に、あの容疑者の仲間がうるついでやがったとはな…)

侠輔は、まさかまだ警察の捜査が続いているこの界限で、何者かが動くとは想定していなかった。自分の読みの甘さに、齒噛みする。チラリと双葉の様子を窺った。怯えたように周囲を見つめ、ホテルの外壁に手を当てていた。自分一人ならまだしも、彼女を巻き添えにはできない。できるなら捕まえたいが、余計な抵抗はしないでおこうと、侠輔は財布を男の方へ放り投げた。

スーツの男はそれを受け取ると、中身をあらためる。

「ない……。アレが入ってない！」

中にあるのは札が数枚と、カード類のみ。男たちの目当てとするものは、入ってなかった。

「どこへ隠しやがった！」

さきほどとは態度を豹変させ、口角泡を飛ばす男に、

「知るか。知り合いの財布じゃなかったのか？ だったらそいつに聞けよ」

「ふざけるな！ 入ってただろう！ ヤク取引の場所と日付の書かれた紙が！」  
「アニキ……」

思わず口走ってしまった言葉に、男は苦々しげに侠輔をにらみつけた。

「乗れ」

目の前にタイヤも車体も黒い車が、キツと音を立てて停車する。窓ガラスはスモークで、中がうかがい知れない。

「早くしろ！」

侠輔は小さく舌打ちした。この状況は確実に危ない。この車に乗れば、確実に戻っては来られないだろう。

相手側の数は多いが、今は構ってられない。

侠輔は一番傍にいた男の足の甲を踏むと、その勢いでとなりの男へ殴りかかった。

「うっ」

「ぐああ……」

急襲にひるんだ男たちの腹を蹴り上げ、背後から襲ってきた男の顔面に拳を食らわせる。

「逃げる！ 早く！」

双葉を振り返り、侠輔はそう叫んだ。だが、双葉は足がすくんで動けない。

「で、でも……あの……」  
「早く行け！」

侠輔に再び促され、双葉は小さく頷いて駆け出した。

「きゃあッ」  
「双葉……ッ」

だが陰に潜んでいた男に捉えられ、その動きを封じられた。首には小さなナイフをあてがっている。

「女の命が惜しかったら、大人しく車に乗れ！」  
「そいつには手出すな！」  
「だから、お前次第だと言っているだろが！」  
「ダメです！ あなただけでも、逃げてください！」  
「うつるせえ！ このアマ！」  
「ッ」

髪を捕まれ、耳元で怒鳴られた。恐怖で涙が零れる。

「ヤメロ！ 放してやれ！ 行くのは、オレだけで十分だろうが！」  
「つべこべ言わず、早くしろ！」

侠輔の願いを聞き入れるほどに、生易しい男たちではなかった。

「クソ……ッ！」

それでも侠輔は、周囲の男たちに殴りかかった。胸倉を掴み上げ、別の男へ叩きつける。

「おい！ マジでこの女ぶっ殺すぞ！」  
「……ッ、畜生……」

人質をとられた以上、侠輔はそれ抵抗が出来なかった。頬を殴られ、腹と背中を蹴り上げられる。大きく咳き込むと、口の中に鉄の味が広がった。

「お願い、やめてッ！」  
「おい、早く乗せる！」

二人は強引に車へ押し込まれ、巻き上がった排気ガスの向こうへ消えていった。

「双葉！ かみしろう 上照刑事！」

憐たち四人がその場に着いた時には、すでにそこには彼らの影も形も無かった。ただ、破壊された携帯電話の破片と、火のついたタバコだけが、むなしくそこに転がっていた。

「まずい……」

二人が連れ去られた現場を見て、憐は眉をひそめた。早くしなければ、命に関わる事態になるのは間違いない。

めちやくちやに踏み潰された二台分の携帯電話が、まるで二人の末路を予言しているかのようにだった。

「き、侠輔……。オレが財布なんか落とさなきゃ」

「後藤刑事。今は、そんなことを言っている場合ではありません。至急警視庁に応援の要請を」

「あ、はい……」

焦ったように電話をかける後藤を見て、風雅は泣きそうな顔で俯いた。

「ふ、双葉さん、一体どこへ。ああ、携帯電話さえ無事だったら、GPSで場所が分かったのに」

「携帯……」

後藤はその言葉に、ふと連絡を終えた手を止める。

「そういえば、侠輔は仕事用とプライベートで、携帯を二台持っていました。残骸はこれだけみたいだし、もしかしたら、そっちの方は無事かも」

「それ、今番号とか分かりますか……！」

風雅はポケットから小型の機械を出しながら、いつもとは違う、真剣な表情で後藤を見つめた。

\*\*\*

「ゲツホゲホ……ッ」

すでに薄暗くなった中、双葉たちはひと気の無い倉庫へ連れ込まれていた。元々は車関係のものを置いていたのか、ブルーシートに隠れた車や、タイヤが転がっていた。

巨大な鉄のフックが天井で揺れ、工事用の強烈なライトに照らされる中、侠輔は後ろ手に縛られた状態で、冷たいコンクリート床の上に横たわっていた。その周囲を、男たちが取り囲む。彼らには、フェアという言葉はないようだった。

「もう、やめてっ」

涙を流す双葉は、集団で暴行を受ける侠輔をもう見ていられなかった。強く両目を閉じ、顔を背けた。これからどうなるのかと考えると、背筋が凍るような恐ろしさを感じる。

（所長……夕霧ッ、もうこの際、風雅でもいいから助けて！）

「まさか、刑事さんだったとはねえ」

侠輔の警察手帳を揺らし、主犯格のスーツの男は余裕の笑みを浮かべていた。

「オレら全員、逮捕されちゃうのかな？ なあッ！」

「ぐッ」

目ぐるの警察への恨みなのか、侠輔の背を容赦なく蹴りつけた。侠輔は、辛そうに床に額をこすり付けるようにうずくまっている。

「ま、本当にあのリスト持ってねえみたいだし。もう用はねえな」

男が取り出したのは、刃渡り10cm以上あるつかというナイフだった。持ち手にはイニシャルが刻まれており、使い古されているようだ。ぬらりと光を反射する銀色の刃は、血を求めるようにぎらつく。

口の端に血糊をつけた侠輔が、男を睨むように口を開いた。

「殺りたきゃ殺れ。でも、その女は解放しろ」

「あ？」

(かみしょう  
上照刑事……！)

男が双葉を振り返る。男の常軌を逸したような表情に、双葉は体の芯から冷えてゆくのが感じた。

侠輔は、

「ただでとは言わねえよ。お前ら、満谷が持つてる麻薬の在り処を知りてえんだろ？ オレに警察と交渉させる。その情報と引き換えさせる。そいつ解放したって、人質はまだオレがいるんだ、悪い話じゃねえだろ」

男たちと交渉する侠輔に、双葉は（私だけ助かりたくない）と、言葉にならない叫びを上げていた。だが、喉が震えて呼吸すら上手くできない。

「泣かせるねえ。自分の命と引き換えにでも、自分の女を助けようってか」

男はニタニタと笑いながら、ゆっくりと侠輔の方へ屈み、その顔を覗き込んだ。

「けどな……信用できねえんだよ。サツの言うことなんか！」

髪を掴み上げ、床へ叩きつけた。鈍い音がイヤでも耳に入る。

「もうやめてッ　　！　　お願い！」

双葉の声がむなしく倉庫内を反響した。視界は遮断できでも、耳が全ての状況を感知してしまうのが憎らしかった。男は立ち上がって腹を蹴り上げ、侠輔は再びひどく咳き込んだ。だが、それでも怯まず男と交渉を進める。

捜査一課特殊捜査班で身に付けたことは、知識としてというより、体に染み付いていた。ずっと自分を取引の材料にしても、双葉を助けるということだけを考えていた。

「信用できねえだ？　けど、そつちだって二人も拉致っというて、収獲ナシじゃ立つ瀬がねえんじゃねえの？　しかも、一人は刑事なんだぜ？　有効に利用しようや」

男はしばし何か考える風に天井を見上げていた。（乗って来い……！）と侠輔は唇を噛み締める。その歩き回る靴音が、不気味に闇に響いていた。その音が、はたと止まる。

「だったらこつちでも同じだろう。お前の頭を切り取って、警察に送り届ける。そこでオレたちの本気さと要求を伝え、この女と情報



を交換する。どうだ？ 刑事さん」

その提案に、侠輔は啞然とした。

（馬鹿か！ それじゃ、成功度も逃亡にかけられる時間的余裕も違  
いすぎるだろ！ 頭の悪い悪党どもめ！）

「それで話はまとまった。じゃあな、刑事さん」

男はニヤリと笑って、ナイフの刃を指で撫でた。侠輔はそれを鋭  
く見据える。

「オレのことは好きにしろ！ その代わりに、女にだけは手え出すな  
！」

「ああ、そうだな。お前を殺したら、たっぷり楽しませてもらうさ」  
男は双葉の首筋へ鼻をつけ、思い切り空気を吸い込んだ。

「嫌あッ」

嫌悪に顔を背ける双葉を、男は満足気に見つめた。まるで、舐め  
るような視線に虫唾が走る。

「てめえ……ッ」

「あばよ！」

男がナイフを振りかざした。絶望的な感情が襲い掛かる。

「やめてえ ！」

その時、何とも軽快な着信音が響いた。誰の携帯だと、にらみ合う男たちの中、一人が慌てたようにポケットから携帯電話を取り出した。

「だ、誰のだよ、これ。俺のじゃないす……！」

携帯を取り出したやや太目の男は、動揺した目でスーツの男を見た。

「っああ、オレのだ。オレが持ってたらぶち壊されると思ってな。ホテルの前でもみ合ってる最中に、勝手に預けさしてもらった」

侠輔は、口角を柔らかく上げてナイフを握る、スーツの男を見上げた。その勝ち誇ったような微笑に、男は表情を強張らせた。

「……なんだとッ！ 貸せ！」

受話ボタンを押し、電話を耳に当てる。

『茶番はそこまでだ』

「誰だ！」

男はライトに手をやって、回しながら周囲をぐるりと見やった。だが、どこにも人影は無い。

『お前たちは、完全に包囲されている』

「あ？」

粉塵を巻き上げ、轟音と共に巨大な扉が内側へ開くと、真っ白い強烈な光が差し込んだ。

「コツンと靴音が響き渡り、大きな人影が倉庫の床を二分するかのよう伸びた。」

「もう逃げ場は無い」

光を背にした憐は、パチンと携帯電話を閉じると、静かな怒りを湛えた視線を浴びせた。その前を、クリアシールドを持った警官隊たちがぞくぞくと真っ直ぐ横一列に並ぶ。

「ふざけやがって……！ 近寄るな！ こっちには人質がいんだぞ！」

「人質？」

男は突如背後から降りかかった声に、ギョツとして動きを止めた。

「勇敢なお巡りさんの間違いだろが」

いつの間にか双葉は警官隊の方へ走り去り、侠輔は男の首筋に腕を回していた。

（こいつ、ロープを自力で解いた拳句、たった一人でこの大半の野郎を……）

周囲を見渡せば、味方だったはずの男たちが床へ倒れこんでいる。底知れぬ強さと恐ろしさを感じ、男のこめかみを、だらりと粘着質な汗が流れた。

「じんのッ」

男が反撃しようと腕を動かすよりも早く、侠輔は手を動かす。締

め技で気絶した男は、膝からへたり込むようにして倒れこんだ。

「あ、違うか。勇敢でイケメンなお巡りさんの間違いだ。いや、マツチヨとか入れたほうがいいか？　じゃあついでに凄腕とか？　やっべ言い切れねえ」

そうやってくだらないことを思案している間に、男は情けない顔のまま連行されていった。

男たちは全員現行犯で逮捕され、侠輔はやれやれと首に手を当てる。あちらこちらがズキズキとした。だが、幸いにも頭部に少し出血がある程度だった。

「侠輔！」と言う声にそちらを見やれば、後藤が息を乱し、慌てた様子で駆け寄ってくる。

「侠輔、あの」

「ほらよ」

侠輔が投げてよこしたのは、後藤が無くしたと言っていた財布だった。後藤はそれを受け取ると、申し訳無さそうに目を伏せる。

「変なことに巻き込まれて悪かった」

その様子は、ひどく申し訳無さそうで、見ているほうがいたたまれない気持ちになるほどだった。侠輔はふと笑うと、

「そう思うんなら、ちょっとそいつら見といてくれねえか？」

無作法にも、ポケットに両手を突っ込んだまま、あごで憐たちを指し示す。

「オレの代わりに家まで護衛してやってくれ。オレはちょっと、病院行ってくるわ。あーいででで」

そう言って後藤から車のECUエンジンコントロールユニットを受け取った侠輔に、憐が声をかけた。

「それなら、私が送りますよ」

「勘弁しろ。あんたの超安全運転じゃ、病院着く前にあの世行きだ」

冗談なのか本気なのか、振り返ることなくそう言い放った侠輔の表情を知ることには出来なかった。

ただ、やはり侠輔は、どこか憐を嫌っているような節が窺えた。

「あ、あの、上照刑事、私もついていきます！」

「あ？ 別に気い遣うな」

「いえ、いいんです」

（一人でなんて行かせられない！）と双葉は侠輔と共に車へ向かう。乗り込もうとして肩がぶつかり、反射的に侠輔を見上げた。

「おい、助手席はあっちだ」

「へ？」

同じ左側から乗り込もうとした双葉に、侠輔は反対側を指差した。

「あ、そっか、外車なんですな」

「しっかりしろ、双葉ちゃんよ」

呆れたような、それでいて優しい笑みに、双葉は不意にドキリとした。

（な、何だろうこれ……。あ、あれかな？ 危険目に遭った男女がなるっていう、吊り橋の法則？）

そんな余計な考えが巡るが、（でも、あの時の刑事さん、正直、格好良かったな）と少し素直になる。

いや、そうでなくとも、言動の悪さを無視すれば、スポーツマンタイプのかなりいい男であることは、認めざるを得ない。

（あれ、もしかして私、この刑事さんのこと）

双葉は自分の思いに気づきかけ、そっと胸に手を当てた。ドクドクと波打つ鼓動は、緊張から解き放たれた今では、相応しくない速さだった。

「おーい。ウチはタクシーじゃないんで、自動では開かないんですが？」

ぼつつと立ち尽くす双葉に、侠輔は運転席からパワーウィンドウを開けて声をかける。それにハツとした双葉は、「すみません」と急いでドアを開けて乗り込んだ。

その瞬間、ふわりとタバコの香りに包まれる。侠輔がいつもまとっている匂いだ。

普通ならテンションの上がるような超高級車に乗っているはずが、左どなりにいる男の動作ばかりに気が行く。ブラウンのトランスミッションを握る無骨な手や指先が、やけにセクシーに見えた。

(本当に)

喉に小さな心臓が出来たかのように、うるさいほどに体のサインを感じ取った。

「シートベルト締めろよ。警察が切符切られたら恥だかな」

「……はい！」

(好きになっちゃった、かもしれない……)

少々荒っぽい運転をする侠輔の端整な横顔を見つめながら、双葉は静かなる恋の始まりを予感していた。

\*

風雅は、自分のとなりで大切そうに財布を握りしめる後藤を見つめる。

「あのお、ちょっと素朴な疑問なんですけど、何でそんなに財布落として落ち込んでたんですか？ 現金もほとんど入ってなかったんですよね？」

「ああ、そのこと？ これだよこれ」

後藤が取り出したのは、ショッキングピンクのやけに派手な名刺だった。

「通い詰めて、やっとアゲハちゃんの携帯の番号ゲットしたんだよ！ ああ、もう一時はどうなるかと」

そう言って、愛おしそうに顔を名刺へすり寄せる。

風雅は心の中で、これは俠輔たちに言うべきではないなと思ったし、夕霧も静かに冷たい視線を浴びせかけていた。



「何へこんでんだ」

診察を終えた侠輔が、上着とネクタイを手に戻ってきた。肌蹴たワイシャツから覗く鎖骨が、やけに男の色気を漂わせる。こんな時に、と不自然に眼を泳がせた。

「別に、へこんでるわけじゃ……」

そう言いながらも、双葉は俯いたまま両手を握りしめた。

夜の病院の待合室は、半分以上明かりが消され、どんよりと薄暗い。緑色の公衆電話や、観葉植物が、不気味な雰囲気をかもし出していた。

侠輔は軽く息を吐いて、となりに腰掛ける。プラスチックのカラフルな椅子は、ヒンヤリと冷たかった。

「大したことねえってよ。まあ詳しい検査結果は後日らしいけどなにしてもオレも大概丈夫だぜ。明日からロボカップって名乗るか」

「それだと、ロボットの湯飲み'になりますけど」

「わ、分かって言ってるに決まってるんだろが……」

動揺したように咳払いをすると、

「ほらよ」

いつの間にか買ってきたのか、缶紅茶を手渡した。

「お前はガキだから、ミルクティーだ。で、オレは大人だからオレ  
ンジューズ」

その辺りの因果関係は謎だったが、彼なりの気遣いなのだろうと  
礼を言つて受け取つた。ミルクティーと聞いて、確かそんな題の歌  
があつたなと思ひ出した。そして自分が、少々似たような状況にい  
ることに苦笑いする。

(あつたかい……)

温かい缶を持っていると、少し心が落ち着いたような気がした。

「早く飲め。冷めるぞ」

それでもジツと缶を見つめるだけの双葉を助けるように、侠輔は  
横からタブを引いてやる。その際、触れた大きな男の手に、少しド  
キリとした。

缶の口から湧き上がる湯気が、双葉の頬をそつと撫でる。心に吹  
き溜まっているものを、吐き出せと励まされているように感じた。

(謝らなきゃ)

床に映る、ぼんやりとした自分の姿を見つめた。

「すみませんでした。私が、足手まといにさえならなければ」

重大な事態はどうやら避けられたようだが、それにしても、ケガ  
は痛々しい。自分さえあの場にいなければと、診察が終わるまでず  
つと考えていた。

ジューズに口をつけていた侠輔は、そのまま横目で双葉を見やる。

「あそこで、所長たちが助けに来てくれたから良かったものの、もし……ッ」

声を詰まらせ、双葉は言葉を切った。情けなさに吐き気すら覚える。

涙はもうすぐ零れ落ちそうだったが、それでは勝手だと飲み込んだ。

(泣いちゃだめ……)

「お前、ケガは？」

ふいにそう尋ねられ、侠輔の方を見た。彼は、最後の一滴も逃すまいとしているかのように、口を開け、缶を上下に振っていた。まるで子供のような人だと思った。

「私は、大丈夫です」

「だったら、それでいいじゃねえか」

侠輔はすつと立ち上がり、双葉の前に立った。それを戸惑ったように、見上げる。

「で、でも……」

「誰も、女で一般市民のお前に助けてもらおうなんて思ってねえよ。マンガじゃあるまい、女が男相手にできるわけねえだろ。それにお前と組むって言い出したのもオレだし、奴らの動きを甘く見てたのもオレ。はい、自己責任」

「そんなこと……」

「お前は、自分の身を守った」

そこで侠輔は言葉を切ると、缶を手に双葉に背を向けた。何事かと見ると、どうやら空き缶入れに狙いを定めているらしい。

“無茶な”と思ったが、侠輔の放った缶は、見事缶入れの細い口の中へ吸い込まれていった。それにガッツポーズをする。

満足げに振り返り、再び双葉を見つめた。

「よくやったんじゃないの？ あんな連中に囲まれた中で。お前が無傷ですんだのは、お前の行動が正しかったからだろ。素人がそんなだけできりゃ、上出来じゃねえか。なあ？」

そう言って、頭をぐしゃりと撫でられた。侠輔の温かな体温が、頭にダイレクトに伝わってくる。

（私がいなきゃ、刑事さんはケガをせずに済んだのに。なんでそんな事言ってくれるの）

ふがない自分の行動へ、意味を与えてくれるその優しさに、堪えきれなくなった。双葉はほろりと涙を零してしまふ。

「私、何も、できなくて……」

「おー、そうか。じゃあ、これから今日みたいに余計なことはいねえでくれ。それこそ足手まといになる。あと、泣くのもヤメロ。汚ねえハンカチ差し出されなくなかったらな」

ポケットに手をつ込み、ぐしゃぐしゃのハンカチを出して見せる侠輔に笑いが零れた。

「いつのですか、それ」

「心配すんな、もう一年は使えそうだ」

いつまで使う気ですか、と涙を払いながらクスリと笑った。

「……ほら、行くぞ」

双葉は小さく頷き「はい」と笑うと、まっすぐ立ち上がる。少し気分がすっきりしたような気がするの、泣いたからなのか。

ネクタイを首にかけ、肩に上着を担ぐ侠輔に、双葉は胸の高鳴りを覚えた。顔が熱くなって、まともに侠輔の顔を見ることができない。

彼が仲間に慕われている理由が、分かった気がする。口は悪いが、根は優しい。警官としても、一人の男としても頼りになる。

駐車場へ向かう途中ずっと、ちらちらと侠輔の横顔ばかりを見つめていた。

胸が浮き立って息苦しい程に感じるの、気のせいではない。

(上照刑事、カツコイイ……かも)

あたりはすっかりと暗くなり、ゆで卵の黄身色の月が浮かんでいた。クリスマスの近づくこの季節の夜は、思わず肩をすくませるほどに寒い。病院の外を出れば、遠くの方でサンタクロースのイルミネーションが光っていた。それを見ると風の冷たさを忘れ、高揚した気分になる。

今まで友人としか過ごしたことは無いが、恋人と過ごすクリスマスは、きつともっと心躍るものなのだろうなと想像した。そしてそれが、侠輔であればいいなと思う。

(な、何気の早いこと考えてるんだろ、私)

サンタ色の侠輔の車は、随分と目立つおかげで、夜でもすぐに見つけられた。キーのボタンを押せば、鍵が開くと共にランプが点灯する。

侠輔は上着の内ポケットから携帯電話を取り出すと、電源を入れた。少々派手目な車とは裏腹に、ストラップ一つついていない、シンプルなシルバーの携帯だった。

それがなければ、場所の特定にはかなり時間が必要だっただろう。そう思うと、携帯電話といえど、恩人のように思えてくる。

「良かったですよ、上照さんが二台携帯持ってて」

「ああ。先月、未緒……彼女と揃いで買っという良かったぜ」

にこやかに携帯を見せる侠輔に、息が止まった。

(彼女)

「人生、何かあるかわかんねえよなあ。今度、あいつの好きな花でも買ってやるか。クリスマスプレゼントと一緒にでも」

喉元を、氷の塊が落ちてゆくようだった。それよりも、胸が潰されたように苦しい。

恋人の話が出た途端、侠輔はふわりと優しい笑顔を見せた。彼と知り合って間が無いとはいえ、そんな表情を見たことがあつたらうか。

頭の中が、殴られたかのようにぼんやりとする。その感情を上手く言葉にはできなかつた。

「か彼女……、いらしたんですね」

一瞬声が震えたが、双葉は懸命に笑顔を取り繕った。両手を握りしめると、やけに指先が冷たい。

対して侠輔は、少々照れるように鼻の頭を掻いた。

「まあな。付き合ってもう三年ぐらいだ。すっげえ美人だぜ？ 頭も良いし。大学時代はバイトでモデルやって、今じゃ一流企業の総合職。料理は上手いし、性格も明るくて優しい。けどこれが、先に惚れて来たのは、向こうの方なんだぜ。当時巡査長のオレに告白するために、将来有望な彼氏振ってよ。いやあ、モテる男は辛い辛い」

冗談めかした言葉も、今は受け流す余裕が無い。そんな天が二物も三物も与えたような女性と、高校を卒業し、たまたま拾われた探偵事務所で、名ばかりの助手をしている自分を比べた。何もかもが違いすぎて、同じ女とは思えない。

いたたまれなくなった双葉は、何も言わず、そこを離れようと足を踏み出した。

(私……何一人で浮かれて……ッ)

「おい双葉、どこ行くんだよ。送ってってやるから乗れ」

「……いいです」

「何遠慮してんだ。いいから早」

「いいつて言ってるじゃないですか!」

思ったより大きな声が出て、しまったと口をつぐんだ。侠輔も意表をつかれたような顔をしている。

「ちょっと心配でついてきただけですし、後は、所長に迎えに来てもらいますから」

どうにか取り繕おうと、適当な言葉を並べ立てた。だが相手は刑事、嘘を見抜くプロだ。きっと本当ではないことくらい、すぐに分かっただろう。

侠輔は再び携帯電話を取り出すと、どこかへ電話してすぐに仕舞った。

「今、お前んトコの事務所に電話したら、すぐにここ来るってよ。あいつが来るまで、病院の中にいる。いいな」

双葉はやるせない気持ちに、何も言わずに俯いた。

「ああ、それと」

侠輔は車に乗りかけた姿勢のまま、彼女を振り返った。

「今日のこと、オレが実は優しいヤツかもとか勘違いすんなよ。お前に何かあったら、オレの昇進に響くからってだけの話だ。じゃ、また明日事務所に行くって伝えといてくれ」

侠輔は穏やかに笑って手を上げ、タバコをくわえながら車に乗り込んだ。サファイアガラスのECUエンジンコントロールユニットをハンドル横のフェイシアパネルへ差し込み、透明のスタートボタンを押して始動させる。

命を得た車はエンジンを震わせ、侠輔はタイヤの甲高い音が響くような、荒めの運転で車を出した。

彼は、自分が優しいと勘違いするなと言っていた。

今日のことは単なる義務。彼が本当に優しくするのは、きっと恋人にだけなのだろう。

双葉は遠ざかって行く車のテールランプ見つめながら、赤い光の滲んだ雫をこぼした。



「はあ……」

事務所の黒い高級ソファーに腰を埋めながら、双葉はぼんやりと天井を眺めていた。手に持ったカップは、まだほとんど口をつけていないにもかかわらず、既に温度を失っている。

『ついこの間、未緒……彼女とお揃いで買ったんだよ』

『付き合ってもう三年ぐらいだ。すっげえ美人だぜ？』

侠輔の嬉しそうな顔が、頭の中を駆け巡る。

(何でよりによって好きになった後に、彼女の話が出てくんのよ……。ああ、でも大人だし、普通いるか)

「はあ……」

「どうかしたんですか？ 双葉さん。さっきからため息ばかりで」

そんな双葉の気も知らず、風雅はいつものシンプルなエプロン姿（とは言え5万はするブランド物）で床に座りながら、ニコニコとティーカップを手にしている。

今は憐も夕霧も別の部屋にいるようで、ここには二人きりだった。どこかぼんやりとした時間が流れる中、時計の秒針の音だけが、唯一現実的なものに思えた。

室内は、ふんわりと優しい紅茶の香りが漂っている。確か茶葉は英国王室御用達の何とかという銘柄らしいが、双葉には興味がないこと。高い物も安い物も、美味しければ何でもいいという考えだっ

た。

「別に。何でもない」

誰かと話すのは億劫だと、双葉はカップをローテーブルに乗せ、部屋を出ようとドアを開けた。その瞬間、突如目の前が薄暗く染まっ  
ってヒュツと息を吸い込んだ。

「つと、危ね」

「か、かみしよつ上照刑事」

ドアの前にいたのは、今、最も顔を見たくない男だった。大きな胸に自分の顔がつきそうになっていたので、慌てて距離を取る。

「な、何て格好してるんですか！」

下はスーツだが、上半身は裸で、右肩に白いスポーツタオルをか  
けただけ。シャワーを浴びてきたのか、髪から水滴が落ちて胸を滑  
らかに伝っていた。

そんな姿の侠輔を前に、双葉は思わず目をそらす。

「いやー、さすがだなココ。ジムは広いし綺麗だし、設備も整って  
いるし、インストラクターは美人だし、言うことねえぜ。久々に思  
いっきり、体動かせたわ。あ、事務所のシャワー勝手に借りたけど、  
いいだろ」

部屋に入りながら、タオルを頭の上でまっすぐ引っ張った。

(す、すごいイイ体……)

上げた二の腕や肩、背や横腹にかけて、しつかりとした筋肉が浮かび上がる。きちんと拭ききれしていない水分が張りついていて、肌の上を滑っていた。

警察官としての義務感からか、それとも単なる趣味なのか。どうやら普段から相当体を鍛えているらしく、まるで海外の映画俳優のようなきれいな体つきだった。昔美術の教科書で見た、男の肉体美というやつかとぼんやり考える。

「おい、双葉、代わりのシャツねえの？ 汗かいたから着替えてえんだけど」

その言葉に反応したのは風雅で、「いますぐ持つてきまーす」と部屋を出て行った。その様は完全に家政婦のようだが、どうやら本人は楽しんでやっているらしい。尽くされるより、尽くしたいタイプの珍しい坊ちゃんらしかった。

双葉は、脇をすり抜けて行った風雅にも気づかず、口を閉じるのも忘れるほど、侠輔の滑らかな胸筋と、見事に割れた腹筋に目が釘付けになっていた。

(ちよ、ちよっと抱きしめられてみたいかも)

そんな邪なことを考えつつ、視線は勝手に下の方へと流れてゆく。見たいような気持ちと、見たくないような気持ちが拮抗していた。

(ど、どうしよう、何か目が自動的に……)

男の人が、自然に女性の胸やお尻に目がいってしまっ、という言葉葉に妙に納得できた。

「ついでに、ここもサービスしようか？」

侠輔は口角を上げ、ズボンのファスナーをそっと引き下ろした。それに、ハツと現実へ引き戻される。

「な、な何やってるんですか！ セクハラじゃないですか！」

「市民に喜んでもらうのが、公僕の務めですから」

「そ、そそんな汚いもの見て、喜ぶわけないじゃないですか！」

「え、汚いものって何？ 何想像したんだ？」

嗜虐的な笑みを浮かべ、からかうように煽る。

「何も想像してません！」

顔を真っ赤にして必死で否定する双葉に、侠輔はケラケラと笑いながら、チャックを上げた。ズボンのポケットからタバコを出して火をつけ、落ちるようにソファーに腰掛ける。

双葉は、肺の奥から吐き出すようなため息をついた。

(見てたのバレたのかな……)

急に恥ずかしくなった双葉は、俯きながら服のすそを握りしめ、恐る恐る侠輔を見やった。侠輔の方は、何も気にしていない様子だった。

タバコをくわえながら携帯をいじる横顔に、やはり胸は高鳴る。黙っていればうつとりするような男だ。彼女がいるのも頷ける。

だが、そんな人のことなど、早く忘れなければと、俯いて強く瞳を閉じた。

「もう買ったか？」

突然の問いに、双葉は顔を上げた。（何を？）という疑問が顔に出ているらしい。

「ケータイ。お前のもアイツらにぶっ壊されたる？」

そう言う侠輔の手には、すでに新しい携帯が握られていた。ああ、そういえばと思った。

「は、はい……。でもバックアップとってなかったんで、電話帳はほとんどカラになっちゃいました」

少し悲しげに、新しい携帯電話の電話帳を開いて見せた。憐や夕霧、風雅やアパートの大家さんなどは入っているが、ほとんどのデータは失われた。機種変更なので相手方から連絡をもらう場合は問題ないが、かなり不便なことになった。

「あーあ。こりゃヒデエな。彼氏からも連絡待ちか」

「……彼氏なんか、いたことありませんから」

少しムツとしてそう言った。恋人がいる前提で話されるのが不快なのは、それをどこかでコンプレックスに思っている節があるからだろう。

（どうせモテないですよ）と誰も聞いていない愚痴をこぼす。

だがそれに侠輔は驚きの表情を浮かべ、すぐさま申し訳なさそうな顔をした。

「あ……、悪い。じゃあさっきのは、マジでセクハラだったな」

ファスナーの件を言ってるらしいが、彼氏がいようとしまいと、

あれはセクハラだろうと思った。だが、今更ながらもタオルで上半身をなるべく隠そうと気遣ってくれる姿が、どこか可愛くて微笑ましい。

「上照さん、シャツ持ってきましたよ」

ソファから立ち上がり、風雅からシャツを受け取った侠輔は、「サンキュウ」と軽く礼を言ってそれを羽織った。ボタンをとめながら双葉を見つめ、

「じゃあ、汚えもん見せかけた詫びでもするか。ついて来い」

お前の仕事は所長の警護だろう、と双葉は思ったが、それを口にする前に「ちよつと本庁に戻るから、アイツに外出んなって言つとけよ。もしくは連絡よこせ。ま、こんなヒマ探偵事務所じゃその心配はねえだろうけど」と風雅に言伝を頼む。自由に動きながらも、どうやらこの男にぬかりは無いらしかった。

(本庁……?)

一体そこで、どんな詫びをするつもりなのだろうと、眉をひそめて首をかしげた。

「よお、できたか？」

その声に、紺の鑑識の作業着を着た男が、椅子ごとくるりと振り返った。

現場の鬼警部ばりのするどい目つきと、色素の薄い髪をしており、双葉は町の怖いお兄さんと眼が合ったような、ヒヤツとした感覚が駆け巡った。

「んな無茶いわないでくれます？ あんなグチャミソに踏み潰されたケータイのデータが、そう簡単に復元できるわけないじゃないですか。っていうか、私的に鑑識使うのやめてくれませんか？」

だが予想外にも、その話し方は温厚かつマイペースで、動物で例えるなら大方ナマケモノあたりだろうと思った。

彼の名は御妙寺千之<sup>おんみよつじちゆき</sup>。姓も名も変わっていて、逆に覚えられにくいとよく言われるが、本人は特に気にしてはいなかった。名前を間違えられることも多いが、それを訂正しようとせず、そのため“東大寺さん”や“安部野さん”などと間違えて覚えている者も多かった。

バイクが好きらしく、デスクにもその関係の雑誌が何冊か並んでいた。その横に小さなクリスマスツリーがあるのは、少し笑える。どうやら季節感というものを大切にする男らしかった。

まだ若いが、鑑識の能力は非常に高く、彼の発見で解決した事件はすでに数百件を超えている。妬まれることがありつつも、各方面の人間から一目置かれていた。

「やっぱりそうか」

「っと言いたいところですけど……」

一旦がっかりさせた侠輔に、千之は数枚の紙を取り出した。じゃあ、そのワントラップは何だったのかと思ったのは、どうやら双葉だけらしい。

「電話帳のデータ。多分これで全部ですよ」

「おおさつすが」

「そちらさんの分も」

「あ、ありがとうございます！」

中には携帯でしか連絡の取れない知り合いもいるため、これは随分助かると思った。どうやら侠輔の言っていた詫びとは、このことらしかった。だが良く考えれば、侠輔は頼んだだけで、実際復旧してくれたのはこの鑑識の男だ。

「あれ？ 侠……と双葉さん？」

ふと聞き覚えのある声がかかり、二人は勢いよく振り返る。

「柳本社長！」

「孝太！ っってお前ら知り合い？」

孝太郎は、ウエストの締まった細身のスーツに、ストライプのシヤツとダイヤのタイピン、磨きこまれた靴は光を反射し、頭の上から足元まで、相変わらず洗練された服装をしている。顔には最初に見たときと変わらない、柔らかな笑みを浮かべていた。



「ええ。以前そちらの事務所へ依頼をしたことがあって」

ちらりと双葉の方を見て、15度くらいのお辞儀をし、双葉も慌ててそれに返した。

孝太郎と侠輔の顔を見比べ、現在急成長中の会社の若社長と、一警官が一体どういう繋がりなのだろうと、ごくありがちな疑問を抱いた。

「僕らこう見えて、幼馴染なんです」

双葉の表情を読み取ってか、孝太郎はそう説明した。

「で？ お前何してんだよ」

「営業ですよ、ぜひ警視庁さんで使ってもらいたくて」

孝太郎は、二人の横をすり抜け、千之の傍へと歩み寄った。そのやけに整理整頓の行き届いたデスクの上に乗った書類や小型機器を持ち上げてみせる。

「新開発した逆探知機とか、データ復元ソフトとか、指紋採取装置とか……。機械の可能性のすごさに、開発者の僕も驚きました」

「オレはお前のその頭脳に驚きだよ」

その通りだと千之も頷く。

「こんな能力あるんなら、ウチの鑑識に欲しいくらいですよ。良かったら中途採用で来ませんか？」

「お前、細かいこと分析すんのか得意だし、向いてんじゃないか？」

千之は冗談半分のようだったが、侠輔は本気で勧めているように

見えた。孝太郎は装置をデスクに戻しながら、肩を少々ひそめ、

「いえ、僕は一地方公務員で終わりたくありませんから」

「謝れ。全国290万人の地方公務員さんにな」

真顔でそう言われ、「ごめんなさい」と、流れ作業的に謝った孝太郎は、手に持っていた黒のスーツケースを持ち上げ、いくつか書類を千之へ手渡した。どうやら、装置についての詳しい説明書と価格表らしい。

「ぜひお願いします。ウチの商品が警視庁さんで採用された、となると社会的信用も大幅に上がりますから」

忙しいくせに社長直々に来た目的はそれかと、侠輔は密かに笑った。思わず、

「孝太、お前どこ目指してんだ？」

そう尋ねてみる。幼い頃から知っているが、彼ら二人は全く違う方向を目指して歩いていた。特に孝太郎は、何を最終目的としているのか、さすがの侠輔にもさっぱり分からない。世界の覇者にでもなろうというのか。

とはいえ、先ほどの質問も決してそんな彼を揶揄しているわけではなかった。まるで終戦へ向かう中、戦友へ今後の設計を尋ねる心情と似ていた。

孝太郎は、少々考えるように唇を軽く内へ巻き込んだ。

「誰もいないところ、かな」

「はあ？」

予想外の答えにマヌケな声が出る。

「それより、侠は未緒さんとどうなんです？ そろそろ結婚話でも出てたり？」

この質問に、一番反応したのは双葉だった。突然胸を殴られたかのように、大きく波打った心臓が痛い。

(結婚って……彼女がいたってだけでもショックなのに)

動揺を見せてはならないと、両手を握りしめた。そんな自分はい体今、他人からどう映ってるだろうかと恐れる。

「まあまあかな。お前だって、女子大生と付き合ってたんだろ？ いいね、青春だ」

それに孝太郎は困ったような表情を浮かべて、頭へ手をやった。

「あーいえ、それが……振られちゃいまして」「ン、マジかよ！」

侠輔は心底驚いたらしく、自分の唾液を喉へ引っ掛けていた。

「僕とは価値観が合わないって。ですから傷心中です」

侠輔は信じられない、と妙な表情をしていたが、双葉には孝太郎が大して落ち込んでいるように見えなかった。

(でも、あの時は本当に嬉しそうだったし。本当は傷ついているのか

しら。いつも笑ってて分からないけど)

「おい双葉、コイツと付き合っとけよ」

「……え、えッ？」

突然話題を振られ、考え事をしていた双葉は反応に遅れた。

「金はあるし、色男だし。言うことねえだろ。優良物件だけ、お客さん」

そう言って、ニヤリと笑う。

思いを寄せている男に、別の男と付き合うことを勧められるのは、いかんともし難いものがあった。複雑な思いと、侠輔への恨み節に似た感情が渦巻く。

(た、確かに柳本さんは、白馬の王子様って感じの人だけど。そんな嬉しそうな顔で、言わないでよ。人の気も知らないで)と思いつつ、

「い、いえ、私なんかじゃ釣り合いませんから……」

動揺しながらも、何とかそう言えた。

ほんの数日前の自分なら土下座してでも、このチャンスをモノにしようとしただろう。だが、今は、本当にタイミングが悪い。他の男には、どうにも興味が持てなかった。

「僕になんか興味ないって顔してますね」

いつの間にそばにいたのか、いきなり耳元で聞こえた鈴の音のよ  
うな綺麗な声に、のけ反るように驚いた。

「え、あ、そ、そんなことありませんよ！」

ガラス玉のような瞳を凝視できず、視線を泳がせながら、この人は他人の心が読めるのかと思った。

確かに孝太郎は洞察力に長けていたが、この場合は単に、双葉の表情が読み易いかっただけのこと。だが彼女はそのことには、一切考えが及ばないようだった。

「では、僕にも興味は持っていただけにいる、と」

(ち、近い近い近い……！)

モデル並みに整った顔が、すぐそこにあつた。首筋から漂うフランスの高級フレグランスの香りが、ふわりと肺へ入り込んでゆく。ほんのりとした繊細な香りの中に色つばさが滲み、滑らかなシルクに包まれるような感覚を覚えた。

「で？ どうなんですか？」

サラサラの前髪が、整えられた眉を柔らかく撫でた。どこでカットを頼んでいるんだろうなどと余計なことを考えるくらい、頭が混乱していた。

「いあ、す、少し……」

「少し、だけですか？」

瞳にほんの少しだけ、悲しそうな色を浮かべる。困ったように僅かにひそめられた眉も、母性本能がくすぐられた。その一連の言動は、まるで好意を抱かれているようにも見えた。

(ダメ、何か、吸い込まれるっ……)

これで抱きしめられでもすれば、あっけなく落ちるのではないかと思った。今しがた興味が無いと思ったにもかかわらず、何かの術にでもはまり込んでいる気がした。

女をドキドキとさせるのが、なんと上手いんだろう。これなら、どんな鉄壁のガードでも、容易く崩せるはずだ。

困惑する双葉に気づいたのか、孝太郎はネイビーのネクタイに指をすべらせながらすつと顔を離し、「じゃあ、たくさん興味が沸いたら連絡してください」と茶化すように述べた。心地よい香りが遠ざかって行く。それも、押して引いての駆け引きの一つに感じられた。

今度生まれ変わるなら、大金を持ち、数多くの女たちを次々と手玉に取るような、こんな男になるのも面白そうだと思った。

「今フリーじゃ、クリスマスは一人か？　おい」

他人の不幸は蜜の味というらしいが、振られたと言っている相手に、楽しみにそんな質問を投げかける侠輔を見て、もしかしてこの男はサドの気でもあるのだろうかと邪推した。

「そうですね。ま、イブは政財界のパーティーがあるので、寂しくはありませんが」

それを涼しく返す孝太郎は、さすが余裕に満ちている。その場しのぎの相手なら、いくらでも調達できる自信からくるものだろう。侠輔は、孝太郎が内ポケットから出した、漆黒に金色のクリスマスツリーが描かれた招待状を手に取りながら、こいつが寂しい夜など過ごすことはないのだろうか、と内心笑っていた。

「じゃ、またお酒でも飲みましょう。双葉さんも、所長さんによるしく」

「は、はい」

「あ、御妙寺さん、わが社の製品導入の件、よろしくお願いします」「はい。任せといて」

春風のような孝太郎が去ったあと、千之は何か思い出したように「あっ」と声を出した。

「そういえば上照刑事の電話帳に、妙な番号が入ってたんですけど」「妙な番号？」

ここだと指差す用紙には、名前欄に022014とあり、電話番号は012-023004024となっていた。

「確かに変だな。名前が数字だし、0120ってフリーダイヤルか？ 区切りおかしいけど」

「いや、だとしたら桁数が合わないんですよ。現在日本の電話番号は10桁。昔は東京と大阪は9桁の番号を使用してましたけど、平成3年と11年にそれぞれ10桁に変更。そのあと9桁として残った特殊な番号だって、今では変更されて消滅してますし、IP電話や携帯は11桁す」

「バグじゃねえの……ってあれ、須野って誰だ？ 小津つてのも」

それぞれ033040023024、024003040と電話番号のケタ数とは異なる。

侠輔と双葉は顔を見合わせ、首をかしげた。

「妙な番号？」

事務所へ帰った双葉と侠輔は、デスクで本を読んでいた憐へ、例の電話番号を見せた。憐は何やら外国語の表紙の本を丁寧に横へ置くと、侠輔の電話帳を復元した紙をまじまじと見つめた。

それをハラリと置いて、二人を見る。

「成るほど。単純な暗号ですね」

「も、もう分かったのか？」

侠輔は驚きを隠せなかった。自分もあれやこれやと思い悩んだが、さっぱり分からなかったというのに、この男は一瞬見ただけで、それを解したらしい。

(はったりじゃねえだろうな)

どこか欺瞞に満ちた目で見つめる。

「何て書かれてあるんですか？」

双葉はデスクに手をつき、わくわくとした表情で身を乗り出す。憐は万年筆を手に取り、サラサラと何か書き記し始めた。

「まず、この“須野”の0333040023024と“小津”の0240030400だが、須野をローマ字に直すと“SUNO”となり、“小津”は“ODU”となるだろう？」



ふむふむと頷く。

「アルファベット4字と3字に対し、数字はそれぞれ12桁と9桁であることから、おそらく3つの数字で1つのアルファベットを示しているのだろうと予測がつく」

「なるほど……」

双葉は感心したように顔を輝かせ、侠輔も真剣な表情でそれを聞いていた。

「問題の012-023-004-024をこう分けてみると、もう答えが見えるはずだ」

満足気な隣に、侠輔と双葉は顔を見合わせた。何が何だかさっぱり分からないと、互いの顔に書いてある。

それには憐も「おや？」と不思議そうな顔をした。

「五進法だ」

今度こそ“どうだ”といわんばかりのにこやかな笑顔だが、双葉は妙な愛想笑いをするだけで精一杯であったし、侠輔もそっぽを向きながら頭をかいていた。

その二人の様子に、夕霧がイライラしたように口を挟む。

「つまりアルファベットのAからZに0から数字を当てはめて、五進法に直すんだよ。Aなら000、Bなら001」

ははあん、と侠輔が口を開いた。

「じゃあZは026か」

「……小学校からやり直せ」

「あんだと、このガキ！」

小馬鹿にしたような口ぶりに、侠輔は大人気なく噛み付く。それを風雅がなだめた。

「まあまあ。Aが0から始まってから、Zは025なんですよ」

「お前もやり直せ」

「えええ！」

正解を言ったつもりが、どうやら違ったらしく、風雅は驚愕に目を丸くする。夕霧は今度こそ氷点下の視線で二人を見た。その居心地の悪さを払拭するように、侠輔は咳払いをする。

「お、おい、所長さんよ。もっと簡潔に言ってやれ。こいつが分かかってねえだろが」

(ひ、人のせいにして……！)

自分を指差す侠輔に、双葉は恨めしそうな視線を送った。とはいえ、双葉にもまだ分かかっていないのは事実だ。

「そうか、すまない。オレの説明が悪かったな。これならどうだ」

そう言っただけは、サラサラと5×5の表を書き、縦に01から04、横に1から4の数字を書き、順にAからYを埋めて三人に見せた。

「ちなみにZは100だが、今は必要ないから省いた。例えば“N

”を示したいなら、02、3とこうなるわけだ」

憐は02の横列と3の縦列に赤い線を引く。交わったところはちよつどNになっていた。

「初めつからそうやって説明しろっつもの」

そここぼす侠輔を、夕霧はギロリと睨む。だがそんなことは気にならないらしい侠輔は、問題の数字に着手した。

「えつとじゃあ012・023・004・024は、H・N・E・  
O。フネオ？ 誰だよ」

やつと理解できた暗号の仕組みに、双葉も参戦する。

「Hだけは元々ハイフンが付いていたから、Hは別の意味があるんじゃないですか？」

「別の意味……？」

少し考えるように視線を上げ、ハツとしたように声を上げた。

「ホテルか、ホテルNEO……ニューエンパイアオークホテル！」

「ええ。そうみて間違いないと思います」

憐はどこか浮かない表情で頷いた。

「でもそれが何なんだ？」

腕を組む侠輔に、双葉は表を見つめながら唇を震わせていた。

「あの、この名前欄にあった022014って……」

それを侠輔が横から覗き込む。

「何々？ 022と014だから」

表をなぞる指が、ハタと止まった。部屋は一瞬にして静まり返り、憐は軽く瞳を閉じた。

「……M、J。……ジョーカー」

侠輔は屈辱に身を震わせるように、用紙をグシヤリと握りしめた。

「あいつ、こんな舐めた真似しやがって」

「だったら、早くホテルに連絡しないと」

「おそらく決行日は12月24日だ」

憐は冷静にそう言い放つ。

「ど、どうしてですか？」

「電話帳には、誕生日登録機能がある。それが12月24日で記録されていた」

侠輔はその日にちに覚えがあった。

「12月24日、クリスマスイブ……確か孝太が政財界のパーティーがあるって言ってた日だ。くそッ……」

侠輔は舌打ちすると、急いで電話をかけた。どうやらMSI本部指揮者の平群警部へ連絡を取っているらしい。

その時、ドアホンのチャイムが鳴った。例の如く風雅が部屋を出て、しばらくして戻ってきた。その手には、五通の封筒。

「あー、これ皆さん宛に」

届いたのは、孝太郎が持っていたものと同じ、漆黑に金のクリスマスツリーが描かれたあの招待状だった。

「あの野郎、オレたちの行動を完全に呼んでやがる」

暗号を解くであろうことはもちろん、ここに侠輔の分の招待状も来たということは、彼が護衛として付いていることも知られているらしい。

(どっから情報漏れてんだよ)

まさか事務所に盗聴器の類でもあるのかと思っただが、この頭の切れる探偵が、それに気づかずのうのと暮らしているとは思えなかった。

「それと、双葉さんには、この箱も届いたんですけど」  
「私に？」

なんだろうと受け取ると、さほど重くは無い。ネコの毛のように柔らかな絨毯に正座し、ローテーブルに置くとガムテープを剥がして中をのぞいた。

「じれ……」

そこには愛らしい、ピンク色のドレスが入っていた。手に取って

みると、柔らかな手触りの素材に、高級な品であることが双葉にも分かった。

(こ、これを着ていけって?)

少々露出の多いドレスに、双葉は頬を赤く染めた。以前豪華客船で着たものよりは、大人しめではあるが、それでも胸をやけに強調したようなデザインで、恐らく谷間は丸見えだ。

「おいおい、スゲエの送ってきやがったな」

侠輔が横からひよっこり顔を出し、やけに近いその距離にドキリとした。

タバコを吸ってる割に肌は綺麗で透き通っている。

(う、やっぱり格好いい……)

間近でみるその顔に、ジツと見入ってしまった。それに侠輔が気づき、しまったと慌てて視線を外した。

「何だよ。もしかしてオレが、何かエロいこと想像してるとでも思ってたのか?」

「べ、別にそんなんじゃないですよ!」

ドレスを整えるフリをして誤魔化す双葉に、侠輔は小声でそっと、

「したけどな。エロい想像」

チラリと胸を見られ、からかうような目で見下ろされる。

「……！」

一気に血液が沸き、顔をこわばらせた。反射的に胸をドレスで隠す。

その様に侠輔は、可笑しそうに笑った。

「バーカ、冗談だっつの」

頭をぐりぐりと大きな手で撫でられ、傍を離れる侠輔のその背を見つめた。

（わ、分かってるわよ、そんなことくらい……）

口を尖らせてドレスを見つめながら、やはり自分は彼のそういう対象にはなれないのだな、と思った。

（でもイブは一緒にいられるんだ）

侠輔の恋人へのちよつとした優越感に浸る。そして同時に、そんな自分に嫌気が差した。

「やっぱり恥ずかしい……」

双葉は送られてきたドレスに身を包み、どこか俯き加減に歩いていた。当事者でなければ、可愛いと素直に言えるだろう代物だが、はつきり言って自分に似合っているのかは怪しいだろう。それにやけに自分の体にフィットしているような気がするのは、思い過ぎしだと信じたい。イカれた爆弾魔に、スリーサイズを知られているなどとは思いたくなかった。

12月24日。ジョーカーの予告したこの日に向け、対策本部はせわしなく動いていた。

会場はここ、ニューエンパイアオークホテル。明治時代に創設され、今ではアメリカやヨーロッパなど世界に展開する超有名高級ホテルに成長していた。双葉はパルテノン神殿を髣髴とさせるような長いエントランスへ続く階段を見上げながら、（こついうことでもない、来れそうもないな）と自嘲気味に笑う。

このホテルのために、有名デザイナーが手がけたという制服を着たボーイが、にこやかにあいさつする。顔の審査でもあるのだろうか、と思うくらい的美丽ぞろいだった。ようこそと笑う、白い歯がまぶしい。

入ってすぐ、巨大なクリスマスツリーに目が奪われた。またたくように輝くこのツリーは、何でも本物の宝石が散りばめられているのだという。トップに付けられた大きな星は数億円をくだらないと聞いて、サンタが落としてくれないかな、などとありもしないことを考えていた。双葉のアパートの部屋よりも大きなシャンデリアが、大理石の床に星を描いていた。まるで天の川でも歩いているかのよ



うに、きらびやかな金色の世界が広がっていた。

「大丈夫か」

憐が緊張した面持ちの双葉に声をかける。さすがというか、彼は全く気後れしていない。それどころか、この素晴らしいホテルの雰囲気に対応しい客だと感じた。

「は、はい」

「大丈夫ですよ、双葉さん。このボクがお守りいたしますから！」

風雅がドンと胸を叩く。高級スーツが全くそうは見えないのは、ある種の才能であろうか。

得意げな風雅はさておき、双葉は誰かを探すように、辺りを見回した。

「やっと来たのかよ」

ドキツとするような声に振り返る。侠輔がズボンのポケットに手をつっ込み、四人を見つめていた。

「あれ？ 上照刑事、そんな格好でパーティーに出るんですか？」

風雅がそう指摘するのも無理はなかった。黒の安っぽいスーツに、同じく黒のネクタイ。おまけに左耳には無線に繋がっているらしい、白いイヤホンを付けていた。

まるでSPのようだと思った。

「おいモジャモジャ、“刑事”ってつけんのはヤメロ」

「も、モジャモジャ……」

息を吐き出すと、少タイラついたように頭の後ろをかいた。

「パーティーの主催者に話つけようとしたんだけど、どうせイタズラだって取り合ってくれなかったんだってよ。そんなことで、恒例の大事な会を潰すわけにはいかねえって」

イカしてるぜと、小さく不平を漏らす。

「しかも念のために、オレたちがパーティー終わるまで見回りにつきたいって言ったんだけど、それも却下」

「なんでですか？」

風雅は目を丸くする。それに憐が答えた。

「ここには政府の要人や、財界の大物たちが来る。警察がいては都合の悪い、裏の話してもするつもりなんだろう」

「そういうことだ。けど、万一のために、オレだけは主催者側の警備員と混じって潜入が許された。もちろんここで見聞きしたことは、口外しない約束でな」

「なるほど。そうやって、一応取り繕っておいて、何かあった際の保険にするつもりというわけですね」

何かあればすべて警視庁の責任にするつもりなのだろう、という憐の推測が外れてはいまい。

だが、双葉は（おや？）と思った。

「だったら私たちと一緒に、一般の招待客に混じって入れれば良かったんじゃないんですか？ 上照刑……上照さんの分も招待状来てたんですから」

その問いに、侠輔はどこか浮かない顔をした。触れられたくない話題だったのだろうか。

「嫌いなんだよ。こういう守銭奴どもの集まりがな」

その言葉と表情には、どこか憎しみが含まれているようだった。その憎しみの中に、憐れも入っているのだろうか。だから彼は憐れに冷たいのだろうか。双葉は思った。

しかし、それはあんまりではないか。

「いくらなんでも、そんな言い方」

「へー、もしかして僕のことそんな風に思ってるんですか？」

ギョツとして振り返る。孝太郎がにこりと笑いながら、前のものとは違うこれまた高そうなスーツに身を包んで立っていた。ソリに乗ったサンタクロースのタイプピンに、小物もこだわってるなあ。双葉は思った。

「お、脅かすなよ、孝太」

侠輔は少々困ったような顔をしている。どうやら幼馴染のこの男に実は弱いらしい。

「イブなのに、麻薬関連捜査の手伝いだなんて大変ですね」

「ま、まあな。ってか誰にもオレのこと言うなよ」

侠輔が捜査内容を偽っているらしいところからして、ジョーカーからの予告状の件は招待客には伝えられていないらしい。当然といえば、当然のことだ。そんなことをすれば誰も来なくなる。孝太郎

はどこか納得していないよにも見えたが、深く突っ込む気もないらしい。上流階級なりの処世術なのだろう。

孝太郎は何かを思い出したように「あ」と言った。

「そうだこれ、守銭奴な僕からのクリスマスプレゼント」

「……おい」

侠輔も、さすがに申し訳無さそうな顔をしていた。

孝太郎が差し出したのは、スタイリッシュな黒のサングラス。真ん中には、申し訳程度に赤いリボンが付けられている。(いや、室内でサングラスは浮くだろう)と双葉は思ったが、予想外にも侠輔は嬉しそうにそれを受け取った。リボンをはずし、さっそくかけてみる。

「お、こつちの方がSPっぽいじゃねえか。サンキュー、孝太」

「そのフレームに使われているアルミニウム合金は、米軍用機にも使われてるヤツなんですよ」

「マジかよ、これ銃弾はじけんじゃね？」

バカか子供かのどちらかだろう。だが、孝太郎と話す侠輔は、いつもと違って無邪気に笑っている。本当に心を許している印なのだろうな、と双葉は羨ましく思った。

孝太郎が一足早く会場へと去って行くと、侠輔はサングラスを押し上げて真剣な顔を見せた。

「いいか、お前ら。怪しいやつ見かけたら、事前に渡してある腕時計型通報ボタンでオレに知らせる。絶対に無理はするな」

「は、はい。ところで他のMSIの方々は？」

「外の白いワゴンで、会場の様子をモニターしてる」

「モニター？」

「どうやって、と首をかしげる双葉に、侠輔はポケットから小型カメラをちらりと見せた。

「男連中三人にも同じものを渡してある。高級スーツに穴開けてもらって悪いけどな」

「え？ あの、私は？」

「お前はどこに隠すんだよ。そこか？」

そう言って胸の谷間を指差され、一気に赤面した。

「な、な、な何言って」

「とにかく、ワゴンでこのホテルをスキャンしたが、今のところは異常なし。だが油断はするな。いいな」

隠しカメラだのスクャンだの。おそらく許可など取っていないだろう。捜査本部もかなり無茶をするなど双葉は思った。警備を断られた腹いせだろうか。

今思えば確かにあの平群警部とか言う人は、かなりアウトローな匂いを漂わせていた。任侠映画の主人公か、そうでなければ、少々人相の悪い、猪突猛進型の正義のヒーロータイプかもしれない。年齢四十すぎでまだ独身だと言っていたが、何だかそれも頷けた。家庭に大人しく収まるような器ではない。

侠輔はサングラスをかけ直す。

「会場では他人のフリをしる。以上」

足早に立ち去ってゆく侠輔に、皆緊張した面持ちをしていた。

File・7・5

オッドアイ

(前書き)

\* \* あい様。感想ありがとうございます！返信しておきましたので、またご覧ください \* \*

「おお、これはこれは、枚田先生お元気でしたか」

ニタニタとした、いかにも権力とお金に弱そうな男が、やはり同じような風体の男に声をかけていた。NEOホテルの最上階、選ばれた者たちだけが入れられるこのパーティー会場は、和やかなムードの中で華やかに進行されている。

ここにも巨大なクリスマスツリーが飾られており、楽しく軽快なクリスマスソングも流れていた。あちらこちらに飾られた髪の毛のサンタも、雰囲気盛り上げている。

だが、まるでそこは仮面舞踏会のようにであった。出席者の浮かべている笑顔の下では、黒い権力闘争が行われている。

侠輔はそれをサングラスの下で、刺すように見つめていた。その視線の意味を、知るものはいない。

『上照君、そつちの様子はどう?』

「ああ、こつちもまだ異常は無い」

麗華の声に侠輔はこつそりと無線でそう答えた。

外のワゴンで待機しているMSIのメンバー、平群警部と麗華は、いくつものモニターを睨み付けるように見つめている。後の二人は裏口に待機していた。

「警部。現れるでしょうかね、ヤツは」

麗華は、パソコンの操作を一旦止めて平群にそう尋ねた。何か起ころうというには、あまりに静かだ。

モニターの明かりだけが煌々と灯る車内に浮かぶ彼は、まるで獲物に飛び掛る前の大蛇のような、張り詰めた空気を漂わせていた。

「奴はゲーマーを名乗っているんだぞ」

その言葉に、麗華は軽く眉をひそめた。

「自ら敷いたゲームのルールに、反するマネはしないってこった」

その力強い視線の先には、着飾った人々の談笑する姿があった。

「うわあ、すっごーい！ ほらちよつと、夕霧も来なさいよ！」

ハイテンションになる双葉の目の前には、サンタやトナカイやツリー型のキャンドルが山のようにならべられていた。何でも主催者側からのクリスマスプレゼントらしく、一人一つ、好きなものをお持ち帰りくださいと横のプレートに書かれてあった。

「どうしよう！ どれにしようかなあ？ どれもカワイイ」

「まさか本気で持って帰る気？」

周りには、興奮して品を物色している双葉以外誰もいない。それどころか、その姿に苦笑いさえ受けている。だが当の本人は、それに全く気づいていないようであった。

見てるこちらが恥ずかしい。夕霧はそう思ってたことだったが、双葉はケロツとしている。

「あつたりまえよ。くれる物は、何でももらつとくもんなの。ほら、あんたも取つときなさい」



「……」

無理やりトナカイを握らされ、夕霧はそれを手にしたまま無表情で立ちつくしていた。

憐はぐるりと会場を見渡していた。今夜ここで、一体何をしようと言っのか。前回のようなことがあれば、人的被害も免れないかもしれない。

(いや、そんなことは絶対にさせん)

何があるうと、自分が食い止める。そのために来たのだから。

その時、ゾツとするような寒気が背筋を走った。弾かれたように周囲を見回す。

(何だ、今は)

だがどこを見てもただ料理に舌鼓を打ったり、会話に花を咲かせたりしている人々ばかりだ。

(どこだ)

「お客様、あの、どうかされましたか？」

どこか慌てたような憐の様子に、シルバーのトレーを手にしたボーイが心配そうに声をかけた。

「いえ、人を探していただけです。すみません」

傍目から見てもそれほど動揺していたか、と憐は焦る気持ちを押しさえつけた。

(オレが平静を失ってどうする)

「そうですか、ちなみにその人と言つのは……」

ゾツとするようなあの感覚が、再び憐を襲った。それも今度は、すぐ近くから感じる。目を見開き、自分の傍に立つボーイを恐る恐る見やった。掌がじつとりと汗ばむ。

ボーイがそつと自分の顔を片手で覆った瞬間、指の隙間から見える両目の色が変わった。

「私のことですかね」

「……！」

指の間の、左右異なる色彩の目。その瞳に宿る氷のように冷やかな感情。

憐は腕時計型通報ボタンを押そつと指を動かした。

「動くな」

見ればトレーの下に、何か黒いものが取り付けられている。

「……起爆、装置か？」

ジョーカーはニヤリと笑った。それに指をかける。

「やめる……っ！」

憐の声も空しく、ボタンは押された。

「何してんだ、あいつら」

侠輔は、憐の異常に気づいた。明らかに顔色が悪い。傍にいるボーイの格好をした男は

「……まさか」

侠輔は人ごみを掻き分け、二人の方へ向かった。本来なら走って駆け寄りたいところだが、この招待客の目がある。あまり目立った行動は取れない。

あくまで警備の見回りをしているフリをしながら、はやる気持ちを押しさえ込み、侠輔はゆっくりと歩いていった。

「警部、怪しい男を発見した。見えますか」

「いや、人ごみが邪魔でこちらからは確認できない」

「すぐにそばまで近寄ります」

ここで奴の姿だけでも捕らえられれば、大きな手がかりになるかもしれない。だがその時、会場の明かりがダツと落ちた。

「あれ？ 何だ、停電か？」

人々は天井を見上げ、おろおろとしている。

憐は強く両手を握りしめた。ジョーカーは片頬を残酷に歪める。

「さあ、ゲームをしよう。お前の命をbetして」

ささやくようなジョーカーの声が、会場のざわめきを撫でるように聞こえた。

明かりの落ちた会場は、次の瞬間、満天の星空に包まれた。まるでプラネタリウムのような美しい光景が天井一杯に広がる。

観客たちは、突然のプレゼントにざわめき、沸き立った。自然と拍手が巻き起こる。

「どついつつもりだ」

憐は下目蓋を押し上げ、ジョーカーを見やった。手で顔を隠したまま、ジョーカーは笑っている。

「聖なる夜に何かやらかすほど、オレも無作法じゃないさ」

「お前がそんなことを気にするとは思えない」

「早まるな。お前とのゲームはじっくりと楽しみたい。女だって、中々落ちないほうが面白いだろう」

「オレを……殺すのが目的なのか」

顔を覆う掌から、薄く弧を描いた唇が見えた。

「確かにお前は目障りだ。お前のせいで、オレは次へ進めない。だが」

そこで一旦言葉を切った。

「誰かの生き死になど、あくまで“結果”でしかない。違うか？」

憐は指の向こうに見える、狂気に狂った眼を見据えた。何という、

おぞましい目をする人間がいるのだらうと思った。これを野放しにすることは、飢えた猛獣を街に放つことにも勝る。

これほどの知能を持った者が、人の心を持ち合わせていないのだから。

「オレは、必ずお前を止める。オレがお前の最後の砦となる。日本こゝから出すつもりはない。誰かを死なせることもな」

「それが、お前自身の命を失うことになってモか？」

見開かれた目は光を湛えたまま瞳孔が萎縮し、笑う口元からは濡れた白い歯が覗いていた。

「ああ」

迷いなど無い。恐れさえも。ジョーカーとは異なる黒一色の瞳は、揺らぐことの無い意思と全てを包み込む覚悟を持っていた。

「そう、それでなければ面白くない」

ジョーカーは顔を元のボーイに戻す。その瞬間、明かりが戻った。

「お前は必ず、近いうちに死ぬだらう。オレがそう仕組む。楽しみにしてるがいい」

不敵な笑みを浮かべながら会場を去っていった。

「あいつ」

それを侠輔が見とめた。

(逃がすか！)

急いでその後を追いかけて、扉を出ようとしたその時。

「おや、侠輔君？」

侠輔は、その呼びかけにドキリとした。裕福そうな白髪の男が、少々驚いたように侠輔に声をかけていた。

「君、侠輔君だよね？」

「人違いですよ。私はただの警備の者です」

「え、でも……」

「あれ？ 白田会長さんじゃないですか」

偶然なのか、それともわざとなのか。シャンパンを片手にした孝太郎が、侠輔に話しかけていた男へ割り込むように声をかけた。

「おお！ 柳本君、久しぶりだねえ。事業は順調だそうじゃないか」

「ええ、おかげ様で。白田会長もお元気そうですね」

「ああ、まだまだ現役さ」

男の気が孝太郎へそれたのを機に、侠輔は何事もなかったかのように走り出した。孝太郎は話を続けながら、廊下を走ってゆく侠輔を思う。

(侠？ いつまでそうやって、逃げ続けるつもりなんですか)

シャンパンのグラスに映る侠輔の後姿が、泡の中へと消えていった。

\*\*\*

トイレを出た双葉は、廊下を焦ったように走る侠輔を見つけた。

「上照さん？」

誰かを探している様子の侠輔の背に、そっと声をかける。そうしたのは、侠輔が会場では他人のフリをしると言ったからである。

「どうしたんですか」

「どうしたもこうしたもねえ。現れたんだよ、ヤツが！」

サッと双葉の顔色が変わる。

「ボーイの格好した怪しいやつ、見なかったか？」

それに首を振る。侠輔は頭をかいた。彼の困った時のくせだ。

「ちっ、逃げられたか。いや、まだ近くにいるかもしんねえ。オレから離れるな」

「は、はい!」

不意に頬を風が撫でる。

「あ、あそこ。非常階段の扉が……!」

「シッ」

双葉の二の腕をしっかりと握り、侠輔はそっと扉へ近づいて行く。まるで二人を誘うかのように、扉は音を立てて揺れていた。

慎重に足を踏み入れた非常階段は、ついでに明かりがついていない。ガラス張りのそこを、向かいビルやイルミネーションの光がぼんやりと辺りを照らしていた。上も下もはつきり見えず、耳をすませてみたが、誰かが階段を歩くような音も聞こえない。

「そつち何か見えるか？」

階下を覗いている双葉に声をかける。

「いえ、全然何も」

「ダメだ。これじゃかえって危ねえ。引き返してお前んとこの奴らと合流するぞ」

「はい」

扉を振り返った瞬間、パタンと音を立ててそれは閉じられた。不意に訪れた暗がりの世界に、焦ったようにノブに手をかける。だが

271

「あれ、開かない……」

「ゲツ……そういやここの扉、緊急時以外は外からは開かない構造だった」

「ちよ、これどうするんですか？」

暖房の入っていない非常階段は寒い。それを誰かが気づくまで待つてると言うのか。吐く吐息が白かった。

「ど、どうするってまあ……」

頭をかいていたらしい手を、ピタリと止めた。



「それはそれでいいんじゃない？」

イルミネーションの赤い光に浮かび上がった侠輔は、ニンマリと笑っていた。背筋が凍り、冷や汗が流れる。眼がギラついて見えるのは、気のせいだろうか。

「あ、あの」

逃げるように後ずさりしたが、すぐに冷たい壁にぶつかって身動きが取れなくなった。ゆっくりと近づくと近づく足音が、得体の知れないゾツとした感情を生み出す。

暗闇から伸びてきた大きな手にもものすごい力で体を押さえつけられ、手首を頭の上で一つに縫い付けられた。

「な、何するんですか！」

押さえつけられたところは指が食い込み、鈍い痛みを感じる。抵抗はするが、所詮は女の力。大の男に敵うはずなどなかった。現に今も、両手を軽々と片手でねじ伏せられている。

「お、大声出しますよ」

「出せば？ 誰も来ねえと思うけど」

「いい加減にしてください！」

「怒んなよ。せつかく男と女が二人つきりなんだ。楽しまねえと損だろ」

侠輔は双葉のうなじに鼻を近づけ、香りを肺一杯に吸い込んだ。そのまま流れるように、耳たぶに軽く唇を寄せる。無理やり足を割り入れられ、余計に身動きが取れなくなった。

「っ何言って」

反応を楽しむように、首筋に息を吹きかけられた。全身に鳥肌が立つ。

「いい加減にしないと、警部さんに」

「好きなんだろ？ オレのこと」

「！」

言葉を失った双葉に、侠輔の口もとは“やっぱりな”とでも言いたげに妖しく歪む。

「お前、自分では気づいてねえみたいだけど、分つきり易いんだよなあ。まあそういうトコも可愛いけどよ」

唇を親指の腹でスーツと撫でられた。ゾクゾクとした感覚が襲う。また自分をからかっているんだろう。そくに違いないと双葉は思った。

「やめてください、こんな冗談！」

「冗談じゃねえんだけど」

「はあ？」

「オレも、お前のことが好きだって言ったら？」

「……え？」

侠輔の顔は、真剣そのものだった。もう笑ってもいなければ、いつものように“バーカ”などふざける様子もない。

「だって、か、彼女がいるんじゃない？」

「未緒とは別れる。だから、オレと付き合ってくれないか。絶対に、」

泣かせたりしねえから」

そう言う侠輔こそ、どこか泣きそうなほどに切ない表情を浮かべていた。赤や青の電飾が変わるたび、彼の表情も変わって見える。唇は、わずかに震えているようだった。

(嘘……こんな)

「双葉、もう自分の気持ちを隠しきれねえんだ」

分かって欲しいと、侠輔は胸が張り裂けそうな顔をしていた。双葉の体から、力が抜ける。

「上照、さん……」

侠輔はまぶたを閉じ、ゆっくりと唇を寄せた。降り始めた雪が、影となって二人に舞い落ちる。

「……じゃないですよね」

「……」

触れる寸前で、ピタリと侠輔の動きが止まった。

「何言ってるんだ？ オレは」

「あの人は、いつもタバコのおいを纏ってました。でもあなたからは匂いがしない。あなた、誰？」

双葉の強い視線に、“しまった”とばかりに額に手を当てた。

「ああ……そういえばそうだったか。お前も中々鋭いじゃないか。なあ？」

侠輔の姿をした男は、心底可笑しそうに大声で笑った。それは非常階段に響き渡り、身の毛がよだつほどの恐ろしさを覚えた。

男は自分の顔を掌でそつとなでる。見覚えのある顔に、息を大きく吸い込んだ。

「久しぶりだな」

「あなた　！」

豪華客船に乗っていたあの男だ。やはりヤツがジョーカーだったのかと、双葉は唇を噛み締めた。

「着てきてくれたんだな。そのドレス」

怯える双葉に、ジョーカーは再び体を摺り寄せてくる。

「やめて！」

「似合ってるじゃないか。サイズもピッタリなはずだ。特にこの辺りはな」

そう言っつて、胸の横を指で優しく撫でられた。あの日キスされ、胸を触られた記憶が鮮明に甦ってくる。

「何が目的なのよ！」

「簡単なことだ。ただお前から、プレゼントを受け取ろうと思っただけ。オレだけ一方的に贈り物をするのは、フェアじゃないだろ？」

双葉の首の、美しいネックレスを指で軽く触る。

(い、いつの間にこんなもの　！)

「フェアもなにも、そっちが勝手に贈ってきたんじゃない！ 頼んだ覚えは無いわよ、この詐欺師！」

双葉の必死の言葉の抵抗に、ジョーカーは余裕の笑みを浮かべていた。

「いいのか？ このフロアのどこかが爆発しても」

その手には、起爆装置らしきものが握られていた。わざとらしく目の前で揺らし、動揺を誘う。

双葉はそれに身をこわばらせ、怯えたように男を見上げた。

(ハッターリ……よね)

そうは思っても、もし本物だったら？ 自分のせいで、誰かが傷ついたらどうしよう。その恐怖に囚われ、身動きが取れなくなった。

「そう、それでいい」

なまめかしい動きで双葉の細いあごをなぞると、それを首へ下ろしながらゆっくり唇を近づけてくる。バックに見えるネオンが虚しさを煽っていた。

(いや……助けて)

あの時とは違う。心に想う男がいるのだ。イケメンだからなどと、そんなことは思えなくなっていた。

薄く涙を浮かべ、ギョツと眼を瞑る。

(ヤダよ……っ上照さん)

「あれ、何してんだ？」

突如差し込んだ一筋の光に、双葉はハッと眼を開いた。目の前にいたはずの男は、もうどこにもいない。まるで全て自分の妄想だったのだろうかと思えるほど、あの男がいた気配はすっかりと消えていた。心配そうに顔を覗き込む侠輔を、恐る恐る見つめる。

「上照……刑事……？」

今度のは本物なのだろうか。そう思った瞬間、フワリいつものタバコの香りが漂った。

その香りに、胸が締め付けられる。

ホツとしたような表情の双葉に、侠輔はなぜかしたり顔を浮かべた。

「ああ、お前さては出られなくなっただろ。勘弁しろよ、ただでさえジョーカーに、してやられたってのに」

「まったくよ、と忌々しそうにネクタイを緩める。

（そうよ、あんの男！）

もう少してキスされるところだった！ と安心した途端怒りがこみ上げてきた。

（今度あつたらぶん殴ってやる！）

一人鼻息を荒げ、拳を握りしめて息巻く双葉に、侠輔はおかしなものを見るような目で見ていた。

「ま、今回はもうこれで撤収だってよ。主催者側からも、苦情きちまうし。やってらんねえ」

どうやら警視庁の動向のチェックと、憐へのアイサツをするつもりだけだったらしい。完全に舐められている。その証拠に、向こうはこちらの情報を存分に搾り取ったというのに、こちらは何の手がかりも掴めなかった。おまけに今回の件でMSIの信用もがた落ちである。

最悪だと侠輔は語った。

「早く出て先に行ってる。オレはもうちょっとだけこの辺見回るから」

「は、はい」

憐たちは無事だろうかと、少々不安が過ぎつつ。急いで会場へと戻る。走り出そうとした時、首のものに気づいて足を止めた。

まるで星の欠片でも取ってきたかのように輝くネックレス。物に罪はないというが、ヤツから貰ったものである以上、何か仕掛けがあるのではないかと不安になる。

（あ、そうだ。もしかしたらこれ、何か手がかりになるかも……）

侠輔からあの鑑識の人に渡しておいて貰おうと、双葉はもと来た道を引き返した。だがちょうど角に差し掛かったとき、聞こえた話し声に足を止める。

「もしもし　？」

（電話……）

廊下に立ち尽くしながら、話し終わるまでここで待とうかどうしようか、とまごまごとしていた。

「未緒？ ゴメンな今日。行けなくて」

「……！」

聞いてはいけない、と思ったがなぜかそこから動けなかった。

「届いたか？ プレゼント……まあな、ずっと欲しそうにしてたろ。早く見て欲しくて……え？ 別に値段なんか気にすんなよ。お前に喜んでももらえればそれでいいんだから。レストランの詫びも入ってるしな」

幸せそうな声色に、心が沈んでゆく。それと同時に、ジョーカーが扮した侠輔の言葉が甦ってきた。

『オレも、お前のことが好きだって言ったら？』

『未緒とは別れる。だから、オレと付き合ってくれないか』

何ということをしてくれたんだ、と思った。

(夢、見ちゃったじゃない……)

冷たい壁に手をついた。それはまるで、今の自分の心を表しているかのようだ。

「……ああ、オレも。愛してる」

それを聞きながら、双葉はつらそうに瞳を閉じた。



くくおまけくく

「双葉さん」

「風雅……あんだどこにいたのよ」

廊下をトボトボと歩く双葉に、風雅は手を振りながら駆け寄ってきた。それに疲れたようにため息をつく。

「クリスマスのプレゼントを用意してたんです」

「プレゼント？」

もうその話はよしてくれと言いたい双葉だが、風雅は能天気窓の外を指差した。

「さあ！ あれをご覧ください！」

「あれ……！」

向かいのビルの窓の光を使って、文字が書かれてある。何というベタな“ロマンチック演出”だろう。それでも、何だか元気付けられる気がした。が

くメリークリスマス ブタバさん！く

「ちょっと！ ブタって誰のことよ！ 何この壮大な嫌がらせ！  
何か私に恨みでもあんの？」

大変な間違いに風雅も慌てた。

「え？ ち、違いますよ！ あ、あれ？ さっきまで」

「このモジャモジャ頭ア！」

聖なる夜に、悲痛な叫びが響き渡った。

\*  
\*

「聖なる夜……」

腕を組んでホテルを遠くに見つめ、男は深緑と茶色の異なる景色を眺めていた。

「さあ、次は何をして遊ぼうか」

小さな笑い声が、静かな大都市を不気味に包み込んでいた。

M e r r y X m a s

「えー皆様、新年はいかががお過ごしだったでしょうか。こちらは年末に現れたジョーカーのせいでごたつき、事情聴取や現場検分等で忙しい年越しを過ごしております。その甲斐も無く結局何も手がかりは得られませんでしたが、所長と僕が必ずアイツを逮捕してみせます。それでは今年もどうぞよろしく。よいお年を」

「夕霧、何してんのよ」

なにやらブツブツつぶやいていた夕霧の背中に、双葉はそう声を掛けた。

「いいわよね、お子様はお気楽で」

そういう双葉も全く忙しそうには見えない。だが「お正月のお餅とおせちを食べ過ぎた」とアゴについた肉を気にして、小さなピンク色のダンベルを懸命に上下させていた。

夕霧はそんなことをするくらいなら、食べ過ぎなければいいのと思った。だが、論理的な答えが返ってくるとも思えずに、心の内に秘めておく。余計な労力は使わないに限るのだ。

年始だというのに、探偵事務所は休みなく営業していた。とはいえ、いつも休んでいるようなものであるし、事務所は隣の自宅と兼用されているので、“営業している”という緊張感は全く無い。隣のデスクの上に積みあがった雪山のような年賀ハガキは、この事務所宛ではなく隣個人宛のものであった。あの量をやりとりするのは、ものすごく骨だろうと双葉は思っていた。まさかメールの一斉送信で済ませるわけにもいかないだろう。

「そついえば所長は？」

双葉は大してやってもいないのに、「疲れたあ」と大げさにダンベルを置いた。ローテールブルのミネラルウォーターをグビグビと飲み干す。ちなみに憐の護衛の侠輔は、本庁の会議に出席するためここにはいない。だからこそこれ、ほどまでにおっぴろげな態度なのである。

「所長は親戚筋や河合グループ関係者の挨拶で海外。でももう帰ってくるはず」

憐は年末年始、本当に急がしそうであった。年賀状のこともあるが、それよりも挨拶回りが大変らしい。憐が”どうぞよろしく”と行くというよりは、こちらにぜひ顔を出してもらいたいと河合グループの会社やその親戚筋の企業から引つ張りだこだった。なんでも憐が挨拶に行ったところはその年よい成績が残せるらしく、縁起物扱いされているらしい。

なのにこの探偵事務所だけは、いつも赤字なのは非常に残念なところである。

「へえ、やっぱりお金持ちは新年早々違うわね」

せめて国内旅行くらいしたいーい、とソファーに座ったままのけぞった。その時、ドアがバンツと勢いよく開き、風雅が興奮気味に入ってきた。

「双葉さん！」

まるで猛牛のように鼻息が荒い。

スパンコール輝く無駄な装飾の多いエコバッグ（だが3万円ほどするらしい）からネギをはみ出させ、風雅は一直線に双葉のもとへ駆け寄った。その一生懸命さに引いている双葉に構わず、風雅はサツとチケットを二枚差し出した。

「見てください！ コレ！」

「……何なのよ」

と覗き込み、双葉はハツと息を呑んだ。

「お、温泉旅行ご招待券！？ しかもここすつごく有名な老舗旅館じゃない！ 予約も半年先まで一杯って言う」

「はい！ くじ引きで当てたんです！ 一等賞！」

風雅は嬉しそうにガッツポーズする。それは坊ちゃんではなく、完全に一般庶民の姿であった。

「やったわね。あんたでも役に立つんだ」

失礼なことを言いながら、双葉はそれをまるで赤ん坊のように高々と上げた。彼女には、チケットから後光が差しているように見えるらしい。少々眩しそうに眼を細めていた。

「ね、これで社員旅行でもしない？ 所長も喜ぶわよ、きつと」

「でもそういうのって、大概ペアじゃないの」

夕霧のいうとおりであった。チケットは二枚、つまり二人分しかない。

「ペアか……」

「あの、で、ですから双葉さん。良かったら僕と、その」

風雅の言葉は双葉の妄想に、徐々にかき消されてゆく。BGMにすらなることなく、チケットをじっと見つめながら物思いにふけていた。

（ペ、ペアで温泉……。もし上照刑事と一緒にに行けたりしたらきつと……。だ、ダメダメ！ あの人には彼女がいるのよ？ それも私とはまったく違うような頭も良くってなおかつ美人で……。でも、もし万が一そうになったらどうしよう！ 二人で浴衣着て、温泉入ったり、夜はオレンジ色に照らされた布団の上で……。キヤーなに考えてんのよ！）

「あ、あの双葉さん聞いてます？」

顔を赤らめて体を振る双葉に、風雅は悲しげな眼をしていた。

その時、玄関の扉が開く音とゴロゴロとキャリーバッグを転がす音が聞こえた。

「あ、もしかして……」

双葉がチケットから顔を上げてドアを見つめると、それはゆっくりと開いた。

「ただいま」

そろっていた事務所のメンバーたちにさわやかに微笑む。

本年も相変わらずピッチリとスーツに身を包んだ隣が、大きな荷物を持って帰ってきた。長時間飛行機に乗っていた疲れも見えない。どこか、国際線のパイロットのような洗練さが垣間見えた。

「所長！ お帰りなさい！ あと明けましておめでとございます」

「おめでと。これは皆への土産だ」

「わあ、ありがとうございますー！」

双葉は大きな黒いバッグを受け取ると、そそくさとそれをローテーブルに置き、さっそく中をあらためた。

どうやらヨーロッパ各地へ赴いていたらしく、ベルギーの高級チヨコやドイツの高そうなソーセージ、さらにフランスブランドの財布やワイン、ロシアの美しい人形まで入っている。

「こ、ここれ私たちで分けちゃっていいんですか？」

とんでもなく高額になるであろうその土産の山に、双葉は恐れおののいた。

「ああ。皆で仲良く分けてくれ」

コートをハンガーにかけながら、まるで子供にお土産を買ってきた父のような台詞で振り返った。

「で、で、でもこれ……」

双葉はHから始まる高級ブランドの財布に手が震えた。これは以前テレビで見た。フランス直営店限定のもので、確かその値段に、取材した芸能人が言葉を失っていたヤツだ。やっとのことで「車買えるやないですか、バンビーノ！」「それイタリア語だが」『欧州か！』『そうだよ！』とか何とかやっていたはず。

（もらっちゃっていいの？ 生涯に入れる金額より、絶対財布の方

が高いと思っただけ……！)

迷ったが“くれる”と言っていていれるのだ。それをササツとスカートに挟んだ。ありがたく頂戴することにしたのだ。今度何かお礼はしなくちゃとは考える。

「温泉”……?”」

お土産を詰めていたバッグに、無残にも下敷きになっていたチケットを憐が取り上げた。双葉はさっそくチョコレートをほお張っている。

「風雅が当てたんです。折角なんで皆で行きたいんですけど、ペアなんですよね」

ああ、何というマイルドな舌触りだろうと自然と笑顔がこぼれる。夕霧はソファーに放り出されたダンベルを目の端に映しながら、あいつの二重アゴは一生涯らないだろうと思っていた。

「そうか。ならオレと夕霧の分はこちらで取るう。ちょうど旅の疲れを取りたいと思っていたところだ」

「でもそこはいつも予約で一杯って……」

「この旅館に知り合いがいるんだ。何とか空けてもらえるよう頼んでみるさ」

予約に隙を作れるくらいなのだ。その知り合いとやらもただ者ではないのだろう。

かくして温泉旅行の前段階は整った。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2978n/>

---

天然探偵    LEN

2011年10月6日14時18分発行